グリム童話の世界

シンデレラと白雪姫

はじめに

さて、今回の『グリム童話の世界』（シンデレラと白雪姫その他）という作品は、世界的にも有名な「赤ずきん」をはじめ、ヘンゼルとグレーテル、灰かぶり（シンデレラ）、蛙（かえる）の王様、いばら姫、ラプンツェル、白雪姫、ブレーメンの町楽隊、その他、それに加えて、「ジャックと豆の木」が入っています。これはもちろん、「グリム童話」ではなく、「英国（イギリス）の昔話」であるが、非常に有名な作品なので敢えてここに載せたものである。

ところで、最も有名な「シンデレラ」には、グリム童話の「灰かぶり」（アッシェンプッテル）とペロー童話の「灰だらけ姫」（サンドリヨン）という二つの作品があり、また、「眠（ねむ）れる姫」にもグリム童話の「いばら姫」とペロー童話の「眠れる森の美女」という二つの作品があり、これらの作品の「内容の違い」については、読んでもらえれば、誰にも容易に分かることであり、それゆえ、今回は、それぞれの作品の「説明」（解説）などはできるだけ排除して、何の先入観もなく、ただただ「作品」だけを丁寧に読んでもらって、読者一人一人にその「内容」をじっくりと深く味わってもらう、その方がよいのではないかという考え方であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和四年八月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

グリム童話の世界
はじめに
一、　赤ずきん
二、　ジャックと豆の木（英国昔話）
三、　ヘンゼルとグレーテル
四、　灰かぶり（シンデレラ）
五、　星の銀貨
六、　蛙の王様
七、　いばら姫
八、　ラプンツェル
九、　ルンペンシュティルツヒェン
十、　白雪姫（と七人の小人）
十一、ブレーメンの町楽隊
十二、灰だらけ姫（サンドリヨン）
十三、眠れる森の美女
十四、長靴をはいた猫
※　参考文献

グリム童話の世界

シンデレラと白雪姫

赤ずきん

赤ずきん

一、名の由来とお使い……

むかしむかし、あるところにちいさな愛くるしい女の子がありました。この子ときたら、ほんのちょっと見ただけの人からもかわいがれたくらいですが、この子を誰よりも一番かわいがっていたのは、何と言っても、この子のおばあさんであり、この子に何をしてあげたらよいのかと困るほどのかわいがりかたでした。――ある時、おばあさんは、赤いビロードでこの子にずきんをこしらえてやりました。すると、それがまたこの子によく似合って、それからはもうほかのものはかぶらなくなったので、みんなはこの子のことを、赤ずきん、赤ずきん、と言うようになったのです。

ある日のこと、お母さんは、この子を呼んで言いました。「……さあ、おいで、赤ずきん、ここにね、大きな上等のお菓子が一つと、ぶどう酒が一本あるの。これを、おばあさんのところへ持ってってちょうだい。おばあさんは、ご病気で弱っていらっしゃるが、これを上げると、きっと元気になるわよ。それでは、暑くならないうちに行ってらっしゃい。それから、外へ出たら気をつけて、お行儀よくしてね、やたらに、知らない横道へ行ったりなんかしないのですよ。そんなことをして、転んだりしたら、せっかくの瓶はこわれるし、おばあさんに上げるものがなくなるからね。それから、おばあさんのお部屋に入ったら、まず、お早うございます、を言うのを忘れずにね。入ってすぐにお部屋の中をきょろきょろ見まわしたりなんかしないでね」と言うと、「……そんなこと、あたし、ちゃんと出来るわよ」と、赤ずきんは、お母さんにそう言って、指切りをしました。

二、途中、おおかみに出合う

ところで、そのおばあさんは、村から三十分ぐらいかかる森の中に住んでいました。そして、赤ずきんが、いよいよその森にさしかかったとき、ばったりと出くわしたのは、おおかみでした。でも、赤ずきんは、おおかみというものがどんな悪いことをする動物だか知らなかったので、おおかみをこわいとは思いませんでした。そして、「……こんにちは、赤ずきん」と、おおかみが声をかけました。すると、赤ずきんは、「……まあ、こんにちは、おおかみさん」と明るく応えるのでした。おおかみは、「……どこへ行くの、こんなに早くから、赤ずきん」と聞くと、赤ずきんは、「……おばあさまんとこよ」と答えるのでした。おおかみは、「……なにもってるの、まえかけの下に」と尋ねるので、赤ずきんは、「……お菓子とぶどう酒よ。きのう焼いたの。これ、病気で弱ってるおばあさまにいいのよ。力がつくのよ」と答えると、おおかみは、「……どこ？　おばあさんのおうちは」と聞くのでした。すると、赤ずきんは、「……森のずうっと奥のほう、まだたっぷり十五分はかかるわ。大きなかしわの木が三本あって、その下におばあさまのおうちがあるのよ。下には、はしばみの生垣があるから、すぐにわかるわ」と、素直に答えるのでした。

三、きれいな花を集めに森の奥へ……

おおかみは、心の中で考えました。「……若い、やわらかそうな小娘だ、こいつは脂肪がのって、おいしそうだ。ばあさまよりは、ずっと味がよかろう。ついでに両方一緒に、ぱくりとやる算段をしなきゃならんな」と。そこで、おおかみは、しばらくの間、赤ずきんとならんで歩きながら、道々こう話しました。「……ねえ、赤ずきん、ちょいと見てごらんよ。そこいらじゅうに咲いてるきれいな花をさ。どうしてまわりを見ないの？　小鳥があんなに愛らしく歌をうたっているのに、赤ずきんは、少しも聞こうともしないじゃないか。まるで学校へでも行くように、わき目もふらずに歩いているじゃないの、そとは、森の中はこんなに浮々とおもしろいのになあ」と言うのでした。

そう言われて、赤ずきんは目を上げました。すると、お日さまの光が、木と木の茂った中からもれて、あっちでもこっちでも日の光がたのしそうにダンスをおどったり、また、どこもかしこもきれいな花がいっぱい咲いているのが目に入りました。そこで、「……あたし、おばあさまに、とりたての花を花束にしておみやげに上げたら、おばあさまは、きっとお喜びになることよ。まだ朝早いんですもの、だいじょうぶ、時間までに行かれるわ」と、こう考えて、森のわき道へと入り込んで、いろいろの花をさがし始めました。そして、一つ花を摘むと、その先に、もっときれいな花があるのじゃないか、という気がして、花から花を追いかけて、だんだん森の奥へ奥へと入って行きました。

四、一方、おおかみは、……

ところが、その間に、すきをねらって、おおかみは、すたこらすたこら、おばあさんのお家へとかけて行きました。そして、とんとん、戸を叩きました。「……おや、どなた」と聞くと、「……赤ずきんよ。お菓子とぶどう酒をお見舞いに持って来たのよ。開けてちょうだい」と言うので、「……把手を押しておくれ。おばあさんは病気でよわっていて、起きられないからね」と言うのでした。おおかみは、把手を押すと、戸は、ぼんと開き、おおかみは、すぐと入っていって、何にも言わずに、いきなりおばあさんの寝ているところへ行って、あんぐりひと口に、おばあさんを飲み込みました。それから、おばあさんの着物を着て、おばあさんのずきんをかぶって、おばあさんの寝床にごろりと寝て、カーテンを引いておきました。……

五、おばあさんの家へと行くと、

一方、赤ずきんは、お花を集めるのに夢中で、森じゅうをかけまわっていました。そうして、もう集めるだけ集めて、このうえ持ちきれないほどになった時、おばあさんのことを思い出して、またいつもの道にもどりました。おばあさんのうちへ来てみると、戸が開いたままになっているので、変だと思いながら中へ入りました。すると、何かがいつもと変わって見えたので、「……変だわ、どうしたのでしょう。今日はなんだか胸がわくわくして気味の悪いこと。おばあさんのところへ来れば、いつだって楽しいのに」と、思いながら、大きな声で、「……おはようございます」と、呼んでみました。でも、返事はありませんでした。そこで、寝床のところへ行って、カーテンを開けてみました。すると、そこにおばあさんは、横になっていましたが、ずきんをすっぽり目まで下げて、何だかいつ

もと様子が変わっていました。「……あら、おばあさん、なんて大きなお耳をしているの」と聞くと、「……おまえの声が、よくきこえるようにさ」と答え、「……あら、おばあさん、なんて大きなお目めしているの」と聞くと、「……おまえのいるのが、よく見えるようにさ」と答える。また、「……あら、おばあさん、なんて大きなお手てしているの」と聞くと、「……おまえが、よくつかめるようにさ」と答え、「……でも、おばあさん、まあ、なんて気味の悪い大きなお口だこと」と言うと、「……おまえを食べるにいいようにさ」と、こう言うが早いか、おおかみは、いきなり寝床から飛び出して、かわいそうに赤ずきんを、ただひと口にあんぐり食べてしまいました。これで、したたかお腹をふくらませると、おおかみはまた寝床にもぐって、ながながと寝そべって休みました。やがて、ものすごい音を立てて、いびきをかき出しました。

六、狩人が家の中に入ると……

ちょうど、その時、狩人が表を通りかかって、はてなと思って立ちどまりました。「……ばあさんが、すごいいびきで寝ているが変だな。どれ、何か変わったことがあるんじゃないか、見てやらずばなるまい」と。そこで中へ入ってみて、寝床のところへ行ってみると、おおかみが横になっていました。「……やや、こんちきしょうめ、とうとう見つけたぞ。長い間、ぎさまを探していたんだ」と言って、そこで、狩人は、すぐに鉄砲を向けました。しかし、ふと、ことによると、おおかみのやつ、おばあさんをそのまま飲み込んでいるかも知れないし、まだ中で生きているかも知れないぞ、と思いつきました。そこで鉄砲をうつことはやめにして、そのかわり、はさみを出して、眠っているおおかみのお腹をじょきじょき切り始めました。ふたバサミ入れると、もう赤いずきんがちらと見えました。もうふたバサミ入れると、女の子が飛び出してきて、「……まあ、あたし、どんなにびっくりしたでしょう。おおかみのお腹の中の、それは暗いったらなかったわ」と、言いました。――やがて、おばあさんも、まだ生きていて、這い出して来ましたが、もう弱って虫の息になっていました。赤ずきんは、さっそく、大きな石ころを、いくつもいくつも運んできて、おおかみのお腹の中にいっぱい詰めました。やがて、目が覚めて、おおかみが飛び出そうとすると、石の重みで倒れて死んでしまいました。――さあ、三人は大喜びで、狩人は、おおかみの毛皮をはいで家へ持って帰りました。また、おばあさんは、赤ずきんの持って来たお菓子を食べたりぶどう酒を飲みました。それで、すっかり元気を取り返しました。そして、赤ずきんは、「……お母さんにいけないと言われた時には、自分ひとりで勝手に森のわき道へ入りこむようなことは、もう二度と再びしないわ」と、そう思うのでした。（完）

七、続きのお話……

ある時、赤ずきんは、前と同じように、年を取ったおばあさんのところへお菓子を持って行くと、別のおおかみが話しかけてきて、赤ずきんを往来から横道へと連れ込もうとしたのです。けれども、赤ずきんは用心深く、わき目も振らずにすたすた歩いて行って、おばあさんに、「……いま途中でおおかみに会ったら、おおかみはご機嫌ようって挨拶した

けれど、悪巧みのあることはぎょろりと見た目で知れたのよ」と、おばあさんにお話をしてから、「……あれがもし往来でなかったら、おおかみはあたしを食べちまったでしょうね」と言うのでした。すると、おばあさんは、「……おいで！」と言い、「……戸へ錠(じょう)を下ろして、おおかみが入れないようにしてやりましょう」と、おばあさんは言うのでした。

やがて、まもなく、おおかみがとんとんと戸をたたいて、「……開けてちょうだいな、おばあさん、おばあさまにお菓子もってきたのよ」と、呼び立てました。けれども、二人は、うんともすんとも言わず、戸も開けませんでした。すると、ごましお頭の悪いおおかみは、二、三べん、しのび足で家のまわりをぐるぐる歩いてみましたが、とうとう屋根の上へと跳び上がりました。それは、赤ずきんが夕方うちへ帰るまで待っていて、出て来たら、あとからそうっとつけて行って、暗がりで赤ずきんを食べてしまうつもりなのです。ところが、おばあさんは、おおかみのそのたくらみに気がつきました。

そこで、「……赤ずきんや、手おけを持って来ておくれ。昨日ね、あばあさんは腸詰め（ソーセージ）をこしらえたのさ。おまえ、あの腸詰め（ソーセージ）をゆでた水を、この水ぶねの中へ入れておくれな」と、言いつけました。赤ずきんは、何べんも何べんもその水を運んで、とうとう大きな大きな水ぶねを一杯にしました。そうすると、腸詰め（ソーセージ）のいい匂いが、おおかみの鼻の穴へ、ぷんぷん入って来ました。

おおかみは、鼻をひこひこさせて、下をのぞいてみました。そのうちに、首をあんまり伸ばし過ぎたので、身体(からだ)をささえていられなくなって、ずるずる、すべり出しました。そして、ずるずる、ずるずる、屋根からすべって、ちょうどその大きな水ぶねの中へすべり落ちて、おぼれ死んでしまいました。……一方、赤ずきんは、いそいそと、うちへ帰って行きましたが、もちろん、その途中、誰にもどうもされることもなかったのです。（完）

＊　＊

ジャックと豆の木

（イギリス昔話）

ジャックと豆の木

一、母親とジャックの暮らしぶり

昔々、イギリスの、アルフレッド大王の時代のことでしたが、ロンドンの都から遠く離れた田舎の小屋に、やもめの女の人が、小さい息子の「ジャック」という子と寂しく暮らしていました。それは、もうかけがえのない「一人息子」でしたし、それに、随分のんきで、ずぼらで、怠け者でしたが、ほんとうは気だてのやさしい子でしたから、母親は、明けても暮れても、「ジャック、ジャック」と言って、それこそ目の中にでも入れてしまいたいくらいに可愛がって、何にも仕事はさせず、ただ遊ばせておきました。

こんなふうに、のらくら息子をかかえた上に、このやもめの女の人は、どういうものか運が悪くて、年々ものが足りなくなるばかりで、ある年の冬には、もう手まわりの道具や衣類まで売ってしまって、手に入れたお金も（手内職などをして）わずかばかり稼いで貯めたお金も、すべてきれいに使ってしまい、とうとう家のなかでどうにかお金になるものと言ったら、たった一頭残った「牝牛」だけになってしまったのです。

そこで、ある日、母親は、息子の「ジャック」を呼んで、「……ほんとうに、お母さんは、自分の身体を半分持って行かれるほど辛いけれど、いよいよあの牝牛を手離さなければならないことになったのだよ。お前、ご苦労だけれども、市場まで牛をつれて行って、いい人を見つけて、なるべく高く売って来ておくれな」と言うのでした。――そこで、息子のジャックは、その「牝牛」をひっぱって（市場へと）出かけるのでした。……

二、牝牛と豆の袋との交換。

さて、しばらく歩いて行くと、途の向こうから「肉屋の親方」がやって来て、親方は、「……これこれ坊や、牝牛なんかひっぱって、どこへ行くのだい？」と声をかけるので、ジャックは、「……売りに行くんだよ」と答えるのでした。すると、親方は、「……ふうん」と言いながら、片手に持った帽子を振って見せました。がさがさ音がするので、気がついて、ジャックは、帽子の中をふと覗いて見ると、奇妙な形をした豆が「袋の中」からちらちら見えました。「……やあ、きれいな豆だなあ」と、ジャックはそう思って、何だかむやみとそれが欲しくなりました。その様子を、相手の男は、すぐにも見つけてしまいましたから、この少し足りない子供を、うまくひっかけてやろうと思って、わざと袋の口を開けて見せて、「……坊や、これが欲しいんだろう」と言うのでした。

ジャックは、そう言われて、ニコニコ顔になると、親方はもったいらしく首を振って、「……いけない、いけない、こりゃあ不思議な魔法の豆さ。どうしてただでは上げられないよ。どうだ、その牝牛と取り替えっこしようかね」と言うので、ジャックは、その男の言うなりに、牝牛と豆の袋とを取り替えっこしました。そして、お互いにこれはとんだ儲けものをしたと思って、ほくほくしながら別れました。

三、家へと帰ると、母親は……

ジャックは、豆の袋を抱えて、家まで飛んで帰りました。家へ入るか入らぬうちに、ジャックは、「……お母さん、今日はほんとにうまく行ったよ」と、いきなりそう言って、大得意で、牛と豆の『取り替えっこ』の話をしました。ところが、母親は、それを聞いて喜ぶどころか、あべこべにひどく叱りました。「……まあ、何という馬鹿なことをしてくれたのだね。ほんとに呆れてしまう。こんなつまらない、えんどう豆の袋なんかにつられて、大事な牝牛一頭を元も子もなくしてしまうなんて、神さま、まあ、この馬鹿な子をどうしましょう」と言いながら、母親はぷんぷん怒って、いまいましそうに、窓の外へ、袋の中の豆を残らずすべて投げ捨ててしまいました。そして、つくづく情けなさそうに、しくしくと泣き出しました。――きっと喜んでもらえると思っていたのに、あべこべに、生まれて初めて、お母さんのこんなに怒った顔を見たので、ジャックはびっくりして、自分も悲しくなりました。そして、何にも食べるものがないので、お腹の空いたままで、その晩は、早くからころんと寝てしまいました。

四、翌朝、大きな豆の木を見て、……

その翌る朝、ジャックは目を覚まして、もう夜が開けたのに、何だか暗いなあと思って、ふと窓の外を見ました。するとどうでしょう、きのう庭に投げ捨てた「豆の種子」から、芽が生えて、ひと晩のうちに、太い丈夫そうな「豆の大木」が見上げるほど高く伸びて、それこそ庭いっぱいうっそうと茂っているではありませんか。

びっくりして飛び起きて、すぐにと庭へ下りてみると、高いといって、その豆の木は、それこそ、途方も知れない高さに、空の上までも伸びていました。それは、つると葉とが絡み合って、空の中をどんと突き抜けて、まるで豆の木のはしごのように、しっかりと立っていました。「……あれを伝わって、てっぺんまで登って行ったら、全体どこまで行けるかしら」と、そう思って、ジャックは、すぐにもはしごを登り始めました。だんだん登って行くうち、ジャックの家は、ずんずん、ずんずん、目の下に小さくなって行き、そして、いつのまにか見えなくなってしまいました。それでもまだてっぺんには来ていませんでした。ジャックは、いったいどこまで行くのかと思って、すこし気味が悪くなりましたが、それでも一生懸命にはしごにしがみついて登って行きました。あんまり高く登ったので、目はくらむし、手も足もくたびれきってもうしびれて、ふらふらになりかけた頃、やっとてっぺんに登り着きました。

五、雲の上の国と一人の妖女

さて、ジャックは、まず最初、そこらを見まわしてみると、そこは不思議な国で、青と茂った静かな森がありました。また、美しい花の咲いている草原もありました。そして、水晶のようにきれいな水の流れている川もありました。こんな高い空の上に、こんなきれいな国があろうとは、思ってもいませんでしたから、ジャックはあっけにとられて、ただきょとんとしていました。――いつの間にか、ふと、赤い角ずきんをかぶった、妙な顔のおばあさんが、どこから出て来たか、ふと目の前に現れました。ジャックは、不思議そうに、この妙な顔をしたおばあさんを見つめました。おばあさんは、でも、やさしい声で

言いました。「……そんなにびっくりしないでもいいのだよ。わたしは、お前さんたち一家の者を守ってあげている妖女なのだけれど、この五、六年の間というものは、悪い魔ものの ために、魔法で縛られていて、お前さんたちを助けて上げることができなかったのさ。だが、今度やっと魔法がとけたから、これからは思いのままに助けて上げられるだろうよ」と言うのでした。……

だしぬけに、こんなことを言われて、ジャックは、なおさらあっけにとられてしまいました。そのぽかんとした顔を、妖女は面白そうに眺めながら、そのわけを詳しく話し出しました。それをかいつまんで言うと、まあこんなものでした。「……ここからそう遠くない所に、恐ろしい鬼の大男が住みかにしているお城のような家がある。じつはその鬼が、昔、そのお城に住んでいたお前のお父さんを殺して、城といっしょにその持っていたお宝残らず奪ってしまったものだから、お前のうちは、すっかり貧乏になってしまったのさ。そうしてお前も、赤ちゃんの時からかわいそうに、お前のお母さんのふところに抱かれたまま下界に落ちぶれて、今のような情けない暮らしをするようになったのだよ。だから、もう一度、その宝を取り返して、悪いその鬼をひどい目に遇わしてやるのが、お前の役目なのだよ」と言うのでした。

さて、こういうふうに言い聞かされると、ぐうたらなジャックの心も、ぴんと張って来ました。知らないお父さんのことがなつかしくなって、どうしてもこの鬼を懲らしめて、かすめられた宝を取り返さなくてはならないと思いました。そう思うと、とても勇ましい気になって、お腹の空いていることもくたびれていることも、きれいに忘れてしまいました。そこで、妖女にお礼を言って別れると、さっそく、鬼の住んでいるお城に向かって急いで行きました。……

六、お城に住む人喰い鬼の大男

やがて、お日様が西に沈む頃、ジャックは、なるほどお城のように大きな家の前に来ました。――そこで、まず、とんとんと門をたたくと、なかから、目の一つしかない、鬼のお上さんが出て来ました。気味の悪い顔に似合わず、鬼のお上さんは、ジャックのひもじそうな様子を見て、かわいそうに思いました。が、さも困ったように首をふって、「……いけない、いけない。気の毒だけれど、泊めて上げることはできないよ。ここは、人喰い鬼の家だから、見つかると、晩のごはんのかわりにすぐ食べられてしまうからね」と言うのでした。ジャックは、「……どうか、おばさん、知られないようにして泊めてくださいよ。ぼくはもうくたびれて、ひと足も歩けないんです」と、頼むように言いました。すると、お上さんは、「……仕方のない子だね。じゃあ今夜だけ泊めてあげるから、朝になったら、すぐお帰りよ」と言うのでした。

こう言っている最中、にわかにずしん、ずしんと地響きするほど大きな足音が聞こえて来ました。それは主人の人喰い鬼が、もう外から帰って来たのです。鬼のお上さんは、大あわてにあわてて、ジャックを暖炉の中に隠してしまいました。

鬼は、部屋の中に入ると、いきなり、ふうと鼻を鳴らしながら、誰だってびっくりして震え上がるような大声で、「……フン、フン、フン、イギリス人の匂いがするぞ。生きていようが死んでいようが、骨ごとひいてパンにしようぞ」と、言いました。すると、お上さ

んが、「……いいえ、それはあなたがつかまえて、土の牢に入れてある人たちの匂いでしょう」と言いました。けれども、鬼の大男は、まだきょろきょろそこらを見まわして、鼻をくんくんやっていました。でも、どうしてもジャックを見つけることが出来ませんでした。

とうとうあきらめて、鬼は、椅子の上に腰を下ろしました。そして、がつがつ、がぶがぶ、食べたり飲んだりし始めました。そっとジャックがのぞいて見てみると、それはあとからあとから、いつおしまいになるかと思うほどかっこむので、ジャックは、目ばかりまるくしていました。さて、たらふく食べて飲んだあげく、お上さんに、「……おい、にわとりをつれてこい」と言いつけました。それは、不思議なめんどりでした。テーブルの上にのせて、鬼が、「生め」と言いますと、すぐ金の卵を一つ生みました。鬼がまた、「生め」と言いますと、また一つ、金の卵を生みました。「……やあ、ずいぶん、得なにわとりだな。お父さんのお宝というのは、きっとこれに違いない」と、下からそっと眺めながら、ジャックはそう思いました。

さて、鬼は面白がって、あとからあとから、いくつもいくつも金の卵を生ましているうちに、お腹が張ってきて眠たくなったと見えて、ぐすぐすと壁の動くほどすごい大いびきを立てながら、ぐっすりと寝込んでしまいました。――ジャックは、鬼のすっかり眠入ったのを見すまして、ちょうど鬼のお上さんが台所へ行っているのを幸いに、そっと暖炉の中から抜け出しました。そして、テーブルの上のめんどりを、ちょろり小わきにかかえて、すたこらお城を出て行きました。

それから、どんどん、どんどん、駆け出して行って、豆の木のはしごのかかっている所まで来ると、するするとつたわっておりて、うちへ帰りました。――ジャックのお母さんは、息子が、鬼か魔女にでもとられたのではないかと心配していると、無事でひょっこり帰って来たので、とても大騒ぎして喜びました。それからは、ジャックの持って帰った、金の卵を生むにわとりのお陰で、親子はお金持ちになり、また、幸せにもなりました。

七、再び、大きな豆の木を登る。

しばらくすると、ジャックは、また、もう一度、空の上のお城に行ってみたくなりました。そこで、今度は、すっかり先と違った風をして、ある日、豆の木のはしごを、またするすると登って行きました。鬼のお城に行って、門をたたくと、鬼のお上さんが出てきました。ジャックが、また悲しそうに、泊めてもらいたいと言って、頼みますと、お上さんは、まさかジャックとは気がつかないようでしたが、それでも手をふって、「……いけない、いけない。この前も、お前と同様な貧乏たらしい子供を泊めて、主人の大事なにわとりを、ちょっくら持って行かれた。それからは毎晩、そのことを言い出して、わたしが叱られ通しに叱られているじゃないか。またもあんなひどい目に合うのはこりごりだよ」と言うのでした。

それでも、ジャックは、しつっこく頼んで、とうとう中へ入れてもらいました。そうするうち、大男が帰って来て、また、そこらをくんくん嗅いでまわりましたが、ジャックは、あかがねの箱の中に隠れているので、どうしても見つかりませんでした。

大男は、この前と同じように、晩の食事をたらふく飲み食いしたあとで、今度は、金の

卵を生むにわとりの代りに、金や銀のお宝のたくさんつまった袋を出させて、それをざあっとテーブルの上に開けて、一枚一枚かぞえてみて、それから、おはじきでもして遊ぶように、それをチャラチャラいわせて、さんざん遊んでいましたが、ひととおり楽しむと、また袋の中にしまって、ひもを堅くしめました。そして、天井に響くほどの大あくびを一つしてから、そのままぐうぐう大いびきで寝てしまいました。

そこで、今度も、ジャックは、そろりそろり、あかがねの箱からはい出して、金と銀のお宝の一杯つまった袋を、両方の腕にしっかりかかえるが早いか、さっさと逃げ出して行きました。ところが、この袋の番人に一匹の小犬がつけてあったので、そいつが、とたんに、きゃんきゃん吠え出しました。

ジャックは、今度こそだめだと思いましたが、それでも、大男は、とても死んだようによく寝入っていて、目を覚ましませんでした。ジャックは夢中であとをも見ずに、どんどん、どんどんと駆けて行って、とうとう豆の木のはしごに行きつきました。

さて、にわとりと違って、今度は重たい金と銀の袋を運ぶのに、骨が折れました。それでも我慢して、うんすら、うんすら、二日がかりで、豆の木のはしごをジャックはおりて来ました。――やっとこさ、うちまで辿り着くと、お母さんは、ジャックがいなくなったので、すっかり、がっかりして、ひどい病人になって、戸を締めて寝ていました。それでも、無事なジャックの顔をみると、まるで死んだ人が生きかえったようになって、それからずんずんよくなって、やがて、しゃんしゃん歩き出しました。その上、お金がたくさん出来たと聞いて、よけい元気になりました。

八、三度、大きな豆の木を登る。

こうして、また、しばらくの間、ジャックは、家でおとなしくしていましたが、そうするうちに、だんだんとからだじゅうがむずむずして来ました。もうまた天上に行きたくなって、毎日、豆の木のはしごばかり眺めていました。すると、それが気になって、気になって、気がふさいで来ました。――そこで、ジャックは、ある日、また、そっと豆の木のはしごをつたわって登りました。今度も顔から姿からすっかりほかの子供になって行きましたから、鬼のお上さんは、また、だまされて中に入れました。そして、大男が帰ると、あわてて、お釜の中に隠してくれました。

鬼の大男は、部屋の中じゅう嗅ぎまわって、ふん、ふん、人臭いぞと言いました。そして、今度は、何でも探し出してやると言って、部屋の中のものを一つ一つ見てまわりました。そして、最後に、ジャックの隠れているお釜のふたに手をかけました。ジャックは、ああ、今度こそダメだと思って、震えていますと、それこそ妖女が守っていてくれるのでしょうか、大男は、ふと気が変わって、それから炉端に座り込んで、「……まあいいや。腹が空いた。晩飯にするぞ」と言うのでした。

さて、晩飯がすむと、大男はお上さんに、「……にわとりはとられる、金の袋、銀の袋は盗まれる、仕方がない、今夜はハープでも鳴らすか」と言うのでした。――ジャックが、そっとお釜のふたを開けてのぞいて見ますと、玉で飾った、見事なハープのたて琴が目に入りました。……鬼の大男は、ハープをテーブルの上にのせて、「鳴り出せ」と言いました。すると、ハープは、ひとりでに鳴り出しました。しかもその音の美しいことといった

ら、どんな楽器だって、とてもこれだけの音には響かないほどでしたから、ジャックは、金の卵のにわとりよりも、金と銀との一杯つまった袋よりも、もっともっと、このハープが欲しくなりました。

そうするうちに、ハープの音楽を楽しい子守歌にして、さすがの鬼もいい心持ちに眠ってしまいました。ジャックは、しめたと思って、そっとお釜の中から抜け出すと、すばやくハープをかかえて逃げ出しました。ところが、あいにく、このハープには、魔法が仕かけてあって、とたんに大きな声で、「……起きろよ、旦那さん、起きろよ、旦那さん」と、怒鳴り出したのでした。これで、大男も目を覚ましました。むうんと立ち上がってみると、ちっぽけな小僧が、大きなハープをやっこらさとかかえて、逃げて行くのが見えました。「……待て小僧、きさま、にわとりを盗んで、金の袋、銀の袋を盗んで、今度はハープまで盗むのかあ」と、大男はわめきながら、あとを追っかけました。ジャックは、「……つかまるものならつかまえてみろ」と、負けずに怒鳴りながら、それでも一生懸命に駆けました。大男も、お酒に酔った足を踏みしめ踏みしめ、よたよた走りました。その間、ハープは、たえずからんからんと鳴り続けていました。

さて、やっとこさ、豆の木のはしごの所までくると、ジャックは、ハープに向かって、「……もうやめよ」と言うと、それきりハープは黙りました。ジャックは、ハープをかかえて、豆の木のはしごを降り始めました。はるか目の下に、お母さんが小屋の前に立って、泣き張らした目で空を見つめていました。――そうこうするうち、大男が追っついてきて、もう片足、はしごにかけました。「……お母さん、お泣きでない」と、ジャックは、上から精一杯に呼びました。「……それよか、斧を持って来ておくれ。早く、早く」と大声で叫び、もう一分も待たれません。大男はみしり、みしりとはしごをつたわって降りて来ます。ジャックは、気が気ではありません、身の軽いのを幸いに、ハープをかかえたなり、はしごの途中で、つばめのような早業でくるりとひっくりかえって、高い上から飛び降りました。そこへお母さんが斧を持って駆けつけたので、ジャックは斧をふるって、いきなり、はしごの根元からぷっつりと切り離しました。その時、まだ、はしごの中ほどを降りかけていた大男が、切れた豆のつるを掴んだまま、大きな体の重みで、ずしんと、それこそ地面がめり込むような音を立てて、落ちて来ました。そして、それっきり目をまわして死んでしまいました。

九、美しい女の人が……

ちょうど、その時、いつぞや、初めてジャックに会って、道を教えてくれた妖女が、今度はまるで違って、目の覚めるような美しい女の人の姿になって、またそこへ出て来ました。――きらびやかに品のいい貴婦人のような身なりをして、白い杖を手に持っていました。杖の頭には、純金の孔雀を止まらせていました。そして、不思議な豆がジャックの手に入るようになったのも、ジャックを試すために、自分が計らってしたことだと言うのでした。そして、「……あの時、豆のはしごをみて、すぐにもそのままどこまでも登って行こうという気を起こしたのが、そもそもジャックの運の開けるはじめだったのです。あれを、ただぼんやり不思議だなあと思って眺めたなりで過ぎてしまえば、取り替えっこした牝牛は、たとえ手に戻ることがあるにしても、あなたたちは、相変わらず貧乏で暮らさ

なければならなかったのです。だから、豆の木のはしごを登ったのが、とりもなおさず、幸運のはしごを登ったわけなのだよ」と、こう妖女は、言い聞かせて、ジャックにも、ジャックのお母さんにも別れを告げて、帰って行きました。（完）

＊　　＊

ヘンゼルとグレーテル

ヘンゼルとグレーテル

一、貧しい木こり一家

大きな森の近くに小屋を持って、貧しい木こりの男が、おかみさんと二人の子供とで暮らしていました。二人の子供のうち、男の子は、ヘンゼル、女の子は、グレーテルと言いました。もともと、人間らしいものをろくすっぽ口にすることもできなかったのですが、ある年、国じゅうが大へんな飢饉となり、それこそ、その日その日のパンすら口に入らなくなりました。木こりは、夜、寝床に入ったものの、こののち、どうして暮らすか考えると、心配で心配で、ごろごろ寝返りばかりして、ためいきをつき、こう言うのでした。

「……なあ、おれたち、これからどうなると言うんだ。かわいそうに、子供らをどうやって食わしたらいいのだ、なにしろ、肝心の養ってやっているおれたち二人の食うものすらない始末だからな」と言うと、おかみさんは、「……だから、お前さん、いっそこうしようじゃないか」と、言うのでした。それは、「……あしたの朝、早くに、子供たちを連れ出して、森の奥の、いちばん木が生い繁っている所まで行くのさ。そこで、たき火をして、めいめい一かけらずつパンをあてがっておいて、それから、わたしたちは、仕事の方へと抜けて行って、二人をそっくり森の中に置いてくるのさ。子供らに帰り道が見つかりっこないから、それでやっかいばらいができるじゃないか」と言うのでした。

それを聞いて、木こりは、「……そりゃあ、おめえ、いけねえよ」と、言いました。「……そんなこたあ、おれにはできねえよ。子供らを森の中へ置き去りにするなんて、どうしたって、そんな考えになれるものかな。そんなことしたら、子供らは、すぐにも森の獣たちが出てきて、ずたずたに八つ裂きにされてしまうだよ」と言うのでした。すると、おかみさんは、「……やれやれ、お前さん、いい馬鹿だよ」と言いながら、「……そんなことを言っていたら、わたしたち四人が四人、そろって飢え死にでみな死んでしまうよ。あとは、棺桶の板を削ることだけが仕事になるよ」と、こうおかみさんは言って、それからも、のべつまくし立てて、否応なしに、亭主をうんと言わせてしまいました。が、亭主は、「……だが、どう考えても、子供たちがかわいそうだなあ」と、呟くのでした。

二、親の話を子供らは聞いてしまう

一方、二人の子供たちも、お腹がすいて、よく寝つけませんでしたから、まま母が、おとうさんに向かって言っていることを、そっくり聞いていました。妹のグレーテルは、涙を出して、しくんしくんやりながら、兄さんのヘンゼルに向かって、「……まあどうしましょう、あたしたち、もうだめね」と言うと、「……シッ、黙ってグレーテル」と、ヘンゼルは言い、「……心配しないで、だいじょうぶ、ぼくがきっとうまくやってみせるから」と、こう妹をなだめておいて、やがて、親たちが寝静まると、ヘンゼルはそうっと起き出して、上着をひっかけ、そして、表の戸の下（くぐり戸）だけ開けて、こっそり外へ出ました。ちょうどお月さまが、昼のように明るく照っていて、家の前にしいてある白い小砂利が、それこそ銀貨のように、きらきらしていました。ヘンゼルは、かがんで、その小砂利を、上着のかくしの中にいっぱいつまるだけ詰めました。それから、そっとまた、もどっ

て来て、妹のグレーテルに、「……いいから安心して、ゆっくりおやすみ。神さまがついていてくださるよ」と、言い聞かせて、自分もまた、床にもぐり込みました。

三、朝、家族四人で森へ行く

夜が明けると、まだお日様の上がらないうちから、もうさっそく、おかみさんは起きて来て、二人を起こしました。「……さあ、起きないか、のらくら者だよ。起きて森へ行って、たきぎを拾って来るのだよ」と、こう言って、おかみさんは、子供たちめいめいに、ひと切れずつパンを渡して、「……さあ、これがお昼だよ。お昼にならないうち、食べてしまうのではないよ。もうあとは何にももらえないからね」と、言うのでした。

妹のグレーテルは、パンを二つともそっくり前掛けの下にしまいました。兄のヘンゼルは、かくしにいっぱい小石を入れていましたからね。そのあとで、親子四人そろって森へ出かけました。しばらく行くと、ヘンゼルがふと立ちどまって、首をのばして、うちのほうを振り返りました。しかも、そんなことを何べんも何べんもやりました。おとうさんがそこで言いました。「……おい、ヘンゼル、何をそんなに立ちどまって見ているんだ。うっかりしないで、足元に気をつけるんだ」と言うと、「……なあに、おとうさん」と、ヘンゼルは言い、「……ぼくの見ているのはね、あれさ。ほら、あすこの屋根の上に、ぼくの白猫が上がっていて、あばよしているから」だと応えると、おかみさんは、「……馬鹿だね、あれがお前の小猫なもんか、ありゃあ、煙出しに日があたっているだけじゃないか」と言うのでした。でも、ヘンゼルは、小猫なんか見ているのではなく、ほんとうはその間に、例の白い小砂利をせっせとかくしから出しては、道に落し落ししていたのです。

四、森の真ん中まで来ると…

さて、森の真ん中まで来た時、おとうさんは、「……さあ、子供たち、たきつけの木を拾っておいで。みんな寒いといけない。おとうさんがたき火をつけてやるよ」と言いました。そこで、ヘンゼルとグレーテルは、細い木の枝を運んで来て、そこに山と積み上げました。その細い木の枝の山に火がついて、ぱあっと高く、ほのおが燃え上がると、おかみさんが言いました。「……さあ、子供たち、二人は、たき火のそばで暖まって、わたしたちが森で木を切って来るあいだ、おとなしく待っているんだよ。仕事がすめば、戻ってきて、一緒に連れて帰るからね」と言うのでした。ヘンゼルとグレーテルは、そこで、たき火にあたっていました。お昼になると、めいめいあてがわれた、パンの小さなひと切れを出して食べました。さて、その間も、しじゅう木を切る斧の音がしていましたから、おとうさんは、すぐ近くで仕事をしていることとばかり思っていました。でも、それは斧の音ではなくて、おとうさんが一本の枯れ木に枝をいわい付けておいたのが、風でゆすられて、あっちへぶつかり、こっちへぶつかりしていたのです。こんなふうにして、二人は、いつまでもおとなしく据わって待っているうち、ついくたびれて、両方の目がとろんとしてきて、それからぐっすりと寝てしまいました。それで、やっと目がさめてみると、もうすっかり日は暮れて、夜になっていました。妹のグレーテルは、泣き出してしまいました。

さて、そのグレーテルは、「……まあ、わたしたち、どうしたら森の外へ出られるでし

よう」と言うので、兄のヘンゼルは、妹のグレーテルをなだめて、「……なあに、しばらくお待ち、お月さまが出てくるからね。そうすれば、すぐに路が見つかるよ」と、言いました。――やがて、まんまるなお月さまが、高々と登りました。そこで、ヘンゼルは小さい妹の手を引いて、小砂利を落とした跡を、辿り辿り行きました。小砂利は、まるで「鋳き立て」（それは「造り立て」）の「銀貨」みたいにぴかぴか光って、路しるべをしてくれました。一晩中、歩き通しに歩いて、もう夜のしらしら明ける頃に、ふたりはやっとおとうさんの家に帰って来ました。二人が表をコツコツと叩くと、おかみさんが戸を開けて出てきました。そして、ヘンゼルとグレーテルの立っているのを見ると、「……このろくでなしめら、いつまで森ン中で寝こけていたんだい。お前たち、もう家に帰るのがいやになったんだと思っていたよ」と、言いました。一方、おとうさんの方は、でも、ああして子供たち二人きりにして置きざりにして来たものの、心配で心配でならなかったところでしたから、よく帰って来た、と、言って喜びました。

五、生活がさらに困窮してしまう

それから、あまり経たないうちに、また、八方ふさがりになりました。子供たちが聞いていると、夜遅く、寝ながらおかみさんが、おとうさんに向かって、「……さあ、いよいよ何もかも食べ尽くしてしまったよ。天にも地にもパンが半きれ、それを食べてしまえば、もうおしまいさ。こうなりゃどうしたって、子供らを追い出すほかはないよ。今度は森のもっと奥まで連れ込んで、もうとても帰り道のわからないようにしなきゃだめさ。どうしたって、ほかにわたしたち助かりようがないからね」と、こんなことを言われて、亭主は、すっかりいやな気持ちになり、そんなことをするくらいなら、自分の分のいちばんしまいに食べるやつを、子供たちに分けてやったほうがましだ」と、考えました。

それでも、おかみさんは、亭主の言うことにはまるで耳をかさず、あべこべに叱りつけたり、悪態をついたりしたのですが、それは、だれでも、いったん「い」と言ってしまえば、あとは「ろ」と続けなければならなくなるので、この亭主も、一度おかみさんの言うままになったからは、今度もその通りにしなければならなくなりました。

ところで、子供たちはまだ目が開いていて、この話を残らず聞いていました。そこで、大人たちの寝てしまうのを待ちかねて、ヘンゼルは起き上がると、外へと飛び出して、この前のように小砂利を拾いに行こうとしました。ところが、今度は、おかみさんが戸にしっかり錠を下ろしてしまったので、ヘンゼルは、外に出ることが出来ませんでした。それでも、ヘンゼルは、「……泣くのじゃないよ、グレーテル、いいから、安心してお休み。神さまがきっと助けてくださるから」と言って、小さい妹をなぐさめるのでした。

六、家族四人再び森へ行く

あくる日は、朝早くから、もうおかみさんはやって来て、子供たちを寝床から連れ出しました。そして、二人の子供たちは、めいめいパンのかけらを一つずつもらいましたが、それは、前よりよほど小さいものでした。それをヘンゼルは、森へ行く道、かくしの中でぼろぼろに崩しました。そして、おりおり立ち止まっては、その崩したパン屑を地面に落

しました。すると、「……おい、ヘンゼル、なんだって立ちどまって、きょろきょろ見ているんだい」、「……さっさと歩くんだよ」と、おとうさんが言いました。そこで、ヘンゼルは、「……ぼくはね、ぼくの小鳩を見ているんだよ。ほら、屋根の上に止まって、ぼくにさよならしているじゃないか」と、言うのでした。すると、「馬鹿っ！」と、おかみさんは、また言いました。「……あれがなんで鳩なもんか。あれは朝日が煙出しの上できらきらしているだけだよ」と言うのでした。ヘンゼルは、それにはかまわず、パン屑を道の上に落し落しして、残らずなくしてしまいました。

おかみさんは、子供たちを森のもっともっと深く、生まれてまだ来たこともない奥まで引っぱって行きました。そこで、今度も、またじゃんじゃんたき火をしました。そして、おかみさんは、「……さあ、子供たち、二人ともそこにじっと居ればいいのだよ。くたびれたら少し寝てもかまわないよ。わたしたちは、森で木を切って来て、夕方、仕事がおしまいになれば、戻ってきて、一緒にうちに連れて帰るからね」と、言うのでした。

さて、お昼になると、妹のグレーテルは、自分のパンを兄のヘンゼルと二人で分けて食べました。兄のヘンゼルのパンは、道にまいて来てしまいましたからね。パンを食べてしまうと、二人は眠りました。そのうちに晩も過ぎましたが、かわいそうな子供たちのところへ、誰も来るものはありません。二人がやっと目を開けた時には、もう真っ暗な夜になっていました。兄のヘンゼルは、小さい妹をいたわりながら、「……グレーテル、まあ待っておいでよ、お月さまが出るまでね。お月さまが出りゃあ、こぼしておいたパン屑も見えるし、また、それを探して行けば、うちへ帰れるんだよ」と、言うのでした。

お月さまが上がったので、二人は出かけました。けれど、パン屑は、もうどこにも見あたりません。それは、森や野を飛びまわっている何千とも知れない鳥たちが、みんなつついてもって行ってしまったのです。それでも、兄のヘンゼルは、妹のグレーテルに、「……なあにそのうち、道が見つかるよ」と、言っていましたが、やはり、見つかりませんでした。夜中じゅう歩き通して、あくる日も朝から晩まで歩きました。それでも、森の外に出ることが出来ませんでした。それに何よりお腹がすいてたまりませんでした。地面に出ていた「くさいちご」の実を、ほんの二つ三つ口にしただけでしたものね。それで、もうくたびれきって、どうにも足が進まなくなったので、一本の木の下にごろりとなると、そのままぐっすり寝込んでしまいました。

七、やがて、小さな家が見えて来る

そんなことで、二人はおとうさんの小屋を出てから、もう三日めの朝になりました。二人は、また、とぼとぼ歩き出しましたが、行けば行くほど森は深くなるばかりであり、ここらで誰か助けに来てくれなかったら、二人はこれきり弱りきって、倒れるほかないところでした。――すると、ちょうどお昼ごろでした。雪のように白いきれいな鳥が、一本の木の枝にとまって、とてもいい声で歌っていました。あまりいい声なので、二人はつい立ちどまって、うっとり聞いていました。そのうち、歌をやめて小鳥は羽ばたきをすると、二人の行くほうへ、飛び立って行きました。二人もその鳥の行く方へついて行きました。すると、小さな家の前に出ました。その小さな家の屋根に小鳥は止まりました。二人が小さな家のすぐそばまで行ってみると、まあこの小さな家は、パンでできていて、屋根はお

菓子でふいてありました。おまけに、窓はぴかぴかするお砂糖でした。「……さあ、ぼくたち、あすこに向かって行こう」と、ヘンゼルが言いました。「……けっこうなお昼だ。かまうものか、たんとごちそうになろうよ。ぼくは、屋根をひとかけらかじるよ。グレーテル、お前は、窓のを食べるといいや。ありゃあ、甘いよ」と、言うのでした。

兄のヘンゼルは、うんと高く手をのばして、屋根を少し欠いて、どんな味がするか、ためしてみました。すると、妹のグレーテルも、窓ガラスにからだを寄せて、ぼりぼりかじりかけました。その時、お部屋の中から、やさしい声がしました。「……ぼりぼり、がりがり、わたしのお家をかじるのは、だれだね？」と言いました。子供たちは、その時、「……かぜ、かぜ、天の子」と応じて、遠慮会釈もなく、食べ続けていました。兄のヘンゼルは、屋根がとても美味しかったので、大きなやつを、一枚、そっくりめくって持って来ました。妹のグレーテルも、まるい窓ガラスをそっくり外して、その前に据わり込んで、ゆっくりと食べ始めました。その時、いきなり戸が開いて、ひどく年老いたばあさんが、しゅもく杖にすがって、よちよち出て来ました。ヘンゼルもグレーテルも、これにはしたたか驚いて、せっかく両手に抱えたものを、ぽろりと下に落としてしまいました。でも、ばあさんは、頭をゆすぶりゆすぶり、こう言いました。「……やれやれ、かわいい子供たちや、誰に連れられてここまで来たかの。さあさあ、入って、ゆっくりお休み、何にもされやせんからの」と、こう言って、ばあさんは二人の手をつかまえて、小さな家の中へと連れ込みました。

八、魔女の家の中の様子

さて、家の中に入ると、牛乳だの、砂糖のかかった焼きまんじゅうだの、りんごだの、くるみだの、おいしそうなごちそうが、テーブルに並んでいました。そのごちそうのあとでは、かわいいきれいなベッド二つに、白い布がかかっていました。ヘンゼルとグレーテルは、その中にごろりとなって、天国にでも来ているような気がしていました。

このばあさんは、ほんのうわべだけ、いかにも親切そうに見せていましたが、ほんとうは、悪い魔女であり、子供たちの来るのを知って、パンのお家なんかこしらえて、だましておびき寄せたのです。ですから、子供が一人、手のうちに入ったが最後、さっそく殺して、ぐつぐつ煮て、それをむしゃむしゃ食べる、それが「魔女」にとっての何よりうれしい「お祝いの日」になるというわけなのです。魔女というのは、赤い目をしていて、遠くはよく見えないのですが、そのかわり、獣のように鼻がよく利くので、人間どもが近寄って来ると、そのにおいでそれが分かるのです。それで、ヘンゼルとグレーテルが近くへやって来ると、ばあさんは、さっそくたちの悪い笑い方をして、「……さぁて、一度つかまえたからにゃ、こっちのものさ、もう逃げようったって、そう簡単に逃がすものじゃないよ」と、いかにも悪賢そうに言うのでした。……

その翌る日、朝早く、子供たちがまだ目を覚まさないうちから、ばあさんは起き出して来て、二人ともそれはもうまっ赤にふくれた頬っぺたをして、すやすやといかにも可愛らしい姿で休んでいるところへ来て、「……こいつら、とんだごちそうだよ」と、つぶやきました。そこで、ばあさんは、やせ枯れた手でヘンゼルをつかむと、そのまま小さな家畜小屋へ連れて行って、ぴっしゃりと格子戸を閉めてしまいました。ですからヘンゼルは、中で

いくら何だかんだと喚いてみせても何の役にも立ちません。それから、ばあさんは、またグレーテルの所へと行って、むりに揺すぶり起こしました。そうして、「……この怠け者、さあ起きて、水を汲んで来て、兄さんに何でもおいしいものをこしらえてやるんだ。外の家畜小屋に入れてあるからの、せいぜいあぶら太りにふとらせなきゃ。だいぶ、あぶらの乗ったところで、おばあさんが食べるのだからな」と、喚きました。

これを聞いて、妹のグレーテルは、わあっと激しく泣き出しました。けれでも、何をしたって何の役にもたちません。妹のグレーテルは、このたちの悪い魔女の言いなりに何でもしなければなりませんでした。こんな次第で、気の毒に、食べられる兄のヘンゼルには、いちばん上等なお料理が与えられて、そのかわり、妹のグレーテルには、ザリガニの甲羅が渡ったばかりでした。毎朝、毎朝、ばあさんは家畜小屋へ出かけて行って、「……どうだな、ヘンゼル、指を出してお見せよ。そろそろあぶらが乗って来たかどうだか、見てやるから」と、喚きました。すると、兄のヘンゼルは、食べ余しのほそっこい骨を、一本かわりに出しました。ところで、ばあさんは目がかすんでいるものですから、その見分けがつかず、それをヘンゼルの指だと思って、どうしてヘンゼルにあぶらが乗ってこないか、不思議でなりませんでした。

九、魔女はついに二人を……

さて、それから、かれこれ一か月経ちました。が、相変わらずヘンゼルは、痩せこけたままでした。それで、ばあさんも、とうとうしびれをきらして、もうこの上待ちきれないと思い、「……やいやい、グレーテル」と、ばあさんは妹の子に向かってわめき立てました。「……さあ、さっさと行って、水を汲んでくるのだ。ヘンゼルの小僧め、もう太っていようが、痩せていようが、何が何だって、明日こそ、あいつをぶち殺して、煮て食っちまうんだからな」と、言うのでした。

やれやれ、どうしましょう。かわいそうに、この妹の子は、むりやり水を汲まされながら、どんなに激しく泣きじゃくったことでしょう。「……神さま、どうぞお助けくださいまし」と、この子は叫び声を上げました。「……いっそ森の中で、猛獣に喰われたほうが、よかったわ。それだと、かえって二人一緒に死ねたのだもの」と言うと、「……やかましいぞ、このがきゃあ」と、ばあさんは言いました。「……泣いたって喚いたって、何にもなりゃあしないぞ」と、言うのでした。

翌る日は、朝から、グレーテルは、外へひっぱり出されて、水のはいった大鍋をつるして、火をたき付けなければなりませんでした。「……パンからさきに焼くんだ」と、ばあさんは言いました。「……パン焼きかまどはもう火が入っているし、ねり粉もこねてあるしの」と、こう言って、ばあさんは、かわいそうなグレーテルを、パン焼きかまどの方へ、ひどく突き飛ばしました。かまどからは、もうちょろちょろ炎が赤い舌を出していました。「……中へ、這入り込んでみなよ」と、魔女は言いました。「……火がよくまわっているか見るんだ。よければそろそろパンを入れるからな」と。……

これで、若しもグレーテルが中に入れば、ばあさんは、すぐにかまどのふたを閉めてしまうつもりでした。そうすれば、グレーテルは、なかでまる焼きになるに決まっています。そうしたら、ばあさんは、そのグレーテルをむしゃむしゃ食べてしまうつもりだったので

す。ところが、グレーテルは、いち早く、ばあさんの企んでいることに気づいて、そこで、「……あたし、わからないわ、どうしたらいいんだか。中へ入るって、どういうふうにするの」と、聞くのでした。すると、「……ばかっ、このくそがちょう」と、ばあさんは言いました。「……口がこんなに大きいんだよ、見てみなよ、この通り、おばあさんだってそっくり入れらあな」と、こう言い言い、やっこら這うように歩いて来て、パン焼きかまどの中に、首をつっ込みました。すると、ここぞと、グレーテルはひと突き、うしろからどんと突きました。そのはずみで、ばあさんは、かまどの中へ転げ込みました。すぐに鉄の戸をびしりと閉めて、かんぬきをかってしまいました。「……うおッ、うおッ」と、ばあさんはとてもすごい声で吠えたけりましたが、グレーテルは構わず駆け出しました。こうして、罰あたりな魔女は、否も応もなくあわれな様で焼け死んでしまいました。（ちなみに、魔女は火あぶりにするのがいちばんとされているのである。）

十、結末は……

グレーテルは、まっしぐらにヘンゼルのいる所へ駆け出して行きました。そして、「……ヘンゼル兄さん、あたしたち助かったのよ。魔女のばあさんは死んでしまったわ」と叫びながら、家畜小屋の戸を開けました。戸が開くと、途端に、ヘンゼルが鳥が籠から飛び出るように、ぱあっと飛び出して来ました。まあ、二人は、その時、どんなにうれしがって、首っ玉にかじりついて、ぐるぐるまわりして、そして接吻しあったことでしょう。こうなれば、もう何にもこわいものなしになったのですから。二人は魔女のうちの中に、ずんずん入って行きました。すると、あっちのすみにも、こっちのすみにも、真珠や宝石のつめ込んであるながもちがいくつもいくつも置いてありました。「……こりゃ、小砂利よりずっとましだよ」と、兄のヘンゼルは言って、かくしの中に入れられるだけ詰め込みました。すると、妹のグレーテルも、「……あたしも、うちへおみやげに持っていくわ」と言って、前掛かに一杯にしました。「……さあ、もうそろそろ出かけよう」と、ヘンゼルは言い、「……何しろ魔女の森から抜け出さなければならないのだから」と言うのでした。

それで、二三時間歩いて行くうちに、大きな川の所へ出ました。「……これじゃあ渡れやしないや」と、兄のヘンゼルは言いました。「……ほんとうの橋どころか、丸木橋ひとつ見えやしないよ」と言うのでした。すると、「……ここいらは、ちっぽけなお船も通らないのね」と、妹のグレーテルも言いました。でも、「……あすこに、白いカモが一羽泳いでいるわね。きっと頼んだら渡してくれるわよ」と言い、そこで、妹のグレーテルは、声を挙げて呼びました。「……カモちゃん　カモちゃん　小ガモちゃん、ここにいるのは、グレーテルとヘンゼル　ここまで来たけど、橋もなければ　丸木橋ひとつないの。おまえの白いお背中に乗せて、渡してくださいな」と、頼みました。

すると、カモは、さっそく来てくれました。そこで、兄のヘンゼルがまず乗って、小さい妹に一緒にお乗りと言いました。けれども、妹のグレーテルは、「……いいえ」と答えて、「……そんなに乗っては、カモちゃん、とても重いでしょう。別々に連れてってもらいましょ」と言うのでした。その通り、この親切な鳥（カモ）はしてくれました。それで、二人無事に向こう岸に渡りました。それから、少しまた歩くうち、だんだんだんだん森がお馴染みの景色になって来ました。そして、とうとう遠くの方に、おとうさんの小屋を見

つけました。さあ、二人は一目散に駆け出しました。そして、ぽんとお部屋の中に飛び込んで、おとうさんの首根っこにかじりつきました。

この木こりの男は、子供たちを森の中に置き去りにして来てからというもの、ただの一時でも、笑える時がなかったのです。それから、おかみさんは、もう死んでいたのでした。そして、妹のグレーテルが前掛けを振うと、真珠や宝石がお部屋じゅう転がり出ました。また、兄のヘンゼルがかくしに片手をつっ込んで、何度も何度もつかみ出しては、そこにばらまきました。――さて、こんなことで、様々な心配や苦労などは、みなきれいにふき飛んでしまい、親子三人それこそ嬉しいことずくめで、一緒に仲良く暮らしました。

わたしのお話は、これでおしまい。あすこにちょろちょろしているのは、二十日鼠、どなたでもあれを捕まえた方は、あれで大きな大きな毛皮の頭巾をこしらえて、ご自分のになさいまし……。」（完）

＊　　＊

灰かぶり（シンデレラ）

（グリム童話）

灰かぶり（シンデレラ）

一、シンデレラの家庭事情

さて、旦那さんがお金持ちのある女の人がいました。その女の人は、病気で寝込んでいましたが、もう長くはないと、そう思って、自分の生んだたった一人の娘を枕元に呼んで、こう言いました。「……いつも思いやりのある子でいるんですよ。わたしはお空の上から、あなたのことをずっと見守っていますからね」と言うのでした。

まもなく、その女の人は目を閉じて、息を引き取りました。にわかにお墓が作られました。この幼い少女は、来る日も来る日もお墓へ行き、涙を流しました。そして、お母さんの言う通りに、いつでも誰にでも親切でいました。

やがて、雪が降り、あたり一面真っ白になって、お墓も銀色にお化粧をしました。でも、もうすぐ春がやって来るという頃に、お日様の光でみんな溶けてしまいました。ちょうどそんな時でした、お父さんは別の女の人と結婚してしまったのです。この女の人は、自分の娘を二人、家に連れてきました。三人とも、見た目はとても綺麗でしたが、心はまっ黒だったのです。

かわいそうに、少女にとっては、つらい日々の始まりだったのです。「……この役立たず！　こんなところでなにやってるの！　働かざる者、食うべからずって言うじゃないの。あんたなんか皿洗いぐらいがお似合いよ！」と言って、少女のドレスをみんな取り上げた挙げ句、ぼろぼろになった灰色のワンピースを押しつけました。少女は笑われて、仕方なく台所に行くのでした。――待っていたのは、つらい仕事の連続でした。お日様が顔を出す前に目を覚まして、水汲み、かまどの焚きつけ、ご飯作り、皿洗い。それだけではありませんでした。二人の姉は、少女をいろいろいじめた挙げ句、笑いものにしました。

二、二人の姉とシンデレラ

日が暮れると、少女はヘトヘトになってしまうのでした。けれど、ベッドもありませんから、かまどのある部屋へ行って、灰にまみれながら体を横にするしかありませんでした。ですから、少女はいつも灰だらけで汚れていました。そこで、少女は「灰かぶり」という意味の「アッシェンプッテル」（つまり「シンデレラ」）という名前で呼ばれました。

ある日のこと、お父さんがお祭りに行くことになりました。そこで、今の奥さんの娘たちに、「……お土産には何が欲しい」と聞くと、上の姉はこう言いました。「……きれいなドレスがいいわ」と。一方、下の姉はこう言いました。「……真珠と宝石がたくさん欲しいわ」と。そして、最後に、自分の実の娘のシンデレラに聞きました。「……お前は、一体、何が欲しいんだい？」と。すると、シンデレラは、「……お祭りからの帰り道、お父様の帽子にいちばん最初に引っかかった小枝でかまいません」と言うのでした。

さて、お父さんは、お祭りで二人の姉たちが望んだ通りのもの、きれいなドレスと真珠にダイヤを買いました。そして、帰り道、馬車に乗って林を通りがかった時に、帽子がハシバミの木にひっかかって取れそうになりました。そこで、その木の枝を折って、持って帰ることにしました。家に帰るなり、その木の枝をシンデレラに上げました。シンデレ

ラは、ハシバミの枝を持って、お母さんのお墓へ行き、そばに植えました。シンデレラがいつも流すたくさんの涙が水やりのかわりになったので、ハシバミの枝はすくすく育ち、ついには立派な木になりました。毎日、三回はお墓へ行きました。その度にいつも泣いていると、ふと小鳥が現われました。木の上に巣を造り、シンデレラとお話をするようになりました。小鳥は、シンデレラをやさしく見守って、シンデレラの望みなら、何でも叶えてくれました。

三、お城で舞踏会の開催

さて、ある時、王様は、三日間、舞踏会を開くことにしました。そして、その舞踏会に来た人の中から、王子様は、花嫁を選ぶということでした。二人の姉は、舞踏会に招待されていましたので、二人の姉は、シンデレラを呼びつけて言いました。「……さあ、髪をといてくれないかしら。あと、靴にブラシもかけて、腰帯も締めてくれる？　私たち、お城の舞踏会でダンスすることになっているんですからね」と言うのでした。

シンデレラは、言われるままにしました。仕事はちゃんとこなしたのですが、涙がぽろぽろこぼれました。口には出しませんが、ほんとうは、姉たちについて舞踏会に行きたかったのです。シンデレラは、継母に、「……どうか舞踏会に行かせてください」とお願いしましたが、継母は、こう言いました。「……シンデレラ、あんたなんか履く靴もなければ、着る服もない、それにダンスも出来ないのに、それなのに舞踏会に行きたいだって？」と言うのでした。シンデレラは、それでも必死に頼みました。そこで継母は追い払おうと、こう言いました。「……このお皿の中に入ったエンドウ豆、これを灰の山の中に投げるから、二時間以内に全部拾いなさい。そうしたら、舞踏会のことを考えて上げてもいいわ」と言うのでした。――継母は、灰の中にエンドウ豆をぶちまけました。小さなお姫様は、裏口から庭へ走り出て、空に向かって呼びかけました。「……やさしいハトさん、スズメさん、お空にいる鳥さんたち、みんな来て、わたしが豆を拾うのを手伝って。いいものは、皿の中へ、ダメなのは、食べちゃって」と言うのでした。

四、シンデレラと小鳥たち

まず、最初に白いハトが二羽、台所の窓から入って来ました。次に、二匹のスズメが来て、お空にいる小鳥たちみんなも一斉にやって来ました。ちゅんちゅん鳴いて、羽をぱたぱたさせながら、やって来ました。小鳥たちは、灰の中に飛び込み、まずハトが身を屈めて、まめをつまんで取って拾い上げました。残りの小鳥たちも、豆をつまんで取って拾い上げました。あっという間に、灰の中から豆を全部拾い上げ、灰をのけつつ、お皿の上に置いていきました。全部終わるのに一時間もかからず、小鳥たちはまた窓から飛び出して行きました。――シンデレラは、舞踏会に行けると浮き浮きしながら、継母のところへお皿を持って行きました。けれども、継母はこう言いました。「……あんたみたいな、うす汚い娘は、ダメったらダメなの！　ドレスもない、ダンスもできないあんたは、行っちゃダメに決まってるんだから」と。シンデレラは、またも必死にお願いしました。すると、継母はこう言いました。「……この二枚のお皿の中に入ったエンドウ豆、これを灰の山の中に

投げるから、一時間以内に全部拾いなさい。そうしたら、パーティのことを考えて上げてもいいわ」と。

五、継母のいやがらせ

こうすれば、シンデレラを追い払えると、継母は思いました。そして、二皿分のエンドウ豆を灰の中にぶちまけました。小さなお姫様は、裏口から庭へ走り出て、もう一度、空へ呼びかけました。「……やさしいハトさん、スズメさん、お空にいる鳥さんたち、みんな来て、わたしが豆を拾うのを手伝って。いいものは、皿の中へ、ダメなのは、食べちゃって」と、言うのでした。

すると、まず、最初に白いハトが二羽、台所の窓から入って来ました。次に、二羽のスズメが来て、お空にいる小鳥たちみんなも一斉にやって来ました。クゥクゥ鳴いて、片足でぴょんぴょんしながらやって来ました。小鳥たちは灰の中に飛び込み、まずハトが身を屈めて、まめをつまんで取って拾い上げました。残りの小鳥たちも、まめをつまんで取って拾い上げました。灰の中からまめを灰をのけつつお皿の上に置いていきました。ぜんぶ終わるのに三十分もかからず、小鳥たちはまた飛び出して行きました。

シンデレラは、今度こそ、舞踏会に行けるとわくわくしながら、継母のところへ二枚のお皿を持って行きました。けれども、継母はこう言いました。「……こんなものどうでもいいのよ。とにかく、あんたは行けないんだから。ドレスもない、ダンスもできないようでは、こっちが恥をかくだけだわ」と。継母は、二人の娘を連れて舞踏会に行ってしまいました。みんな行ってしまって、家にはシンデレラ一人だけになりました。悲しみにくれて、シンデレラは、ハシバミの木の下まで行って、そこに据わって、「……ふるえて、ゆれて、小さな木、わたしに金銀ふりかけて」と言うのでした。

五、舞踏会、一日目

さて、シンデレラは、ハシバミの木の下まで行き、そこに据わって、「……ふるえて、ゆれて、小さな木、わたしに金銀ふりかけて」と言うと、シンデレラの友だち、あの鳥さんが木から飛び出して来て、金銀のドレスやきらきらの絹の靴を持って来たのです。シンデレラは、そのドレスを着て、その絹の靴を履いて、二人の姉のいる舞踏会へと行きました。しかし、姉たちはシンデレラではなく、どこかの知らないお姫様だと勘違いしました。それほどきらびやかな服に身を包んで、立派で美しく思えたからです。シンデレラは家で灰まみれになっているから、ここにいるはずがないと思っていたのです。

王子様は、シンデレラに近づいて、手を取って一緒にダンスをしました。王子様は、シンデレラ以外の誰とも踊ろうとしませんでした。ずっとシンデレラの手を握っていました。ほかの人がシンデレラにダンスを申し込んでも、王子様は、こう言うのでした。「……この方は、ぼくとダンスをしているのです」と。こんな感じで、二人は夜が更けるまでずっとダンスを続けました。シンデレラが帰ることになると、王子様は、「……お話でもしながら、あなたの家まで行きませんか？」と言うのでした。

王子様は、この美しいお姫様がどんな家に住んでいるのか知りたかったのです。けれど

も、シンデレラは王子様を振りほどき、突然、家に向かって走り出しました。王子様は追いかけましたが、シンデレラは、飼育小屋に飛び込んで鍵をかけてしまいました。王子様は仕方なく、誰かが来るまで待つことにしました。シンデレラのお父さんが帰って来ると、王子様は、舞踏会にいたなぞのお姫様が、この飼育小屋に身を潜めてしまった、と説明しました。二人でドアをこじ開けましたが、中はすでにもぬけの殻でした。

シンデレラのお父さん、継母、姉たちが家の中へと入ると、シンデレラはいつものように、小さなランプのほのかな明かりに照されながら、灰で汚れたワンピースを着て、横になっていました。どうやってここまで来たかと言いますと、シンデレラは、全速力で、飼育小屋を通り抜けて、ハシバミの木のところまで来ました。そして木の下でドレスを脱ぎ、鳥さんが持ち帰れるように、木の下に置いてから、いつもと同じように灰色のワンピースを着て、灰の中に寝そべったというわけです。

五、舞踏会、二日目

次の日も舞踏会は催されて、お父さん、継母、姉たちが出かけてしまうと、シンデレラは、ただ一人、ハシバミの木のところへ行っては、「……ふるえて、ゆれて、小さな木、わたしに金銀ふりかけて」と言うと、鳥さんが持って来たのは、昨日よりもずっと綺麗なドレスでした。それを舞踏会に着て行くと、シンデレラが余りにも美しいので、みんな驚いてしまいました。王子様は、シンデレラを待ち焦がれていて、手を取って一緒にダンスをしました。ほかの人がシンデレラにダンスを申し込んでも、王子様は、やっぱりこう言うのでした。「……このかたは、ぼくとダンスをしているのですよ」と。……

夜が更けて、帰る時間になりました。この日も王子様はつけて行って、昨日見失ったところまで来ました。しかし、シンデレラは、あっという間に、家の裏庭に消えてしまいました。庭においしそうに実を付けた洋なしの木がありました。シンデレラは、ほかに隠れるところも見つからないので、誰にも見られないうちにと木の葉っぱの中へ隠れてしまいました。――王子様は、シンデレラを見失ってしまい、どこに行ったか全く分からなくなりました。シンデレラのお父さんが帰って来ると、王子様は、こう言いました。「……一緒にダンスを踊った、なぞのお姫様が消えてしまったのです。たぶん、この洋なしの木の中に隠れていると思うのですが」と言うと、「……もしかして、シンデレラが？」とお父さんは思って、斧を持って来ました。えいと木を切り倒しましたが、そこには人の影もかたちもありませんでした。

みんなが台所へ行くと、シンデレラは、やっぱり灰の中で横になっていました。――どうやったかと言うと、シンデレラは、木の反対側から飛び降りて、きれいなドレスをハシバミの木の鳥さんに返してから、灰色の小さなワンピースに着替えたというわけでした。

五、舞踏会、三日目

さて、三日目、お父さん、継母、姉たちが舞踏会へ行くと、シンデレラはまたハシバミの木のところへ行って言いました。「……ふるえて、ゆれて、小さな木、わたしに金銀ふりかけて」と。鳥さんが持って来たのは、昨日よりもさらに綺麗なドレスで、今度は靴が

金でできていました。舞踏会へ行くと、シンデレラの余りの美しさに誰もみな言葉もありませんでした。王子様は、シンデレラ以外の誰とも踊ろうとしませんでした。ほかの人がシンデレラにダンスを申し込んでも、王子様は、「……この方は、ぼくのパートナーなのですよ」と、こう言うのでした

夜が更けて、帰る時間になりました。やっぱり王子様は、ついて行く気でした。「……今度こそ見失わないぞ」と、心に誓いましたが、シンデレラもやっぱり王子様の前からぱっといなくなりました。でも、王子様は、頭を働かせて、前もって階段を全部オイルでべとべとにしておきました。ですから、シンデレラは階段を駆け下りた時に、左の靴がひっ付いて脱げてしまい、王子様は、その靴を拾い上げました。それは、小さく美しい「金の靴」でした。

六、靴の持ち主を探し求めて

次の日、王子様のお父さん、つまり王様のところへ行って、「……ぼくは、この金の靴がぴったり履けるお姫様を、自分のお妃にしたい」と言いました。

シンデレラの二人の姉は、この話を聞いて大喜びしました。二人の足は綺麗ですから、絶対に履けると思い込んでいたのです。――まず、上の姉が靴を持って自分の部屋に行きました。継母が見守る中、靴を履いてみようとしました。けれども、靴は思ったよりも小さくて、親指が邪魔をして靴が履けませんでした。継母は、それを見て、上の姉にナイフを手渡しては、「……大丈夫、切り取ればいいのよ。お妃様になれば、親指の一つや二つどうでもいいことになるわ。歩かなければいいんですから」と言うのでした。

上の姉は、継母の言うことを聞き入れて、親指を切ってしまいました。それから、無理やり靴の中に押し込んで王子様に見せました。王子様は、上の姉をお嫁さんとして、自分の馬に乗せて、お城へ帰ることにしました。――けれども、お城への帰り道、シンデレラが植えたハシバミの木のそばを通らなければなりませんでした。その時、梢の上で、小さな鳩が留まって、歌を歌っていました。「……うしろを見て、振り返ってよ、靴の中は血だまりだ。靴が小さ過ぎるんだ。本物のお嫁さんがあなたを待ってる」と。そこで、王子様は、馬を下りて、上の姉の足を確かめました。血が流れていたので、王子様は、騙されたことに気が付きました。馬をまわれ右をさせて、にせ者のお嫁さんを家に送り返しました。

七、靴の持ち主を探し求めて

王子様は、シンデレラの家の前でこう言いました。「……この人は、本当のお嫁さんではありません。誰かほかの娘さんにこの靴を履かせて見てください」と言うと、今度は、下の姉が部屋に行って、靴を履こうとしました。けれども、踵が邪魔して靴が履けませんでした。そこで継母は、血が出るまで無理やり靴の中へ押し込んでから、王子様に見せました。王子様は、下の姉をお嫁さんとして、自分の馬に乗せてお城へ帰ることにしました。でも、ハシバミの木のところまで来た時、またあの小さなハトがいて、歌を歌っていたのです。「……うしろを見て、振り返ってよ、靴の中は血だまりだ。靴が小さ過ぎるん

だ。本物のお嫁さんがあなたを待ってる」と。王子様が馬の上から見ると、下の姉の靴からたくさんの血が流れていて、白い靴下がまっ赤になっていました。王子様は、馬をまわれ右をさせて、家に送り返しました。

王子様は、シンデレラのお父さんにこう言いました。「……この人は、本当のお嫁さんではありません。なお、ほかに娘はいないのですか？」と。すると、お父さんは、こう返事をしました。「……いません。ただ、わたしの連れ子にうす汚れたシンデレラという娘がいますが、あの子が本当のお嫁さんだなんて絶対あり得っこないです」と言うのでした。けれども、王子様は、連れて来なさい、と言いました。継母がしゃしゃり出て、言いました。「……あの子はダメですよ。うす汚いから、王子様の前には出て来たくないって」と言うと、でも、王子様は、連れて来なさい、と言い張りました。シンデレラは、まず顔と手を洗ってから、王子様の前に現われました。スカートの縁をつまみ、ひざを曲げ、挨拶をしました。王子様は、金の靴を手渡しました。シンデレラは、ぼろぼろの靴を左足から外して、金の靴を履きました。シンデレラのために作られたみたいに、靴はするするっと足に収まりました。王子様は、シンデレラをそばに引き寄せてじっと見つめました。確かに、見たことのある顔だったのです。「……この人が、本当のお嫁さんです」と、王子様の言葉を聞いて、継母と二人の姉はぎょっとしました。シンデレラが王子様の馬の上に乗せられた時、継母も二人の姉たちも怒って、顔は真っ青になっていました。

王子様とシンデレラは、馬に乗って、ハシバミの木を通りがかりました。あの白いハトは、このように歌っていました。「……うしろを見て、振り返っても、靴の中に血はないわ。靴も小さくないから、本物のお嫁さんは、あなたのそばに」と。ハトは歌を歌い終えると、梢から離れて、シンデレラの右肩にちょこんと止まり、一緒にお城へ行きましたとさ。（完）

＊　　＊

さて、王子様との結婚式がとり行なわれた日、二人のいじわるな姉は、シンデレラに取り入って、幸せにあやかろうとしました。誓い合った二人が、教会へ向かった時、上の姉は、右側にいて、下の姉は、左側にいましたが、真ん中にいたハトに、二人とも片方の目を食べられてしまいました。二人が帰って来た時に、今度は、上の姉は、左側にいて、下の姉は、右側にいたため、真ん中にいたハトに二人とももう片方の目も食べられてしまいました。こうして、悪いことばかりしていた二人の姉は、戒めとして、一生目が見えなくなったということです。（完）

＊　　＊

星の銀貨（ぎんか）

星の銀貨

むかしむかし、小さい女の子がありました。この子には、お父さんもお母さんもありませんでした。たいへん貧乏でしたから、しまいには、もう住むにも部屋はないし、もう寝るにも寝床がないようになって、とうとうおしまいには、体につけたもののほかは、手に持ったパン一かけらしかなく、それも情け深い人が恵んでくれたものでした。

さて、この子は、心の素直な信心の篤い子でありましたが、それでも、こんなにして世の中からまるで見捨てられてしまっているので、この子は、やさしい神様のお力にだけすがって、一人ぼっちで野原の上を歩いて行きました。すると、そこへ貧乏らしい男の人が出て来て、「……ねえ、何か食べるものをおくれ。お腹が空いてたまらないよ」と言うのでした。そこで、女の子は、手に持っていたパン一かけらを残らず、その男にやってしまいました。そして、「……どうぞ神様のお恵みのありますように」と祈ってやって、また、歩き出しました。すると、今度は、子供が一人泣きながらやって来て、「……私、頭が寒くて凍りそうなの。何か被るものちょうだい」と言うのでした。

そこで、女の子は、被っていた頭巾を脱いで子供にやりました。それから、女の子がまた少し行くと、今度出て来た子供は、着物一枚着ずに震えていました。そこで、自分の上着を脱いで着せてやりました。それからまた少し行くと、今度出て来た子供は、スカートがほしいと言うので、女の子はそれも脱いでやりました。

そのうち、女の子はある森に辿り着きました。もう暗くなっていましたが、また、もう一人子供が出て来て、肌着をねだりました。あくまで心の素直な女の子は、（もう真っ暗になっているから誰にも見られやしないでしょう。いいわ、肌着も脱いで上げることにしましょう）と、思って、とうとう肌着まで脱いでやってしまいました。

さて、それまでしてやって、それこそ、ないといって、きれいさっぱりなくなってしまった時に、たちまち、高い空の上からお星様がばらばら落ちて来ました。しかも、それが全くの、ちかちかと白銀色をした、ターレル銀貨ではありませんか。その上、つい今しがた肌着を脱いでやってしまったばかりなのに、女の子は、いつの間にか新しい肌着を着ていて、しかも、それは、この上なくしなやかな麻の肌着でありました。

女の子は、銀貨を拾い集めて、それで一生豊かに暮らしました……。（完）

＊　＊

さて、この作品の内容は、まさに書いてある通りであるが、それでは、この話の意味するところは、一体、何かと問えば、それは、恐らく、次のようなことではないかと思う。

――まず、『聖書』の中には、「……求める者には与えよ、借りようとする者を断るな」とある。それは、つまり、「……すべてを失うことによって、逆に、すべてを得ることになる」ということであり、それをもっと具体的に言えば、「……物質的な豊かさを失うことによって、逆に、精神的な豊かさを手に入れることになる」ということである。つまり、「精神的な豊かさ」というのは、いわゆる「物質的な豊かさ」に固執している限りは、永遠に得ることはできず得ないものであり、そして、真に「精神的な豊かさを得る」ことこそは、実は、人間としての「最も幸せなこと」であり、それは、「天上の世界」へと近づくことになるとともに、その「天上からの恵み」をも授かることになるからである。……

＊　＊

蛙(かえる)の王様

蛙の王様

一、一番下のお姫様

昔々、まだ人の願いごとが何でもかなった頃のこと、あるところに、一人の王様がありました。その王様には、美しいお姫様がたくさんありましたが、その中でも、いちばん下のお姫様は、それはそれは美しい方で、世の中のことは、何でも見て知っていらっしゃるお日様でさえ、毎日照らしてみて、そのたんびにびっくりなさるほどでした。

さて、この王様のお城の近くに、こんもり深く繁った森があって、その森の中に一本ある古い菩提樹の木の下に、きれいな泉が滾々と湧き出していました。暑い夏の日盛りに、お姫様は、よくその森へ出かけて行っては、泉のそばに腰を下ろして休みました。そして、退屈すると、金のまりを出して、それを高く投げ上げては手で受け取ったりして、それを何よりも面白い遊びにしていました。……

ある日、お姫様は、この森に来て、いつものように好きなまり投げをして遊んでいるうちに、ついまりが手から逸れて落ちて、泉の中へころころ転げ込んでしまいました。お姫様はびっくりして、そのまりの行方をながめていましたが、まりは水の中に沈んだまま分からなくなってしまいました。泉はとても深くて、覗いても覗いても底は見えません。そこで、お姫様は、悲しくなって泣き出しました。そして、だんだん大きな声になって、おんおん泣き続けるうちに、自分でも自分をどうしていいか分からなくなりました。

二、蛙との出合い

さて、お姫様がそんなふうに泣き悲しんでいると、どこからかこうお姫様に呼びかける声がしました。「……お姫様。どうなすったの、お姫様。そんなに泣くと、石だって、お可哀想だと泣きますよ」と言うので、お姫様は、おや、と思って、声のする方を見まわしました。すると、そこに一匹の蛙がぶよぶよ膨れて、いやらしい頭を水の中から突き出して、こちらを見ていました。「……ああ、水の中のぬるぬるぴっちゃりさん、お前だったの、今、何か言ったのは」と、お姫様は、涙を拭きながら言いました。「……あたしの泣いているのはね、金のまりを泉の中に落としてしまったからよ」と言うと、「……もう泣かないでください。わたしがいいようにして上げますからね」と言うのでした。すると、「……じゃあ、まりを見つけてくれるって言うの」と聞くと、「……ええ、見つけて上げましょう。でも、まりを見つけて来て上げたら、何をお礼に下さいますか」と聞くのでした。そこで、「……かわいい蛙さん」と、お姫様は言い、「……お前の欲しいものなら、何でも上げてよ。あたしの着ている着物でも、光る真珠でも、綺麗な宝石でも、それから金の冠でも」と言うと、「……いいえ、わたしはそんなものは欲しくはないのです。けれど、もしかあなたがわたしを可愛がってくだすって、わたしをいつもお友だちにして、あなたのテーブルのわきに座らせて下すって、あなたの金のお皿から何でも食べて、あなたの小さいお杯でお酒を飲ましていただいて、夜になったら、あなたの可愛らしいお床のそばで眠ってもよいとおっしゃるなら、わたしは水の中から金のまりを見つけて来て上げましょう」と、蛙は言うのでした。「……ええ、いいわ、いいわ。金のまりを取って来てくれさえすれば、

お前の言う通り、何でも約束して上げるわ」と、お姫様はこう答えました。そう言いながら、心の中では、「……蛙のくせに、人間の仲間入りしようなんて、ほんとうに図々しい、お馬鹿さんだわ」と、思っていたのでした。

三、お姫様の約束破り

蛙は、そこで約束の通り、水の中にもぐって行きました。しばらくすると、ちゃんと金のまりを口にくわえて、ぴょこんと浮かび上がって来ました。そして、「……さあ、拾って来ましたよ」と、そう言って、草の中にまりを置きました。ところが、お姫様は、そのまりを掴むなり、ありがとうとも言わず、とんで帰って行きました。かえるは大声を上げて、「……待ってください、待ってください」と言いながら、「……わたしも一緒に連れてって、わたしはそんなに駆けられない」と言うのでした。……

けれど、蛙がうしろでいくらぎゃあぎゃあ大きな声で喚いたって、何の足しにもなりませんでした。お姫様は、てんでそんなものは耳にも入らないのか、とっとっとうちの方へ駆け出して行ってしまって、蛙のことなんかきれいに忘れていました。蛙は、仕方がないので、すごすごと元の泉の中へもぐって行きました。

四、翌日、夜の食事時に……

その翌日のことでした。お姫様が、王様や残らずのご家来衆と一緒に食事のテーブルに向かって、金のお皿で御馳走を食べていますと、外で誰かが、ぴっちゃり、ぴっちゃりと大理石の階段を上がって来る音がしました。そして、上まで上がってしまうと、戸をとんとん叩いて、「……王様のお姫様、一番下のお姫様、どうぞこの戸を開けてください」と言う声がしました。――お姫様は立ち上がって行って、誰かしらと見ようと思って、戸を開けると、そこには何と昨日の蛙が、ぺっちゃりと据わっているのでした。

お姫様は、ぎょっとして、ばたんと戸を閉めるなり、知らん顔で席に戻りました。でも心配で心配でなりません。お姫様が胸をどきどきさせているのを、王様はちゃんと見ておいでで、「……姫や、何をびくびくしているのだい。戸の外に大入道の鬼が来て、お前を掠っていこうとでもしているのかい」と、尋ねました。「……あら、違うの」と、お姫様は答えました。「……大入道の鬼なんかじゃないわ。でも、気味の悪い蛙が来て」と言うと、「……その蛙が、お前にどうしようというのだね」と聞くので、「……あの、おとう様、それはこういうわけなのよ。あたし、昨日、いつもの森の泉のところで遊んでいましたらね、金のまりが水の中に転げ落ちてしまったのよ。それであたしが泣いていると、蛙が出てきて、まりを取ってくれたの。それから、蛙がしつっこく頼むもんだから、じゃあお友だちにして上げるって、あたし蛙に約束してしまったのよ。まさか、蛙が水の中からのこのここうやって来ようとは、思わなかったんですもの。それが、あの通りやって来て、中へ入れてくれって言うのですもの」と、素直に答えるのでした。

五、蛙の言い分と王様の対応

その時、また廊下の戸をとんとん叩く音がして、そうして、大きな声で呼ぶのでした。

いちばん下のお姫様、
開けて下さい頼みます。
冷たい泉の湧くそばで、
昨日、約束したことを、
あなたは覚えているでしょう。
いちばん下のお姫様、
開けて下さい頼みます。

すると、王様は、「……それはお前がいけないね。一度約束したことは、きっとその通りしなければならない。さあ、早く行って開けておやり」と言うと、お姫様は、しぶしぶ立って、戸を開けました。とたんに、蛙はぴょこんと跳び込んで来て、それから、お姫様の後について、ぴょこぴょこと椅子の所までやって来ました。そして、蛙は、そこにしゃがみ込んで上を見ながら、「……わたしもその椅子に上げてください」と言うと、お姫様がもじもじしているので、お父様がまた、蛙の言う通りしておやりと言いました。お姫様は、仕方なく、蛙を椅子に乗せてやりました。

すると、蛙は、また、「……どうぞ、わたしをテーブルの上に乗せてください」と言うので、お姫様が蛙をテーブルへと乗せてやると、今度は、「……さあ、その金のお皿をずっとわたしの方に寄せてください。そうすると、二人一緒に食べられるから」と言うのでした。お姫様は、蛙の言う通りしてやりました。ほんとに蛙がぴちゃぴちゃさも美味しそうに舌づつみ打って食べているのを見ると、お姫様は、もう気持ち悪がって、一口一口、何を食べても喉につかえるような思いでした。

蛙は、食べるだけ食べると、お腹を前へつき出して、「……ああ、お腹が張って眠くなった。お姫様、さあ、わたしをあなたのお部屋に連れて行ってください。可愛らしいあなたの絹のお床の中で、わたしはゆっくり眠りたい」と言うのでした。

それを聞いて、お姫様は、もう我慢が出来なくなり、しくしく泣き出してしまいました。ほんとに、ぬるぬる、ぴちゃぴちゃ、触るのも気味の悪い蛙が、お姫様の綺麗なお床の中で眠りたいなんて言うのですもの、お姫様が悲しくなるのも無理はありません。するとまた、王様は、「……泣くことがあるか。誰でも困っている時に助けてくれた者に、あとで知らん顔するのは、いけないことだよ」と、言うのでした。

お姫様は、さも気味悪そうに指の先でそっと蛙をつまみ上げて、上のお部屋まで持って行くと、そっと隅っこに置きました。そうして、自分だけがお床に入ってしまいました。ところが、蛙は、さっそく、のこのこ這い出してきて、「……ああくたびれた、くたびれた。早くゆっくり眠りたい。さあ、そこへ上げてください。でないと、おとう様に言い付けますよ」と言うのでした。――これでお姫様は、すっかり腹が立ちました。そこでいきなり蛙を掴み上げて、ありったけの力でしたたか壁に叩きつけました。「……さあ、これでたんと楽に眠るがいい。ほんとに厭な蛙ったらないわ」と言うのでした。

ところが、どうでしょう。蛙は、床の上に転げたとたん、もう蛙ではなくなって、世にも美しい優しい目をした王子に変わっていました。

さて、この王子は、お姫様のおとう様の思し召しで、お姫様のお友だちでもお婿様でもあることになりました。その時、王子はあらためて、自分の身の上の話をして、ある悪い魔法使いの女のために呪われて、醜い蛙の姿に変えられたが、それを泉の中から助け出して、元の人間に返してくれるものは、この王様のお姫様のほかになかったと言いました。それで、明日は、もうさっそく、二人連れ立って、自分の国に帰って行くつもりだとも言うのでした。

六、王子の王国へと…

それで二人はゆっくり休みました。そして、あくる朝、お日様がにこにこ二人をお起しになる時分、八頭立ての白馬をつけた馬車が入って来ました。どの馬も頭に白いだちょうの羽根をかぶって、金のくさりを引きずっていました。馬車のうしろには、若い王様のご家来が、しゃんと立っていました。これが忠義もののハインリヒでありました。

忠義もののハインリヒは、鉄のたがを三本も胸に巻き付けていました。それは、ご主君が蛙にされてしまったので、悲しくて悲しくて、今にも胸が破裂しそうになったので、やっとたがをはめて押さえていたのです。大切な王様が元の姿に返ったので、今日、さっそく、八頭立ての馬車でお迎えに来たのです。忠義もののハインリヒは、お二人を馬車の中に入れて上げて、自分はまた馬車のうしろにしゃんと立ちながら、ご主君のまた世に出たことを思って、ぞくぞくするほど嬉しくてなりませんでした。

さて馬車が少し走り出したと思う頃、王様のお耳のうしろで、ぱちりぱちりと何かはじける音がしました。若い王様は、その時、うしろを振り返って言いました。

ハインリヒ、馬車が壊れるぞ。
「いいえ、いいえ　お殿様、
それは馬車ではございません。
せっしゃの胸にはめたたが。……
殿様がカエルにならしゃって、
ぎゃあぎゃあ泉で泣かしゃるで、
張り避けそうなこの胸を、
無理に押さえたそのたがが……」

それでも、ぱちりぱちりとまた二度もはじける音がしました。若い王様は、そのたんびに馬車が壊れるのではないかと思いました。けれども、それはやはり、ご主君が人間に返って、楽しい日を送られることになったので、塞がっていたハインリヒの胸が開けたために胸のたがが破裂して、飛び散る音でございました。（完）

＊　＊

いばら姫

（グリム童話）

いばら姫

一、いばら姫の生い立ち

昔々、王様とお妃がありました。王様とお妃は、「……何とかして、子供が一人欲しいものだが」と、毎日言い暮らしていましたが、いつまで経っても、子供は一人もありませんでした。――ところが、ある時、こんなことがありました。それは、お妃が水を浴びて体を清めているところへ、蛙が一匹、川の中から陸へ這い上がって来て、「……お妃様のお望みは、叶うことになります。一年経たないうちに、お姫様が御誕生になりましょう」と、お妃様にこう口を利いたのです。

蛙の言ったことがほんとうとなって、お妃様は女の子を産みました。そのお姫様がまた、それはそれは美しかったので、王様は、うれしくてうれしくて、手の舞い足の踏むところを知らず、お祝いの宴会を盛大に催すことになりました。王様は、親戚のものや友だちや顔見知りの人たちばかりでなく、例の「神通力を持った女たち」（つまり「妖女」たち）まで招いて、お姫様を可愛がってもらおうと思いました。そして、その「神通力を持った女たち」（つまり「妖女」たち）というのは、王様のお国には十三人いたのです。ところが、その女たち（妖女たち）の食事に使う黄金のお皿は十二枚しかなかったので、十三人のうち、誰か一人だけは、どうしても呼ばれるわけにはいかなかったのです。

二、ある妖女の呪いの言葉

お祝いの宴会は、それはそれは申し分なく立派に催されましたが、御馳走がすむと、神通力を持った女たち（妖女たち）は、その赤ん坊のお姫様にめいめい色々の素晴らしい贈りものをしました。一人は、美徳を、一人は、美しさを、また、三人目は、富を贈るというように、みんなこの世で願わしいものを残らず贈りました。こうやって、十一人までめいめいの祈願を唱え終わったところに、つかつかと一人の女が入って来ました。この女（妖女）は、自分だけがお祝いに呼ばれなかったので意趣返し（復讐）をするつもりで、人に挨拶をするどころか、誰の顔も見ずに、「……王様のお姫様の運命は、十五歳になると、糸車の紡錘に刺され、そのまま倒れて死ぬことだよ」と、声を張り上げました。そして、それぎり一言も言わず、ぐるりと後ろを向いて、大広間を出て行ってしまいました。

みんな、ぎょっとして恐れ戦いているところへ、十二人めの女が現われました。この女の人（妖女）は、まだ自分の祈願を言わずにいたのですが、この不吉な呪いを完全に取り除くだけの妖力はなく、その力を和らげることしか出来ませんでしたが、「……王様のお姫様は、死ぬのではなく、百年の間、死んだ様に眠り続ける」と告げるのでした。

王様は、大事なお姫様を不幸な目に遇わせまいと思って、国じゅうの紡錘という紡錘を、一つ残らずしまえという命令を出しました。――ところで、お姫様のほうはどうかと言うと、なにしろ、神通力を持った女たちの授けてくれたものが、一から十までそっくりその通りに顕れたのですから、器量が美しく、しとやかで、親切で、物のわかりがよく、お姫様を見たものは誰でもこの方を可愛がらずにはいられませんでした。

三、十五歳になった日に、

ところが、お姫様が丁度十五歳になった日のこと、王様とお妃はお留守で、お姫様一人でお城にお留守番をすることになり、お姫様は、そこいらじゅう歩きまわって、いろいろなお部屋を興にまかせて見物しましたが、おしまいに、古い塔に行きあたりました。その幅の狭い螺旋状の階段を上がると、小さな戸のところへ出ました。錠前には、さびた鍵がささっていました。その鍵をぐるりとまわすと、その入り口の戸が勢よく、ぴーんと開いて、小さなお部屋の中には、紡錘を手にしたおばあさんが一人、ちょこんと腰をかけて、わき目も振らず麻を紡いでいました。

お姫様は、「……おばあさん、今日は」と、声をかけて、「……おばあさん、何してるの？」と聞くと、おばあさんは、「……糸をとっております」と、こう言って、頷きました。すると、お姫様は、「……それ、なあに？　面白そうにぐるぐる跳ねまわってるもの」と、こう言いながら、紡錘を手にとって、自分も糸を紡いでみようとしました。ところが、その紡錘にちょいと触れたとたんに、いつぞやの「呪いの言葉」がそっくりほんとうになってしまい、お姫様は、指を紡錘で突いてしまいました。

お姫様は、突いたなと思った時には、もうそこにあった寝台の上へぐったりと倒れて、ぐうぐう寝てしまいました。すると、その深い睡眠は、お城じゅうに広がりました。王様とお妃は、その時丁度お帰りで、広間へ足を入れたばかりでしたが、そのままぐうぐう寝てしまい、宮中の人たちも、王様とお妃のお相伴（同席者）も、一人残らず眠ってしまいました。こうなると、馬は厩舎の中で、犬は広い庭で、鳩は屋根の上で、蝿は壁に止まったままで寝てしまいました。それどころではありません、かまどでぱちぱち燃えていた火は、音がしなくなって寝込んでしまいましたし、焙肉は、ぷすぷすいうのをやめてしまったのです。それから、お料理番は、下働きの小僧が何かしくじったので、小僧の髪の毛をぐいっと引っ張ろうとしたのを、そのままにして寝てしまいました。それから、風は凪いでしまって、お城の前の木の枝では、もう葉っぱ一枚動かなくなりました。

四、いばら姫の伝説の誕生

お城のまわりには、いばら（棘のある草木）が生け垣のようになって、ぐんぐん伸び出しました。そのいばら（棘のある草木）は一年ごとに丈が高くなって、早々に城全体を取り巻きましたが、それでもまだ伸びるわ伸びるわ、お城よりも高くなって、お城はまるで何にも見えなくなってしまい、屋根の上の旗さえ見えなくなりました。

眠っている美しい「いばら姫」の伝説は、お国じゅうに広がりました。いばら姫というのは、王様の「お姫様」に付けられた名前です。この話を聞き知った方々の王子たちは、時々やって来て、この生け垣を通り抜けて、力ずくでお城へ入ろうとしたものですが、それは、誰一人としてうまく行きませんでした。いばら（棘のある草木）は、まるで手がありでもするように、しっかり抱き合ってしまうので、若い人たち（王子たち）は、茨園の中で引っかかったままで、体を抜くこともできず、むごい死に方をするのでした。

五、それから百年後、

それから何年も何年も経ってからのこと、ある時、一人の王子がこの国へ来て、どこかのおじいさんがいばらの生け垣の話をするのを耳にしました。その話によると、生け垣のような藪の後ろにはお城があって、そのお城の中には、いばら姫という名前の、びっくりするほど美しい王女が百年このかた眠り続けている。その「お姫様」と一緒に、王様もお妃も、それから、御家来たちも残らず眠っているというのです。年寄りは、また、これまでに王子が大勢やって来て、このいばらの垣根を無理やりに通り抜けようとしてみたが、誰も彼もその中でひっかかって、情けない死に方をしたのだと、その年寄りのお祖父さんから話を聞いていて知っていました。――これを聞いて、若い人は、「……わたしは、恐くない。ひとつ出かけて行って、美しいいばら姫に会って来る」と言いました。善人の年寄りは、一生懸命に止めてみましたけれども、王子は、年寄りの言葉を耳にも入れませんでした。

六、百年目の日、その王子は……

ところで、この時丁度百年という歳月が過ぎ去って、いばら姫は目を覚ますことになっている日が来ていたのです。王子がいばらの生け垣に近寄った時には、棘の垣根は、それこそ、一面、大きな綺麗な花ばかりで、それがひとりでに口を開けて、かすり傷一つ付けず、王子を中へと通してしまうと、開いた口はまたふさがって、元の垣根になりました。やがて、広い庭には、馬だの斑の猟犬だのが何頭も何匹もゴロゴロ転がって眠っていました。屋根の上には、鳩が何羽も止まって、可愛らしい頭を翼の下に突っ込んでいました。それから家の中へ入ってみると、蝿は壁に止まって寝ているし、台所にいるお料理番は、今でもやっぱり下働きの若い衆に掴みかかるような手つきをしているし、下女は下女で、手をむしれと言いつかったまっ黒なにわとりの前に斜にかまえていました。

ずんずん奥へ入って行くと、広間には、御家来たちが残らず転がって寝ていますし、一段高いところには、玉座の近く、王様とお妃が横になっているのが目につきました。それからまた奥へ奥へと入って行きました。あたりは森閑としていて、自分の吐く呼吸が聞こえるほどです。いちばんおしまいに、王子は例の塔へ来て、いばら姫の眠っている小さいお部屋の戸を開けました。いばら姫は横になっていました。姫があんまり美しいので、王子は目を背けることもできず、そのまま身をかがめて、姫に接吻をしました。

七、王子の唇が姫の体に触れると

王子の唇が姫の体へ触れたとたんに、いばら姫は、ぱっちりと目を開きました。そして、眠りが覚めて、世にもなつかしそうに王子をながめました。二人は、連れ立って塔を降りました。そうすると、王様が目を覚まして、それからお妃が目を覚まして、それから御家来全体が目を覚まして、みんな大きな目をして、お互いにながめ合いました。

広い庭にいた馬が起き上がって、ぶるぶるっと胴ぶるいすれば、猟犬は、飛び上がって尻尾を振る、屋根の上の鳩は、かわいい頭を翼の下から出したと思うと、あたりを見まわして野原へ飛んでいく、壁に止まっていた蝿は、もぞもぞ這い出す、台所の火は燃え上

がって、めらめら舌を出しながら食べものを煮(に)る、焙肉(やきにく)は、また、ぷすぷすいい出す、お料理(りょうり)番は、小僧の横っつらを張り飛ばしたので、小僧は、ぎゃーっ言いましたし、下女(げじょ)は、にわとりの毛をむしってしまいました。

それから、王子といばら姫とのご婚礼の式が、それはそれは立派に挙(あ)げられ、二人は、世を終わるまで（この世を去るまで）、何不足なく楽しく暮らしました。（完）

＊　＊

ラプンツェル

ラプンツェル

一、ある夫婦者に子供が…

昔々、あるところに夫婦者があって、もう長いこと、子供が是非とも欲しいと思っていましたが、なかなかそう上手くはいかず、それでも、やっとのことで神様が二人の願いを叶えてくださいました。この夫婦の家の後方には小さな窓が一つあって、そこから、それはそれは美しい色々な花や野菜のいっぱい生育っている素晴らしい立派な畑が見えるのでした。ところが、その畑は、背の高い石塀で頑丈に囲まれている上に、その持主は、何と恐ろしく勢いが強くて、世間中の人たちから怖がられていた魔女のものでしたから、その畑の中へ入り込もうと勇気のあるものなど、誰一人としてありませんでした。

二、ある日のこと、

さて、ある日のこと、おかみさんがこの窓ぎわに立って、外を見下ろしていると、世にも見事な野ぢしゃ（ラプンツェル）の生え揃った一区切りの広畝（畑）が目につきました。その野ぢしゃは、いかにもみずみずしく青々としていたので、おかみさんは、あんな青々とした新鮮な菜を食べたら、どんなに美味しいだろうと思うと、もうそれが食べたくって食べたくって、どうにもたまらない気持ちになりました。それからは、毎日毎日、菜の事ばかり考えていましたが、いくら食べたいと思っても、どうしてもそれを手に入れることは出来ないと承知しているので、それが元で病気になって、日増しに痩せ衰えて、顔の色も青く、見る影もなくなりました。これを見て、ご主人はびっくりして、「……お前、一体、どうしたのだい」と聞くと、おかみさんは、「……ああ、情けないこと！　あたし、家の後方の畑にあるあの野ぢしゃが食べられなけりゃ、死んでしまうわ」と言うのでした。

三、魔女の畑の菜を取る

ご主人は、おかみさんを可愛いく思っていたので、「……女房を死なせるくらいなら、もうどうなってもいい、その菜を取って来てやろう」と考えて、ご主人は、夜にまぎれて、高い石塀を乗り越えて、魔女の畑へと降りると、大急ぎで野ぢしゃを一つかみ抜き取っては、おかみさんに持って来ました。おかみさんは、それでさっそくサラダをこしらえて、がつがつ食べてしまいました。ところが、そのサラダの味がどうしても忘れられない程に美味しかったので、あくる日になると、前よりも三倍も食べたくなってしまい、そのおかみさんの気持ちを落ち着かせようとするには、ご主人は、いやでももう一度例の畑へ取りに行かなければならない事になりました。

四、再び、菜を取りに、

そこで、日が暮れてから、またもや畑へ降りたのですが、高い石塀を降り切って見ると、そこには何と魔女が目の前にすっと立っていたのです。男は肝も潰れんばかりにぎょ

っとして、その場に立ち竦んでしまいました。すると、魔女は、恐ろしい目付きで、「……よく、こんなことが出来たもんだね」と言って、魔女は、かっと男を睨みつけました。そして、「……人の畑へ降りて来て、泥棒みたいにあたしの野ぢしゃを盗むなんて、こっぴどい目に遇わせてやるよ」と言うのでした。すると、男は、「……ああ！　どうかご勘弁を……」と言い、そして、「……何も好んでこのようなことをした訳ではないのです。全くせっぱ詰まって余儀なくしたことなのです。それは、毎日、女房が窓からあなた様のラプンツェルをながめているうちに、どうにもこうにももう食べたい食べたいと思い詰めるようになってしまい、ついには、あたし、あの野ぢしゃが食べられなけりゃ、もう死んでしまうわ、と言う程になってしまったのです」と言うのでした。

五、魔女との或る約束

それを聞くと、魔女は、いくらか怒りをやわらげて、「……お前の言うことが本当ならば、ここにあるラプンツェルをお前の欲しいだけ持たして上げるよ。だがね、こっちにも一つ条件があるよ。それは、お前のおかみさんが子供を産んだならば、その子供をあたしによこさなくちゃいけないよ。子供は幸福にしてやる、私が母親のようにその子供の世話をして上げるからね」と言うのでした。すると、男は何よりもわが身の心配が先に立って、何もかも約束してしまいました。そういうことから、おかみさんがいよいよお産で女の子を産むと、すぐさま、魔女がその姿を現わして、その子に「ラプンツェル」（野ぢしゃ）という名をつけて、自分と一緒に連れて行ってしまいました。

六、十二歳になると、

ラプンツェルは、お日様の下にいるいちばん美しい子供になりました。そして、十二歳になると、魔女は、或る森の中にある塔の中へ彼女を閉じ込めてしまいました。その塔というのは、梯子もなければ出入口もなくて、ただ頂上に小さな窓が一つあるだけでした。そして、魔女が中に入ろうと思う時には、塔の下に立って、大きな声でこう言うのです。

「……ラプンツェルや、ラプンツェル、お前の髪の毛を下げておくれ」と。

ラプンツェルは、黄金を紡いだような長い美しい髪の毛を持っていました。それで、魔女の声が聞えると、彼女は、すぐに編んだ髪をほぐして、窓の鈎に巻きつけます。そうすると、髪の毛は二十エレン（十二メートル足らず）も下へぶらさがって、魔女は、その髪をたどって上に登って来るのです。

七、この国の王子が

その後、何年か経ってからのこと、この国の王子がこの森の中を馬で通って、この塔の下まで来たことがありました。その時、塔の中から何とも言いようのない美しい歌が聞こえて来たので、王子はじっと立ち止まって聴き惚れていました。それは、ラプンツェルが独りぼっちの寂しさから、愛くるしい声を響かせて、いわばその退屈しのぎで歌っていたのでした。王子は、上へ昇って見たいと思って塔の入口を捜してみましたが、いくら捜

しても見つからないので、そのまま帰って行きました。けれども、その時、聞いた歌が心の底まで沁み込んでいたので、それからは、毎日毎日、森へ出かけては、その歌に聴き惚れていました。――ある時、歌を聴きながら木のうしろに立っていると、魔女がやって来て、こう言いました。「……ラプンツェルや、ラプンツェル、お前の髪の毛を下げておくれ」と。それを聞くと、ラプンツェルは、編んだ髪をほぐして下へと垂らし、魔女は、それを伝わって、上へ登って行くのでした。

これを見た王子は、心の中で、「……あれが梯子になって、人が登って行かれるなら、俺も一つ運試しをやって見よう」と思って、その翌日、日が暮れかかった頃に、塔の下へ行って、「……ラプンツェルや、ラプンツェル、お前の髪の毛を下げておくれ」と言うと、上から長い髪の毛が垂れて来たので、王子はそれを登って行きました。

八、男をはじめて見て

ラプンツェルは、まだ一度も男というものを見たことがなかったので、今、王子が入って来たのを見ると、初めは大変に驚きました。けれども、王子は優しく話しかけて、一度聞いた歌が深く心に泌み込んで、顔を見るまでは、どうしても気が安まらなかったことを話したので、ラプンツェルもやっと安心しました。それから王子が妻になってくれないかと言い出すと、彼女は、王子の若くて美しいのを見て、心の中で、「……あのゴテルのお婆さんよりは、この人の方がよっぽどあたしを可愛がってくれそうだ」と思いましたので、はい、と言って、手を握らせました。彼女はまた、「……あたし、あなたとご一緒に行きたいんのですが、わたしにはどうして降りたらよいのか分わからないのです。そこで、あなたがお出になる度に、絹ひもを一本ずつ持って来て下さい。わたしそれで梯子を編んで、それが出来上がったら、下へ降りますから、馬へ乗せて連れてって下さい」と言うのでした。それから、魔女の来るのは、大抵、日中だから、二人はいつも日が暮れてから逢うことに約束を決めたのです。

九、魔女はそれに気づくと

さて、魔女は少しも気づかずにいましたが、ある時、ラプンツェルは、魔女に向かってうっかりと、「……ねえ、ゴテルのお婆さん、どうしてあなたの方があの若様より引き上るのに骨が折るんでしょうね。若様は、ちょいとの間に登っていらっしゃるのに」と言うのでした。「……何だって！　この罰当たりめ！」と、魔女は急に高い声を張り上げました。「……何だって？　私はお前を世間から引き離して置いたつもりだったが、お前は私を瞞したんだね！」と、こう言って、魔女は、ラプンツェルの美しい髪を攫んでは、左の手へぐるぐると巻きつけ、右の手に剪刀を執って、ジョキンジョキンと切り取って、その見事な辮髪を床の上へ切り落してしまいました。そうしておいて、何の容赦もなく、この憐れな少女を砂漠の真ん中へ連れて行って、悲しみと嘆きの底へと沈めてしまいました。

十、魔女の怒り……

ラプンツェルを砂漠へ連れて行った同じ日の夕方、魔女はまた塔の上へ引返して来て、切り取った少女の辮髪をしっかりと窓の鈎へ結び付けておきました。そして、王子が来て、「……ラプンツェルや、ラプンツェル、お前の髪の毛を下げておくれ」と言うのを聞いて、魔女は、それを下へ垂らしました。（何も知らない）王子は登って行くと、上には可愛いラプンツェルの代わりに、魔女が意地の悪い、実に恐らしい目で睨んでいました。「……あっはは！」と魔女は嘲り笑いをして、「……お前は可愛いい人を連れに来たのだろうが、あの綺麗な鳥は、もう巣の中で歌ってはいない。あれは猫が攫って行ってしまったよ。今度は、お前の眼玉も掻きむしるかも知れない。ラプンツェルは、もうお前のものじゃない。お前はもう二度と彼女に遭うこともあるまい」と言うのでした。

十一、王子の目が、

それを聞くと、王子は、余りの悲しさからすっかり心を取り乱して、何がなんだかよく分からないうちに、塔の上から飛び降りてしまうのでした。幸いにも、命だけは助かりましたが、ただ落ちた拍子に両眼を潰してしまい、それからは、見えない両眼で森の中をあてどなくふらつき歩いて、木の根や草の実などを食べて、愛しい妻を失った事ばかりを嘆き悲しんで、ただただ泣くばかりでした。

十二、二人のめぐり遭い

王子はこういう憐れな有様で、数年の間、あてもなく彷徨い歩いた後、とうとうラプンツェルが棄てられた沙漠までやって来ました。ラプンツェルは、その後、男と女の双生児の子を産んで、この沙漠の中で悲しい日々を送っていました。王子は、ここまで来ると、どこからか聞いたことのある声が耳に入ったので、その声のする方へ進んで行くと、ラプンツェルがすぐに王子を認めて、いきなり頸へ抱きついて泣きました。そして、その涙が王子の眼へ入ると、忽ち、両方の眼が明いて、前の通り、よく見えるようになりました。

そこで王子は、ラプンツェルを連れて国へ帰りましたが、国の人々は、大変な歓喜ようで、この二人を迎えました。その後、二人は、永い間、仲睦まじく幸福に暮らしました。

それにしても、あの年寄りの魔女はどうなったのでしょう？　それを知るものは誰もありませんでした。（完）

＊　＊

ルンペルシュチルツヒェン

ルンペルシュチルツヒェン

一、粉ひきの一つの嘘から

昔、あるところに粉ひきがおりました。毎日、水車小屋で粉を挽くのを商売にして、貧しく暮らしておりましたが、一人、とても美しい娘を持っていました。

ところで、ひょんな事から、この粉ひきが王様と向かい合ってお話をすることになりました。そこで、少しばかり体裁をつくろうと思って、粉ひきはこんなことを言いました。「……私には娘が一人おりますが、藁を紡いで金に変えることが出来るのです」と。王様は、粉ひきのその話を聞いて、「……ほほう、それは珍しい芸当だね。本当に話の通り、お前の娘にそんな器用なことが出来るなら、さぞ面白いことであろう。では、明日、さっそく城へ連れて来るがいい。ひとつ、わたしが試してみてやろう」と言うのでした。

さて、娘は否応なしに王様のところへ連れて来られると、王様は、娘をさっそく藁のいっぱい積んであるお部屋に入れました。そうして、糸車と巻き枠を渡して、こう言いました。「……さあ、すぐに仕事にかかるがよい。今夜から明日の朝早くまでかかって、この藁が金に紡げなければ、そちの命はないものと思うがよいぞ」と。こう言い残して、王様は、自分で部屋の戸に錠をかけてしまい、娘は、一人部屋に閉じ込められました。

二、その時、小人が……

さて、娘は、ぽつねんとそこに座ったきり一体どうしたらよいのか、途方に暮れていました。藁を金に紡ぐなんてそんなことまるで分かりようがありません。だんだん心配になって来て、とうとうたまらなくなると、娘はわっと泣き出しました。その時、ふと戸が開いて、一人の豆つぶのように小さな男が入って来て、こう言いました。「……今晩は、粉ひきのお嬢ちゃん、何でそんなに悲しそうに泣くんだい」と。「……まあ、あたし、藁を金に紡がなければならないのだけど、どうしたらよいのか分からないの」と、娘は言いました。すると、小人が言いました。「……おいらが代わりにそれを紡いであげたら、一体、何を褒美にくれるんだい」と聞くので、娘は、「……この首飾りを」と言うのでした。

小人は、その首飾りをもらうと、糸車の前に座って、ぶるるん、ぶるるん、ぶるるん、と三度まわすと、巻き枠は金の糸でいっぱいになりました。それから、小人は、また二番目の巻き枠をかけて、ぶるるん、ぶるるん、ぶるるん、と三度まわすと、三度目で、また二つ目の巻き枠がいっぱいになりました。こうやって、あとからあとからやっていくうちには朝になりました。もうそれまでに残らず巻き枠は、すべて金の糸になっていました。

三、王様のさらなる要求

お日様が昇ると、もうさっそくに王様はやって来て、部屋じゅうきらきら光っている金を見て、びっくりしました。すると、余計にいくらでももっと金が欲しくなりました。王様は、また、粉ひきの娘をもう一つのやはり藁のいっぱい積んである、しかもずっと大きなお部屋へ連れて行かせました。そうして、今度もまた命が惜かったら、ひと晩でこれ

を金の糸に紡げと言い付けました。娘は、どうしていいか分からないので泣いていますと、今度もやはり戸が開いて、そこに小人が姿を現わしました。そうして、「……藁を金に紡いだら、何をおいらに褒美にくれるんだい」と聞くので、「……わたしの指にはめている指輪」と、娘は言いました。小人は、その指輪をもらうと、また糸車を、ぶるるん、ぶるるん、ぶるるん、とまわし始めました。そうして、朝までに残らずの藁をきらきら光る金の糸に変えてしまったのです。

四、小人との或る約束

王様は、うず高い金の山を見てニコニコしながらも、まだまだそれだけでは満足できなかったのです。そこで、またまた藁のいっぱい積んであるもっと大きい部屋へ、粉ひきの娘を連れて行かせました。そうして、「……さあ、今晩のうちにこれをすべて金に変えてしまうのだよ。そのかわり、首尾よくそれを成し遂げれば、わたしの妃にしてあげる」と言うのでした。「……たとえそれが粉ひきの娘風情であったとしても、それこそ世界じゅう探し求めたって、こんな金持ちの妻はないからな」と、王様は考えていました。

さて、娘が一人ぽつねんとしていると、例の小人は、三度目もまたやって来て、こう言うのでした。「……さあ、今度も藁を金に紡いであげたら、何を褒美にくれるんだい」と。「……あたし、もう何にもあげられるものがないわ」と、娘が答えると、「……じゃあ、こういうことにしよう。王様のお妃にお前がなって、一番初めに生まれた子供をおいらにくれると約束をおし」と言うのでした。すると、(どうなるものか、先のことなぞ分かるものではないわ)と、粉ひきの娘はそう考えて、それに、なにしろせっぱ詰まった中で、何をほかにどうしよう工夫もありません。そこで、娘は、小人の望むままの約束をしてしまい、そうして、小人は、三度目も、また、藁をすべて金に変えてしまったのです。

五、王様のお妃になると

さて、その翌る朝、王様はやって来てみて、何もかも注文した通りに行っているのが分かりました。そこで王様は、娘とご婚礼の式を挙げて、粉ひきの美しい娘は、王様のお妃になりました。――一年経って、お妃は、可愛い子供を産みました。そうしてもう小人のことなんか考えてもいませんでした。すると、そこへひょっこり小人が部屋の中に現われて、「……さあ、約束のものをもらいに来たよ」と言いました。お妃はぎくりとしました。子供を連れて行くことを堪忍してくれるなら、その代わりに、この国じゅう残らずの宝をあげるから、と言って頼みました。でも、小人は、「……いんにゃ、生きているもののほうが世界じゅうの宝残らずもらうよりましじゃよ」と言うのでした。

こう言われて、お妃は、おろん、おろん、泣き出しました。しくん、しくん、しゃくり上げました。それで、小人もさすがに気の毒になりました。「……じゃあ、三日の間待ってあげるよ」と、小人は言いました。「……それまでに、もしわたしの名前が何と言うかそれが分かったら、子供はお前に返してあげるよ」と言うのでした。

六、約束の一日目

そこで、お妃は、ひと晩じゅう考えて、どうかして自分の聞いて知っているだけの名前残らずの中から、あれかこれか考えつこうとしました。それから、別に使いの者を出して、国じゅう歩かせて、一体、この世の中にどのくらいどういう名前があるものか、いくら遠くでもかまわずに延ばせるだけ足を延ばして、尋ねさせました。

その翌る日、小人はやって来ました。お妃は、ここぞと、カスパルだの、メルヒオールだの、バルツェルだの、でまかせな名前から言いはじめて、およそ知っているだけの名前を、かたはしから言ってみました。でも、どの名前も、どの名前も、言われるたんびに、「そんな名じゃないよ」と、小人は首を振りました。

七、約束の二日目

二日目に、お妃は、使いの者に今度は近所をそれからそれと歩かせて、いったい世間ではどんな名前を付けているものか聞かせました。そうして、小人がまた来ると、なるたけ聞きなれない、なるたけ変てこな名前ばかり選んで言いました。「……たぶん、リッペンビーストって言うのじゃない。それとも、ハメルスワーデかな。それとも、シュニールバインかな」と、でも、小人は相変わらず、「そんな名じゃないよ」と言うのでした。

八、使いの者から…

さて、三日目になった時、使いの者は帰って来て、こういう話をしました。「……これと言って、新しい名前は一向に尋ねあたりませんでしたが、ある高い山の下で、そこの森を出はずれたところを、わたくしは通りました。ちょうどそこで、キツネとうさぎが、さようなら、おやすみなさい、を言っておりました。その時、わたくしは、ふとその辺に一軒の小さな家を見つけました。その家の前にたき火がしてありまして、火のまわりに、それはいかにも惚けたおかしな格好の小人が、しかも一本足でぴょんぴょこ、ぴょんぴょこ跳びながら、跳ねまわっておりました。そうして言うことに、今日はパン焼き、明日は酒造り、一夜明ければ、妃の子供だ。はれやれめでたい、誰にも分からぬ、おいらの名前は、ルンペルシュチルツヒェン……」と、こう申しておりました。

九、その名を言うと

さて、使いの者の話の中から、小人の名前を聞き出した時、お妃はまあどんなに喜んだでしょう。みなさん、察して見てください。さて、そういう傍から、もうそこへ例の小人は現われました。そうして、「……さあ、お妃さん、どうだね、おいらの名前は分かったかい」と言うのでした。お妃はわざとまず、「クンツかな」、「違うわい」、「では、ハインツね」、「違うわい」、「……じゃあ、たぶんお前の名前は、ルンペルシュチルツヒェン」と言うと、「……悪魔が話したんだ、悪魔が話したんだ」と、小人は叫びました。そうして、腹立ちまぎれに右足で強か大地を蹴りつけると、体ごと埋まるくらい深い穴があきました。それから、怒り猛って、両手で左足をひっぱる拍子に、自分で自分の体を真っ

二つに引(ひ)き裂(さ)いてしまったのでした。（完）

＊　＊

白
雪
姫

白雪姫

一、白雪姫の生い立ち

昔々、冬の最中のことでした。雪が、鳥の羽のように、ふわりふわりと空から舞い降りていた時に、或る国の女王様は、黒檀の枠のある窓ぎわに腰をおろして、縫い物をしておりました。女王様は、縫い物をしながら、雪をながめておりましたが、チクリと針で指を刺してしまいました。すると、雪の積もった（風景の）中に、ぽたりぽたりと三滴の血が落ちました。真っ白い雪の（風景の）中で、その真っ赤な血の色が大へんきれいに見えたものですから、女王様は、一人でこんなことをお考えになりました。それは、「……どうかして（何とかして）、わたしは、雪のように身体が白く、血のように赤い美しい頬ぺたを持ち、この黒檀の枠のように黒い髪をした子がほしいものだ」と。――それから、少し経ちますと、女王様は、一人のお姫様をお産みになりましたが、そのお姫様は、色が雪のように白く、頬は血のように赤く、髪の毛は黒檀のように黒くつやがありました。それで、名も「白雪姫」とお付けになりました。けれども、女王様は、このお姫様がお生まれになると、すぐにお亡くなりになりました。……

二、新たなお妃を迎える

一年経つと、王様は、新たなお妃（女王様）をお迎えになりました。その女王様は、美しい方でしたが、大へんうぬぼれが強く、わがままな方で、自分よりもほかの人が少しでも美しいと、じっとしてはいられない方でした。ところで、この女王様は、前から一つの不思議な鏡を持っていました。その鏡をごらんになる時は、いつでもこう仰るのでした。「……鏡よ、鏡、壁にかかっている鏡よ。国じゅうで誰がいちばん美しいか、言っておくれ」と。すると、鏡は、いつもこう答えていました。「……女王様、あなたこそ、お国でいちばん美しい」と。それを聞くと、女王様は、ご安心なさるのでした。というのも、この鏡は、嘘を言わないということを、女王様は、よく知っていたからです。

＊　＊

やがて、白雪姫は、大きくなるに連れて、だんだん美しくなりました。お姫様が、ちょうど七つになられた時には、青々と晴れた日のようにうつくしく、女王様よりずっと美しくなりました。ある日、女王様は、鏡の前へ行って、いつものようにお尋ねになりました。「……鏡よ、鏡、壁にかかっている鏡よ。国じゅうで誰がいちばん美しいか、言っておくれ」と。すると、鏡は、答えて言いました。「……女王様、ここではあなたがいちばん美しい。けれども、白雪姫は、それより千倍も美しい」と。女王様は、このことをお聞きになると、肝も潰れんばかりにびっくりして、その妬ましさのあまり、顔色は黄色くなったり、青くなったりしました。そして、それからというものは、女王様は、白雪姫をご覧になる度毎に、憎らしく思うようになりました。そして、その「嫉妬と高慢さ」が女王様の「心の中」でまるで雑草の様に次第次第に一面に蔓延って来て、今では夜も昼ももうじっとしてはいられない程になりました。

三、狩人に白雪姫を殺すように…

そこで、女王様は、一人の狩人を自分のところにお呼びになって、こう言い付けました。それは、「……あの子を森の中に連れて行っておくれ。わたしは、もうあの子を二度と見たくないんだから。そして、お前は、あの子を殺して、その証拠に、あの子の血を、このハンカチに付けて来なければならないのだよ」と、言うのでした。

狩人は、その仰せに従って、白雪姫を森の中へと連れて行きました。狩人が狩りに使う刀を抜いて、何も知らない白雪姫の胸を突き刺そうとすると、白雪姫は泣いて、こう言うのでした。「……ああ、狩人さん、わたしを助けてちょうだい。そのかわり、わたしは森の奥の方に入って行って、もう家には決して帰らないから」と言うのでした。それを聞くと、狩人も、お姫様が余りに美しく、可哀想になってしまい、「……じゃあ、早くお逃げなさい。可哀想なお子さまだ」と言い、「……きっと獣がすぐにも出てきて、食い殺してしまうだろう」と、心の内で思いましたが、お姫様を殺さないですんだので、胸の上から重い石でも取れたように、楽な気持ちになりました。丁度その時、イノシシの子が向こうから飛び出して来ましたので、狩人は、それを殺して、その血をハンカチにつけて、お姫様を殺した証拠に、女王様のところに持って行きました。女王様は、それをご覧になって、すっかり安心して、白雪姫は死んだものと思っていました。

四、森の奥に小人たちの家

さて、可哀想なお姫様は、大きな森の中でたった一人ぼっちになってしまい、恐ろしくてたまらず、いろいろな木々の葉っぱなどを見ても、どうしてよいのか分からないくらいでした。お姫様は、とにかく駆け出して、尖った石の上を跳び越えたり、いばらの中を突き抜けたりして、森の奥の方へと進んで行きました。ところが、獣たちは、そばを駆け過ぎましたが、少しもお姫様を傷つけようとはしませんでした。白雪姫は、足の続く限り走り続けて、とうとう夕方になる頃に、一軒の小さな家を見つけましたので、疲れを休めようと思って、その中に入りました。その家の中にあるものは、何でもみんな小さいものばかりでしたが、何とも言いようがないくらい立派で清らかでした。

その部屋の真ん中には、一つの白い布をかけたテーブルがあり、その上には七つの小さなお皿があって、また、その一つ一つには、さじやナイフそれにフォークなどが付けてあり、なおそのほかに、七つの小さな杯が置いてありました。そしてまた、壁ぎわのところには、七つの小さな寝床が少し間をおいて順々に並んであり、その寝床の上にはみんな雪のように白い麻の敷布が敷いてありました。

白雪姫は、たいへんお腹が空いて、おまけに喉も渇いていましたから、一つ一つのお皿から、少しずつ野菜のスープとパンを食べ、それから一つ一つの杯から、一滴ずつブドウ酒を飲みました。それは、一つところのものをみんな食べてしまうのは、悪いと思ったからでした。それが済んでしまうと、今度は大へん疲れていましたから、寝ようと思って、一つの寝床に入ってみました。けれども、どれもこれもちょうどうまく体に合いませんでした。長過ぎたり、短過ぎたりしましたが、いちばんおしまいに、七番目の寝床がやっと体に合いました。それで、その寝床に寝入って、神様にお祈りをして、そのままグッ

スリと眠ってしまいました。

五、七人の小人たち

さて、日が暮れて、あたりが真っ暗になった時に、この小さな家の主人たちが帰って来ました。その主人たちというのは、七人の小人でした。この小人たちは、毎日、山の中に入り込んで、金や銀の入った石を探して、選り分けたり、掘り出したりするのが仕事でした。小人たちは、自分たちの七つのランプに火を灯しました。すると、家の中がパッと明るくなると、誰かが中にいるということが分かりました。それは、小人たちが家を出かけた時のように、いろいろのものがちゃんと置いてなかったからでした。

第一の小人が、まず口を開いて、「……誰かわしの椅子に腰をかけた者があるぞ」と言うと、第二の小人も、「……誰かわしのお皿のものを少し食べた者があるぞ」と言う。また、第三の小人も、「……誰かわしのパンをちぎった者があるぞ」と言うと、第四の小人も、「……誰かわしの野菜を食べた者があるぞ」と言う。また、第五の小人も、「……誰かわしのフォークを使った者があるぞ」と言い、第六の小人も、「……誰かわしのナイフで切った者があるぞ」と言う。そして、第七の小人も、「……誰かわしの杯で飲んだ者があるぞ」と言うのでした。そして、それから、第一の小人がほうぼうを見まわしますと、自分の寝床が窪んでいるのを見つけて、声を立てました。「……誰がわしの寝床に入り込んだのだ」と叫ぶと、ほかの小人たちも各々の寝床へと駆けつけて見て騒ぎ出しました。そして、「……わしの寝床にも誰かが寝たぞ」と言うのでした。

六、七人の小人との対話

ところが、第七番目の小人は、自分の寝床へと入ってみると、その中に入って眠っている白雪姫を見つけました。今度は、第七番目の小人がみんなを呼ぶと、みんなは何が起こったのかと思って駆け寄って来て、びっくりして声を立てながら、七つのランプを持っては、白雪姫を照らしました。すると、「……おやおや、なんてこの子はきれいなんだろう」と、小人たちは叫びました。それから小人たちは、大喜びで白雪姫を起こさないで、その寝床の中にそのままそっと寝させておきました。そして、七番目の小人は、一時間ずつほかの小人の寝床に寝るようにして、その夜を明かしました。

朝になって、白雪姫は目を覚まして、七人の小人を見て驚きました。けれども、小人たちは、大変親切にしてくれて、「……お前さんの名前は何というのかな」と尋ねました。すると、「……わたしの名前は、白雪姫というのです」と、お姫様は答えました。「……お前さんは、どうしてわたしたちの家に入って来たのかね」と、小人たちが聞くので、そこで白雪姫は、「……実は、継母が自分を殺そうとしたのを、狩人さんがそっと助けてくれたのです。そして、一日中、駆けずり回って、やっとこの家を見つけたのです」と、小人たちに話をしました。その話を聞いて、小人たちは、「……もしもお前さんがわしたちの家の中の仕事をちゃんと引き受けて、煮炊きもすれば、寝床も直し、洗たくも、縫いものも、編みものも、きちんときれいにする気があれば、わしたちは、お前さんを家に置いて上げて、何にも不足のないようにして上げるんだが」と言いました。すると、「……ど

うぞ、お願いします」と、お姫様は頼みました。それからは、白雪姫は小人の家にいることになったのです。

七、その日々の生活は……

さて、白雪姫は、小人の家の仕事をきちんとやりました。小人の方では毎朝、山に入り込んで、金や銀の入った石を探し、夜になると、家に帰って来るのでした。その時までに、ご飯の支度をしておかねばなりませんでした。ですから、昼間は、白雪姫は、たった一人で留守番をしなければなりませんので、親切な小人たちは、こんなことを言いました。「……お前さんの継母には用心なさいよ。お前さんがここに居ることはすぐにも知るに違いない。だから、誰もこの家の中に入れてはいけないよ」と言うのでした。

八、女王様は、物売りに変装して

さて、こんなことは少しも知らない女王様は、狩人が白雪姫を殺してしまったものだと思って、自分がまた第一の美しい女になったと安心していましたが、ある時、鏡の前に行って、そして、言いました。「……鏡よ、鏡、壁にかかっている鏡よ。国じゅうで誰がいちばん美しいか、言っておくれ」と言うと、鏡が答えました。「……女王様、ここではあなたがいちばん美しい。けれども、幾つも山を越した七人の小人たちの家にいる白雪姫は、なお千倍も美しい」と。これを聞いた時の、女王様の驚きようといったらありませんでした。この鏡は、決して間違ったことを言わない、ということを知っていましたので、狩人が自分を騙したということも、白雪姫がまだ生きているということも、みんな分かってしまいました。そこで、どうにかして白雪姫を殺してしまいたいものだと思いまして、また新しくいろいろと考え始めました。女王様は、国じゅうで自分がいちばん美しい女にならないうちは、妬ましくて、どうしても安心していられないからでした。

そこで、女王様は、最後に、何か一つの計略を考え出しました。そして自分の顔を黒く塗って、年寄りの小間物屋のような着物を着て、誰にも女王様とは思えないようになってしまいました。こんなふうをして、七つの山を越えて、七人の小人たちの家に行って、戸をトントンと叩いて言いました。「……よい品物がありますが、お買いになりませんか」と。すると、白雪姫は、何かと思って、窓から首を出して呼びました。「……今日は、おばあさん、何があるの」と聞くと、「……上等な品で、きれいな品を持ってきました。いろいろ変わった締めひもがあります」と言って、いろいろな色の絹糸で編んだひもを、一つ取り出しました。白雪姫は、「……この正直そうなおばあさんなら、家の中に入れてもかまわないだろう」と思いまして、戸を開けて、きれいな締めひもを買い取りました。すると、「……お嬢さんには、よく似合うことでしょう。さあ、わたしがひとつよく結んで上げましょう」と、年寄りの小間物屋は言いました。

白雪姫は、少しも疑う気がありませんから、そのおばあさんの前に立って、新しい買い立てのひもで結ばせました。すると、そのおばあさんは、素早く、その締めひもを白雪姫の首に巻き付けて強く締めましたので、息ができなくなって死んだように倒れてしまいました。「……さあ、これで、わたしがいちばん美しい女になったのだ」と言って、継母は、

急いで出て行ってしまいました。
　それからまもなく、日が暮れて、七人の小人たちが家に帰って来ましたが、かわいがっていた白雪姫が、地べたの上に倒れているのを見た時には、小人たちの驚きようといったらありませんでした。白雪姫は、まるで死人のように息もしなければ、動きもしませんでした。みんなで白雪姫を地べたから高いところに連れて行きました。そして、喉のところが堅く締め付けられているのを見て、小人たちは、締めひもを二つに切ってしまいました。すると、少し息をし始めて、だんだん元気づいて来ました。小人たちは、どんなことがあったのかを聞くと、白雪姫は、今日あったいっさいのことを話しました。すると、小人たちは、「……その小間物売りの女こそ、鬼のような女王様に違いない。よく気をつけなさいよ。わたしたちがそばにいない時には、どんな人だって家に入れないようにするんですよ」と言うのでした。

十一、二度目は、毒の付いた櫛で、

　一方、悪い女王様の方では家に帰って来ると、すぐ鏡の前に行って、尋ねました。「……鏡よ、鏡、壁にかかっている鏡よ。国じゅうで誰がいちばん美しいか、言っておくれ」と言うと、鏡は、正直に前と同じように答えました。「……女王様、ここではあなたがいちばん美しい。けれども、幾つも山を越した七人の小人たちの家にいる白雪姫は、なお千倍も美しい」と。このことを女王様が聞いた時には、体じゅうの血がいっぺんに胸に寄って来たかと思うくらい驚いてしまいました。白雪姫がまた生き返ったということを知ったからです。「……だが、今度こそは、お前をほんとうに殺してしまうようなことを工夫してやるぞ」と、そう言って、自分の知っている魔法を使って、一つの毒を塗った櫛をこしらえました。
　それから、女王様は、身なりを変え、前とは別なおばあさんの姿になって、七つの山を越え、七人の小人たちの家のところに行き、トントンと戸を叩いては、「……よい品物がありますが、お買いになりませんか」と言うと、白雪姫は、中からちょっと顔を出して、「……さあ、あっちに行ってちょうだい。誰もここに入れないことになっているんですから」と言うと、「……でも、見るだけならかまわないでしょう」と、おばあさんはそう言って、毒の付いている櫛を箱から取り出して、手のひらに乗せて高く差し上げて見せました。すると、その櫛が不思議と白雪姫のお気に入りになり、その方に気をとられて、思わず戸を開けてしまいました。そして、櫛を買うことが決まった時に、おばあさんは、「……では、わたしがひとついい具合に髪を梳いて上げましょう」と、言うのでした。
　可哀想な白雪姫は、何の気なしにおばあさんの言う通りにさせました。ところが、櫛の歯が髪の毛の間に入るか入らないうちに、恐ろしい毒が白雪姫の頭に染み込んだものですから、白雪姫は、その場で気を失って倒れてしまいました。「……いくらお前がきれいでも、今度こそおしまいだろう」と、心の曲がった女王様は、気味の悪い笑いを浮かべながら、そこを出て行ってしまいました。
　けれども、丁度いい具合に、すぐ夕方になって、七人の小人たちが帰って来ました。そして、白雪姫がまた死んだようになって、地べたに倒れているのを見て、すぐ継母のしわざと気づきました。それで、ほうぼう白雪姫のからだを調べてみますと、毒の櫛が見つ

かりましたので、それを引き抜きますと、すぐに白雪姫は息を吹き返しました。そして、今日のことをすっかり小人たちに話しました。小人たちは、白雪姫に向かって、もう一度、「……よく用心して、決して誰が来ても戸を開けてはいけないよ」と注意するのでした。

十二、三度目は、毒リンゴで、

さて、心のねじけた女王様は、家に帰って、再び、鏡の前に立って言いました。「……鏡よ、鏡、壁にかかっている鏡よ。国じゅうで誰がいちばん美しいか、言っておくれ」と言うと、鏡は、前と同じように答えました。「……女王様、ここではあなたがいちばん美しい。けれども、幾つも山を越した七人の小人たちの家にいる白雪姫は、なお千倍も美しい」と、言うのでした。女王様は、鏡が、こう言ったのを聞いた時には、あまりの腹立ちから体じゅうをブルブルと震わして悔しがりました。そして、「……白雪姫のやつ、どうしたって殺さないではおくものか。たとえ、わたしの命がなくなっても、そうしてやるのだ」と、大きな声で言いました。それから、すぐに女王様は、まだ誰も入ったことのない離れた秘密の部屋に行って、そこで毒の上に毒を塗った一つのリンゴをこさえました。そのリンゴは、見かけはいかにも美しくて、白いところに赤みを持っていて、一目見ると、誰でもかじり付きたくなるようにしてありました。けれども、その一切れでも食べようものなら、それこそ、たちどころに死んでしまうという恐ろしいリンゴでした。

さて、リンゴがすっかり出来上がりますと、顔を黒く塗って、百姓のおばあさんのふうをして、七つの山を越して、七人の小人たちの家へ行きました。そして、戸をトントンと叩きますと、白雪姫が、窓から頭を出して、「……七人の小人たちがいけないと言いましたから、わたしは誰も中に入れるわけにはいきません」と言いました。すると、「……いいえ、入らなくてもいいんですよ。わたしはね、今、リンゴを捨ててしまおうかと思っているところなので、お前さんにも一つ上げようかと思ってね」と、百姓のおばあさんは言いました。「……いいえ、わたしはどんなものでも人からもらってはいけないのよ」と、白雪姫はことわりました。「……お前さんは、毒でも入っていると思いなさるのかね。まあ、ごらんなさい。この通り、二つに切って、半分はわたしが食べましょう。よく熟れた赤い方をお前さんお上がりなさい」と言いました。

そのリンゴは、大へん上手にこしらえてありまして、赤い方の皮だけに毒が入っていました。白雪姫は、百姓のおばあさんがさも美味しそうに食べているのを見ますと、そのきれいなリンゴが欲しくてたまらなくなりました。それで、つい何の気なしに手を出して、毒の入っている方の半分を受け取ってしまいました。けれども、一かじり口に入れるか入れないうちに、ばったりと倒れ、そのまま息が絶えてしまいました。すると、女王様は、その様子を恐ろしい目付でながめて、さもうれしそうに大きな声で笑いながら、「……雪のように白く、血のように赤く、黒檀のように黒いやつ、今度こそは、小人たちだって、助けることは出来まい」と言いました。そして、大急ぎで家に帰りますと、まず鏡のところにかけつけて尋ねました。「……鏡よ、鏡、壁にかかっている鏡よ。国じゅうで誰がいちばん美しいか、言っておくれ」と言うと、とうとう鏡が答えました。「……女王様、お国でいちばんあなたが美しい」と、言うのでした。

これで、女王様の妬み深い心もやっと鎮めることが出来て、ほんとうに落ち着いた気持

ちになりました。

十三、小人たちが帰って来ると、

夕方になって、小人たちは、家に帰って来ましたが、さあ、大変、今度も、また白雪姫が地べたに転がって倒れているではありませんか。びっくりして、駆け寄って見れば、もう白雪姫の口からは息一つすらしていません。可哀想に死んで、もう冷え切ってしまっているのでした。小人たちは、白雪姫を高いところに運んで行って、何か毒になるものはありはしないかと探してみたり、紐を解いたり、髪の毛を梳いたり、水やお酒でよく洗って見たりしましたが、何の役にも立ちませんでした。みんなで可愛がっていた子供は、こうしてほんとうに死んでしまって、ふたたび生き返りませんでした。

小人たちは、白雪姫のからだを一つの棺の上に乗せました。そして、七人の者が残らずそのまわりにすわって、三日三晩泣き暮らしました。それから、白雪姫を埋めようと思いましたが、なにしろ白雪姫は、まだ生きていたそのままで生き生きと顔色も赤く、かわいらしく、きれいなものですから、小人たちは、「……まあ見ろよ。これを、あのまっ黒い土の中に埋めることなんかできるものか」、そう言って、外から中が見られるガラスの棺をつくり、その中に白雪姫のからだを寝かせ、その上に金文字で白雪姫という名を書き、王様のお姫様であるということも書き添えておきました。それから、みんなで棺を山の上に運び上げ、七人のうちの一人が、いつでもそのそばにいて番をすることになりました。すると、鳥や獣までがそこにやって来て、白雪姫のことを泣き悲しむのでした。いちばん始めに来たのはフクロウで、その次がカラス、いちばんおしまいにハトが来ました。

さて、白雪姫は、長い長い間棺の中に横になっていましたが、そのからだは少しも変わらず、まるで眠っているようにしか見えませんでした。お姫様は、まだ雪のように白く、血のように赤く、黒檀のように黒い髪の毛をしていました。

十四、一人の王子がやって来る

すると、そのうち、ある日のこと、一人の王子が森の中に迷い込んで、七人の小人たちの家に来て、一晩泊まりました。王子は、ふと山の上に来て、ガラスの棺に目をとめました。近寄って覗きますと、実に美しい少女のからだが入っています。しばらくわれを忘れて見惚れていました王子は、棺の上に金文字で書いてある詞を読み、すぐ小人たちに、「……この棺をわたしに譲ってくれませんか。そのかわりわたしは、何でもおなたたちの欲しいと思うものをやるから」と言われました。けれども、小人たちは、「……たとえわたしたちは、世界じゅうのお金をみんないただいても、こればかりは差し上げられません」とお答えしました。「……そうだ、これにかわるお礼なんぞあるもんじゃあない。だがわたしは、白雪姫を見ないではもう生きていられない。お礼なぞしないからただください。わたしの生きている間は、白雪姫を敬い、きっと粗末にはしないから」と、王子は折り入ってお頼みになりました。

王子がこんなにまで仰るので、気立てのよい小人たちは、王子の心持ちを気の毒に思って、その棺を差し上げることにしました。王子は、それを家来たちに命じて、肩に担い

で運ばせました。ところが、まもなく、家来の一人が一本の木につまずきました。で、棺が揺れた拍子に、白雪姫がかみ切った毒のリンゴの一きれが喉から飛び出したものです。すると、まもなく、お姫様は目をパッチリ見開いて、棺のふたを持ち上げて、起き上がって来ました。そして元気づいて、「……おやまあ、わたしは、どこにいるんでしょう」と言いました。それを聞いた王子の喜びはたとえようもありませんでした。「……わたしのそばにいるんですよ」と言って、今まであったことをお話しになって、その後から、「……わたしは、あなたが世界じゅうの何ものよりも可愛いのです。さあ、わたしのお父さんのお城へ一緒に行きましょう。そしてあなたは、わたしのお嫁さんになってください」と言われました。そこで、白雪姫も承知して、王子と一緒にお城に行きました。そして、二人のご婚礼は、出来るだけ立派に盛大に祝われることになりました。

十五、結婚式に招かれた女王様は……

ところで、このお祝いの式には、白雪姫の継母である女王様も招かれることになりました。女王様は、若い花嫁が白雪姫だとは知りませんでした。女王様は美しい着物を着てしまった時に、鏡の前に行って、尋ねました。「……鏡よ、鏡、壁にかかっている鏡よ。国じゅうで誰がいちばん美しいか、言っておくれ」と言うと、鏡は答えて言いました。「……女王様、ここではあなたがいちばん美しい。けれども、若い女王様は、千倍も美しい」と言いました。これを聞いた悪い女王様は、腹を立てまいことか（これは「腹を立てないことがあろうか、いや、大変怒って）、呪いの言葉を次々に浴びせかけました。そして、気になって気になってどうしてよいか分からないくらいでした。女王様は、初めのうちはもうご婚礼の式には行くのをやめようかと思いましたけれども、それでも、自分で出かけて行って、その若い女王様を見ないでは、とても安心できませんでした。女王様は、招かれた御殿に入りました。そして、ふと見れば、若い女王になる人とは白雪姫ではありませんか。女王様は、恐ろしさでそこに立ち竦んだまま動くことが出来なくなりました。

けれども、その時は、もう人々が前から石炭の火の上に鉄で作った上靴を乗せておきましたのが、まっ赤に焼けていましたので、それを火箸で部屋の中に持って来て、悪い女王様の前に置きました。そして、無理やり女王様にそのまっ赤に焼けた靴を履かせて、倒れて死ぬまで踊らせました。（完）

＊　＊

ブレーメンの町楽隊

ブレーメンの町楽隊

一、驢馬は家を逃げ出す

さて、主人持ちの驢馬がありました。もう長年、根気よく重たい袋を背中に乗せて、粉ひき所へ通っていました。ところが、年を取って、さすがに体が言うことを聞かなくなり、だんだん仕事の役に立たないようになりました。そこで、飼い主は、驢馬に餌をやるのをもうここらでよそうかと考え出しました。すると、驢馬の方でもこりゃ碌なことにはならないと感じて逃げ出し、そして、ブレーメンの町をめざしてとことこと歩き出しました。そこへ行けば、町の楽隊に雇ってもらえるだろうと、そう考えたからです。

二、途中、猟犬に出合う

しばらく歩くうちに、往来に一匹の猟犬がだるそうに転がって、口ばかり開けて、はあはあと喘いでいるのに出会いました。それはさんざん野山を駆けまわって、へとへとになっているという様子でした。「……おい、すたこら大将、何をはあはあ言っている」のだと、驢馬は声をかけました。すると、「……いやはや聞いてくれ、こういうわけだ」と、犬は言いました。「……なにしろ年は取る、意気地はなくなる、もうおいらも昔の元気で猟場を駆けまわるわけにはいかない。主人は、それならいっそ叩き殺してしまえということになった。そこであわてて逃げ出したというわけだが、さて、この先どうしてパンにありつくか、じつは考えているところだよ」と言うのでした。――そこで、驢馬は、「……ところで、話だが、おいら、これからブレーメンの町へ出かけて、町の楽隊に雇ってもらおうと思うんだ、どうだ、おめえ一緒に行って、ひとつ音楽でめしを食う気はないか。おいら琵琶を弾くから、おめえ、カンカラ太鼓を叩くがいいよ」と言うと、猟犬は、「……うん、よかろう」と言うので、一緒に出かけました。

三、次に、猫に出合う

それからあまり行かないうちに、猫が一ぴき路ばたに座り込んだまま、それこそ三日も雨が続いたような顔をしていました。「……やあ、どうしたい、床屋の親方、どうやら驢馬の相手どころではないという顔つきだが」と、驢馬が聞くと、「……生きるか死ぬかとか言う時に、そうのんびりした顔もしていられまい。なにしろ年を取って来て、歯はがたがたになる、鼠のやつを追いまわすよりか、炉端で背中を丸めてうずくまり、ごろねんごろねんと咽を鳴らしている方が気楽になったのさ。そこで、主人のおかみさんが、いっそ水にはめておしまいよと言い出した。そうされないうちに飛び出しては来たが、さていい思案はないしさ、いったいどこへどう行ったものかと、考えあぐねているのだよ」と、猫は言うのでした。。そこで、「……おれたちと一緒にブレーメンの町へ行かないか、お前さんは、夜の音楽ならお手のものだろう、町の楽隊に使ってもらえるぜ」と、驢馬は言いました。猫は、さっそく賛成して、一緒に出かけました。

四、次は、雄鶏に出合う

やがて、三人組の脱走者は、とある屋敷内に差しかかりました。すると、門の上にその家の雄鶏が乗っていて、ありったけの声をふり絞って、叫び立てていました。「……おい、骨の芯までジーンと来るような声を出して、どうかしたのかい」と驢馬が聞くと、「……なあに、明日はいいお天気ですよって知らせてやっているところだよ」と、雄鶏は言いました。「……なにしろ、結構なお聖母様の日だ、お小さいキリスト様の下着のお洗濯して、干しなすった日だ。ところが、その明日の日曜日に、お客が来るというんで、ここのおかみさんが、情け知らずにもほどがあらなあ、女中の話だがね、それで、明日はおいらをスープにして食べっちゃうってんでね、今晩、さっそく首をチョン切れと言い付かったとさ。だから、せめて声の出せるうちと思って、おいら咽の破れるほどわめき立てているんだよ」と言うのでした。「……やれやれ、何と言うことだい、赤あたま、おれたちと一緒に行くがいいよ。ブレーメンの町へ出かけるところだ。殺されて死ぬくらいなら、それより気のきいた所はどこへ行ったってあろうじゃないか。おめえはいい声しているから、仲間になって音楽を流して歩け、いっぱし稼げるぞ」と、驢馬は言いました。この申し出は、至極雄鶏も気に入り、そこで、今度は四人連れ立って出かけることになりました。

五、森の中に家の灯りが……

ところで、ブレーメンまでは、なかなか一日では行けません。そのうち日が暮れたので、森の中へ入って、そこで一晩明かすことにしました。――まず、驢馬と犬とは、一本の木の下にごろりと横になりました。猫と雄鶏とは、木の枝の上に休みました。ところで、雄鶏は、わざわざ梢の先まで行って泊まりましたが、これがいちばんの安全な場所であったのです。さて寝ようとする前に、この雄鶏は、もう一度、東西南北、風の吹く方角がどこかと眺めまわした時に、ふと向こうにちらちら火らしいものが見えたので、仲間に声をかけて、どうもそう遠くないところに家があって、灯りがついているらしいと言って知らせました。――そこで、驢馬は、「……じゃあおれたち、ここを引き払って、もっと先まで行ってみようや。どうもこの宿は上等とはいかないから」と言うのでした。犬もそこへ行ったら、骨の一、二本、ことによると肉の香りぐらい嗅げるかと思って、さっそく賛成しました。

六、家の中を覗いて見ると

こういう次第で、四人組は、その灯りが灯る方角に向かって出かけました。すると、灯りは益々はっきりとして来て、ぱあっと照り出したと思うと、そこは泥棒の家で中には煌々と灯りが灯っていました。そこで、驢馬は仲間でいちばん背が高かったので、窓のところまで行って、家の中を覗いてみました。「……親方、何かあったかね」と、雄鶏が尋ねると、「……どうしてあったかどころの騒ぎじゃないぞ」と、驢馬は言いました。「……ちゃんとテーブル拵えが出来ていて、結構な御馳走と飲み物が山と並んでいるよ。泥棒たちも銘々はちきれそうな顔で、楽しくやってるところさ」と言う。すると、「……そいつ

をものにしようじゃないか」と、雄鶏が言うと、「……うん、うん、なんとかして割り込みたいものだなあ」と、驢馬も言うのでした。

七、四人組の動物たちは

そこで、まず、泥棒たちを追っ払うにはどうすればよいかと、四人組の動物たちは、相談を始めましたが、やがていい工夫が見つかりました。それは、まず、驢馬が前足を窓わくの上に乗せるようにする。犬は、その驢馬の背中に飛び乗り、また、猫も犬の背中によじ登って、そして、最後は、雄鶏がばさばさと飛び上がって、猫の頭の上に乗っかりました。いよいよ支度ができ上がると、一、二、三の合図で、四人組は一斉に音楽をやり出しました。驢馬はヒヒンと喚き、犬はワンワン吠え立て、また、猫はニャーオンと鳴き、そして、雄鶏はコケコッコーと刻をつくりました。その途端に、窓を突き破って、その部屋の中へ飛び込むと、がらん、がらん、がらん、と、激しい音を立ててガラスが壊れました。

泥棒たちは、びっくり仰天して、ギャーと叫び声を上げて飛び上がりました。大変な怪物が飛び込んで来たと、そうとしか考えられず、もうすっかり怯えきって、てんでんに頭を抱えて、外の森の中へと逃げ出して行きました。そこで、四人組は、ゆうゆうテーブルにつきました。御馳走は残り物でも我慢することにして、それでも、これからあと四週間ぐらい断食してもいいという勢いで、詰め込めるだけたらふく詰め込んだのでした。

そして、動物四人は、食事を終えると、灯りを消して、めいめい天性に従って寝心地のいい寝場所を探しました。驢馬は、堆肥の上に、犬は、出入り口の戸の後ろに、猫はかまどの湿灰の所にごろりと転がり、それから、雄鶏は、梁の上に停まりました。そして、みんな遠道を歩き続けて草臥れていたので、間もなく、ぐっすり寝てしまいました。

八、逃げた泥棒たちは……

さて、真夜中を過ぎた頃、強盗たちは、家の中にもう灯りがついておらず、ひっそりしている様子を遠くの方から見て、お頭は、「……おれたちがものに怯えて逃げ出したとあっては一分がたたねえ」と言って、手下を一人、家の様子を探りにやりました。

使いに出された男は、来てみると、物音一つしないので、灯りをつけに台所へ入りました。暗闇の中、火の燃えてるような猫の目玉を残り火の炭と間違えて、火を呼ぶつもりで、目玉へマッチを付けようとしたものです、けれども、猫は、もとより融通が利きません。いきなり強盗の顔へ飛び付くなり、ふあーっと言って引っ掻きました。強盗はびっくり仰天して、一目散に逃げ出して、裏口から外へ飛び出そうとすると、そこに寝転んでいた犬が飛び起きて、向こう脛へ確と噛み付きました。それから、庭を通って堆肥のそばを駆け抜ける時に、驢馬がいやというほど後脚で蹴飛ばしました。そこへもってきて、さっきからの騒ぎで寝ていたところを起こされ、すっかり眠気の取れていた雄鶏が、梁の上から、「……キッケリキー」と、怒鳴りました。強盗はもう慌てふためいてお頭のところへ駆け戻っては、「……いやもう、あの家の中にはもの凄い妖婆が頑としており、そやつが私にふあーっと息を吹きかけ、ひょろ長い指で私の顔を引っ掻きました。また、戸の前には短刀を持った男が立っていて、私の脚を突き刺したのです。また、庭には何やら得体

の知れない真っ黒な怪物が寝転んでいて、棍棒を振り回して私に打ってかかりました。それからまた、上には、屋根の上に裁判をいたす奴がおりまして、そやつめ、その悪党をおれのところへ引っ張ってこい、と怒鳴っていました。かような次第で、ほうほうの態で逃げて来たわけです」と告げるのでした。

それからというもの、強盗たちは、重ねてその家へ入る勇気がなくなり、また、ブレーメンの楽隊四人組は、この家がすっかり気に入って、二度と再び、外へ出るようなことはしませんでした。……（完）

＊　＊

ペロー童話集

一、灰だらけ姫（サンドリヨン）

二、眠れる森の美女

三、長靴（ぐつ）をはいた猫（ねこ）

灰だらけ姫

（ペロー童話集）

灰だらけ姫

一、シンデレラの生活ぶり

昔々、あるところに、なに不自由なく暮らしている紳士がありました。ところが、その二度目にもらった奥さんというのは、それはそれは、二人とない高慢でわがままな威張り屋でした。前のご主人との間に二人も子供があって、連れ子をしてお嫁に来たのですが、その娘たちというのが、やはり何から何までお母さんにそっくりないけないわがまま娘でした。――さて、この紳士には、前の奥さんから生まれた、もう一人の若い娘がありましたが、それは気立ても心がけもとてもいい人だった亡くなった母親にそっくりで、この上ない素直なやさしい子でした。……

さて、結婚の儀式が済むと間もなく、今度のお母さんは、さっそくいじわるの本性をさらけ出しました。このお母さんにとっては、腹違いの娘が心がけがよくて、そのため、余計に自分の生んだ子供たちのあらの見えるのが何よりも我慢できないことでした。そこで、この娘を台所にさげて、女中のする仕事に追いやりました。お皿を洗ったり、お膳拵えをしたり、奥様のお部屋の掃除から、お嬢様たちのお居間の掃除までさせられました。その上、この娘は、家のてっぺんの屋根裏の蜘蛛の巣だらけな隅で、わらの寝床に犬のように丸くなって眠らなければなりませんでした。そのくせ、二人の姉たちは、美しいモザイクで床を敷きつめた、温かい、きれいなお部屋の中で、りっぱな飾りの付いた寝台に眠って、そこには頭から足のつま先まで鏡にうつる大きな姿見もありました。

かわいそうな娘は、何もかもじっと堪えていました。父親は、すっかり母親にまるめ込まれていて、一緒になって小言を言うばかりでしたから、この娘は、何も父親には話しませんでした。それで、言いつかった仕事を済ませると、いつもかまどの前にかがんで、消炭や灰の中にうずくまっていましたから、二人の姉たちは、からかい半分に「サンドリヨン」（シンデレラ）というあだ名をつけました。これは灰のかたまりとか、消炭とかいうことで、つまり、それは、「灰だらけ娘」とでもいうことになりましょう。

それにしても、シンデレラは、どんなに汚い身なりはしていても、美しく着飾った二人の姉たちに比べては、百倍もきれいでしたし、まして心の美しさは、比べものになりませんでした。

二、お城での舞踏会の開催

さて、ある時、その国の王様の王子が盛大な舞踏会を催して、大勢身分のいい人たちをダンスにお招きになったことがありました。シンデレラの二人の姉たちも、幅の利くお父さんの娘たちでしたから、やはり、舞踏会にお招きを受けていました。

二人は、お招きを受けてから、それはおかしい位にのぼせ上がって、上着よ、外套よ、何々よと、毎日えり好みに浮き身をやつしておりました。おかげで、シンデレラには、新しいやっかい仕事が一つ増えてしまいました。なぜと言うに、二人の妹たちの着物に火のしをかけたり、袖口に飾り縫いしたりするのは、みんなシンデレラの仕事だったからです。二人の姉は、朝から晩までおめかしの話ばかりしていました。「……わたしは、イギリス飾

りの付いた赤いビロードの着物にしようと思うのよ」と、姉が言うと、「……じゃあ、わたしは、いつものスカートにしておくわ。けれど、そのかわり、金の花模様のマントを着て、それにダイヤモンドの帯をするのよ。あれは世間にめったにない品物なんだもの」と言うのでした。

二人は、その時分、上手で評判の美容師を呼んで、頭の飾りから足の靴先まで、一分の隙もなくすっかり流行の支度を整えさせました。シンデレラも、やはりそういうことの相談にいちいち使われていました。なにしろ、この娘は、ものの善し悪しのよく分かる子でしたから、二人のために一生懸命に工夫してやって、おまけにお化粧まで手伝ってやりました。シンデレラに髪を上げてもらいながら、二人は、「……シンデレラ、お前さんも、舞踏会に行きたいとは思わないかい」と聞くので、シンデレラは、「……まあ、お姉様たちは、わたしをからかっていらっしゃるのね。私のようなものがどうして行かれるものですか」と答えると、「……そうだとも、灰だらけ娘のくせに、舞踏会なんぞに出かけて行ったら、みんなからさぞ笑われるだろうよ」と、二人は言うのでした。

こんなことを言われて、これがシンデレラでなかったら、二人の髪をひん曲げてやりたいと思うところでしょうが、この娘は、それは人のいい子でしたから、あくまで頼まれた通り、立派にお化粧を仕上げてやりました。二人の姉たちは、もう、むやみとうれしくて、二日の間、ろくろく物も食べないくらいでした。その上、でぶでぶした体をほっそりしなやかに見せようと思って、一ダースもレースを体に巻き付けました。そうして、暇さえあれば、姿見の前に立っていました。

やがて、待ちに待った楽しい日になりました。二人は庭におりて、出かける支度をしていましたが、シンデレラは、そのあとから、じっと見送れるだけ見送っていました。いよいよ姿が見えなくなってしまうと、いきなりそこに泣き伏してしまいました。

三、妖女の出現

その時、ふと、シンデレラの洗礼式に立ち合った、名づけ親の教母が出て来て、娘が泣き伏しているのを見ると、どうしたのだと言って、尋ねました。「……わたし、行きたいのです。――行きたいのです……」と、こう言いかけて、あとは涙で声がつまって、口が聞けなくなりました。

このシンデレラの教母というのは、やはり妖女でした。それで、「……あなたは、舞踏会に行きたいのでしょう。そうじゃないの」と聞きました。すると、「……ええ」と、シンデレラは、叫んで、大きなため息を一つしました。「……よしよし、いい子だからね、あなたも行かれるように、わたしがして上げるから」と、妖女は言いました。そうして、シンデレラの手を引いて、その部屋へ連れて行きました。「……裏の畠へ行って、かぼちゃを一つもぎ取っておいで」と言うと、シンデレラは、さっそく行って、なかでも一番いいかぼちゃを選んで、妖女のところへ持って帰りました。けれども、このかぼちゃでどうして舞踏会へ行けるのか、さっぱり考えがつきませんでした。

かぼちゃを受け取ると、妖女は、その芯を残らずくり抜いて、皮だけ残しました。それから妖女は、手に持った杖で、こつ、こつ、こつと、三度叩くと、かぼちゃは、見る見るうちに金塗りの立派な馬車に変わりました。

妖女は、それから台所のねずみ落しを覗きに行きました。すると、そこに二十日ねずみが六ぴき、まだぴんぴん生きていました。妖女は、シンデレラに言いつけて、ねずみ落としの戸を少し上げさせると、ねずみたちがうれしがってちょろちょろかけ出すところを杖でさわりますと、ねずみはすぐと立派な馬に変わって、ねずみ色の馬車馬が六頭そこにできました。けれども、まだ御者がありませんでした。「……わたし行って、見て来ましょう。大ねずみがまだ一匹かかっているかもしれませんから。それを御者にしてやりましょう」と言うと、「……それがいいわ。行ってごらん」と、妖女は言いました。

シンデレラは行って、ねずみ落しを持って来ましたが、その中に三びき大ねずみがいました。妖女は三匹のうちで、いちばんひげの立派な大ねずみを選り出して、杖でさわって、太った元気のいい御者に変えました。それはめったに見られないぴんとした立派な口ひげを生やしていました。それがすむと、妖女は、シンデレラに向かって、「……もう一度、裏のお庭へ行って、如露の後ろに隠れているトカゲを六匹、見つけていらっしゃい」と言いました。シンデレラは、言い付けられた通り、トカゲを取って帰りますと、妖女は、すぐそれを六人の馬丁に変えてしまいました。それは、金や銀の縫箔のあるぴかぴかの制服を着て、馬車のうしろの台に乗りました。そうして、そこに、ぺったりへばりついたなり、押し合いをしていました。その時、妖女は、シンデレラに言いました。「……ほら、これでダンスに行くお供揃いができたでしょう。どう、気に入って」と聞くので、「……ええ、ええ、気に入りましたとも」と、シンデレラは、嬉しそうに叫びました。「……けれどわたし、こんな汚いぼろを着て行かなければならないでしょうか」と聞くのでした。

妖女はそこで、ほんのわずか杖の先でシンデレラの体にさわったと思うと、見る見るうちに、継ぎはぎだらけの着物は、宝石を鏤めた金と銀の着物に変わってしまいました。それがすむと、妖女はシンデレラに、それはそれは美しいリスの皮の上ぐつ（ガラスの上ぐつだとも言います）を、一足くれました。

こうして、残らず支度が出来上がって、いよいよシンデレラが馬車に乗ろうとした時、妖女は、あらためてシンデレラに向かって、何は措いても、夜中十二時過ぎまで舞踏会にいてはならないと、厳しく言い渡しました。十二時から一分でも遅れると、馬車はまたかぼちゃになるし、馬は小ねずみになるし、御者は大ねずみになるし、馬丁はトカゲになるし、着ている着物も、元の通りのぼろになるのだから、と言って聞かせました。

シンデレラは、妖女に決して夜中過ぎまで舞踏会には居ません、という堅い約束をしました。そうして、もうはち切れそうなうれしさを押さえることができないようなふうで、馬車に乗りました。

四、舞踏会、一日目

さて、王子は、その晩、誰も知らない、どこぞの立派な王女が、いましがた馬車に乗って、舞踏会に着いたという知らせを聞いて、わざわざ迎えに出て来ました。王子は、王女が馬車から降りると、その手をとって広間の、みんな大勢いる中へ案内して来ました。すると、広間の中はたちまちしんと静まり返って、みんなダンスをやめました。バイオリンの音もしなくなりました。それは、このめずらしいお客さまの美しさに、誰も彼も気をとられて、ぼんやりしてしまったからでした。その中で、ただ微かにこそこそささやく声が

して、「……ほう、きれいだなあ。ほう、きれいだなあ」とばかり言っていました。
王様も、もうお年は取っておいででしたけれど、その時は、思わずシンデレラの顔をじっと眺めずにはいられませんでした。そうして、そっとお妃の耳もとに囁いて、「……こんなきれいな、可愛らしい娘を見るのは、久しぶりだ」と言っておいでになりました。貴婦人たちは、貴婦人たちで、みんなじろじろとシンデレラの着物から頭の飾り物を調べてみて、まあ、まあ、あれだけのりっぱな材料と、それをこしらえるりっぱな職人とさえあれば、明日にもさっそくこの型で自分もこしらえさせてみようと考えていました。
王子は、シンデレラをその中でいちばん名誉の上席へ案内して、それからまた、連れ出して、一緒にダンスを始めました。シンデレラは、それはそれは、しとやかに踊ったので、みんなは、いよいよびっくりしてしまいました。さて、結構な御馳走がまもなく出ましたが、若い王子は、シンデレラの顔ばかりながめていて、一つも喉には通りませんでした。――シンデレラは、やがて、自分の姉たちのいるところへ出かけて行って、そのそばに腰をかけて、王子からもらったオレンジやレモンを分けてやったりして、それは、いろいろやさしい素振りを見せました。けれど、二人は、それが誰だか分からなかったものですから、ただもうびっくりして、目ばかりくるくるさせていました。シンデレラは、こうして姉たちの御機嫌を取っているうちに、時計が十二時十五分前を打ちました。するといきなり、シンデレラは、ほかのお客たちに丁寧に挨拶をして、ふいと出て行ってしまいました。

五、家へと帰ると……

さて、家へと帰ると、シンデレラは、そこに待っていた妖女に会って、たくさんお礼を言ったのち、明日もまた、ぜひ舞踏会へやってくださいと言って頼みました。それは、王子の熱心なお望みでもあったからです。
こうして、シンデレラが舞踏会であったことを妖女にせっせと話をしていると、やがて、二人の姉たちが帰って来て、こつ、こつ、戸を叩きました。シンデレラは、駆けて行って、戸を開けてやりました。「……まあ、ずいぶん長く行っていらしったのね」と、シンデレラは叫んで、あくびをして、目をこすって、伸びをしました。それは、うたたねをしていて、たった今、目が覚めたというような風でした。けれど、実は二人が出て行ってから、シンデレラは、まるっきり寝たくも寝られない気持ちだったのです。「……お前さん、ダンスに行ったら、それは退屈なんぞしなかったろうよ。なにしろ、あそこへは、まあ、世の中にこんなきれいな人があるかと思うほど美しいお姫様が来なすったのだよ。その方が、わたしたちにいろいろとやさしいことをおっしゃって、ごらん、こんなにレモンだの、オレンジだのを下さったのだよ」と、姉たちの一人が言いました。
シンデレラは、そんなことには一向無頓着な様子でした。もっとも、姉たちにそのお姫様の名を尋ねましたが、二人は、それは知らないと言いました。そうして、王子様がそのことでたいそう夢中におなりになって、その名をとても知りたがって、みんなに尋ねておいでだったという話をしました。そう聞くと、シンデレラは、にっこりして、「……まあ、その方、どんなにかお美しかったのでしょうね。お姉さまたち、いらっしってほんとうによかったのね。わたし、その方見られないかしら。ねえ、ジャボット姉さま、あなたの

毎日着ていらっしゃる黄色い着物を、わたしに貸してくださらないこと」と言いました。すると、「……まあ、あきれた」と、ジャボットは叫びました。「……わたしの着物を、お前さんのような汚らしい灰のかたまりなんかに貸してやられるもんか、人を馬鹿にしているよ」と言うのでした。――シンデレラは、いずれそんな返事だろうと思っていましたから、その通りに断られたのを、かえってありがたく思っていました。なぜと言って、ふと冗談に言ったことを、姉たちが真に受けて着物を貸してくれたら、それこれどんなに戸惑うことになったでしょう。

六、舞踏会、二日目

さて、その翌る日も、二人の姉たちは、舞踏会へ出かけて行きました。シンデレラもやはり、今度は、もっと立派に着飾って出かけて行きました。王子は、始終シンデレラのそばに付きっ切りで、ありったけのお世辞ややさしい言葉をかけていました。それがシンデレラには、うるさいどころかうっとりとすることでしたから、ついうかうか妖女に戒められていたことも忘れてしまい、それですから、まだまだ時計は十一時だと思っていたのに、十二も打ったのでびっくりして、ついと立ち上がって、牝鹿のようにすばしっこくかけ出しました。王子もすぐに後を追いかけましたが、とうとう追いつけませんでした。けれど、シンデレラも慌てていたので、金の上ぐつを片足落したまま逃げて、王子は、それを大事に拾っておいたのです。シンデレラは、家へと何とか帰りは帰りましたが、すっかり息を切らしていました。それは、もう馬車も、御者も馬丁もなく、いつもの古着のぼろにくるまったなりで、ただ片足だけ履いて帰った金の上ぐつを持っていたのです。

さて、シンデレラが出て行ったあとで、王様のお城の番小屋へ、お尋ねがありました。「……お姫様が、一人、門を出て行くところを見なかったか」と。ところが、番兵の返事は、「……はい、見たのはただ一人、ひどくみすぼらしいなりをした若い娘でした。それは貴婦人どころか、ただの田舎娘としか思われない風をしていました」と言うのでした。

さて、二人の姉たちが舞踏会から帰って来ると、シンデレラは、こう言って聞きました。「……たんと面白いことがありましたか。きれいなお姫様は、きょうも来ましたか」と聞くと、二人が言うには、「……ああ、けれども、その人ったら、十二時を打つと同時に、あわてて逃げ出したわ。あんまり慌てたものだから、金の上ぐつを片足落して行ったのよ。その上ぐつの可愛らしいことといったらないものだから、王子様は、それを大事にお拾いになったのよ。王子様は舞踏会でも、始終お姫様のほうばかり見ていらしった。きっと、王子様は、金の上ぐつを履いていたきれいな人を好いていらっしゃるに違いないよ」と言うのでした。

七、靴の持ち主を探し求めて

なるほど、二人の言った通りに違いはありませんでした。それから二、三日すると、王子はラッパを吹いておふれをまわして、その金の上ぐつのしっくり足にはまる娘を探し出しては、その人をお妃にすると告げたのでした。そうして、王子は、家来たちにその金の上ぐつを持たせて、王女たちをはじめ、貴族のお姫様たち、それから御殿中残らずの

女の人の足を試させてみましたが、みんなだめでした。
さて、とうとうまわりまわって金の上ぐつは、いじの悪い二人の姉たちのところにまわって来ましたから、二人とも赤くなって、むりに足をつっこもうとしましたが、どうしてどうして、それはみんな見るも気の毒なほどの無駄な骨折りでした。
シンデレラは、その時、それをわきで見ていますと、それは、何と自分の半分落してきた上ぐつでしたから、つい笑い出してしまって、「……貸してくださらない。わたしの足にだって合うかも知れないから」と言いました。すると、二人の姉たちは、ぷっと吹き出して、シンデレラをからかったり、あざけったり、いじ悪く追い出そうとかかりました。けれど、金の上ぐつを持ったお役人は、じっとシンデレラの顔を見て、これはめずらしく美しい娘だと思いましたから、たとえ誰でも試すだけは試してみなければならない、それが王子のお言いつけだと言いました。
そこで、シンデレラに腰をかけさせて、上ぐつをその足に履かせますと、それはするりと具合よく入って、まるで蠟で固めたようにぴったりくっ付いてしまいました。二人の姉たちは、その時、どんなにびっくりしたでしょう。どうして、それどころか、シンデレラは、かくしの中からもう片方の上ぐつを出して見せました。ちょうど、その時、シンデレラの教母の妖女がすぐ現われて、杖でシンデレラの着物にさわりますと、今度は、前よりもまたいっそう美しい立派な着物に変わりました。
それで、二人の姉たちは、あの舞踏会で見た美しいお姫様がシンデレラであったことが分かりました。二人は、シンデレラの足元につっぷして、これまでひどい目に合わせた罪を侘びました。シンデレラは、二人の手を取って起こして、やさしく抱きしめました。そして、これまで二人のしたことは何とも思わない。そのかわり、これからはやさしくしてくれるようにと言いました。
シンデレラは、立派な着物を着たまま王子の前へ連れて行かれました。王子は、それで、いよいよシンデレラが好きになって、それから四、五日して、めでたくご婚礼の式を挙げました。――シンデレラは、顔が美しいように心のやさしい娘でしたから、二人の姉たちもお城へ引き取ってやって、ご婚礼のその日に、やはり、二人の貴族にめあわせることにしました。
さて、顔と姿の美しいことは、男にも女にも貴い宝です。でも、やさしくしおらしい心こそ、妖女のこの上ない贈り物だということを知らなくてはなりません。（完）

＊　＊

眠れる森の美女

（ペロー童話集）

眠れる森の美女

一、お姫様の誕生で…

昔々、王様とお妃様がおられました。お二人は、子供のないことを何より悲しがっておりました。それは、どんなに悲しがっていたことでしょう、とても口では言い尽くせないほどでした。そのために、世界中の海という海を渡って、神様に願をかけたり、お寺に巡礼をするなど、いろいろと信心を献げてみましたが、みんなそれはむだでした。

でも、そのうちにとうとう信心の誠がとどいて、お妃様に女の子の赤ちゃんが生まれました。それでさっそく盛大な洗礼の式を挙げることになって、お姫様の名づけ親になる教母には、国じゅうの妖女たちが残らず呼び出されました。その数は、みんなで七人でした。その時分の妖女仲間の習わしに従い、七人の妖女は、めいめい一つずつ立派な贈りものを持って来るはずでした。ですから、生まれた時から、お姫様には、もうこの世で望める限りのことで何一つ身に備わらないものはなかったのでございます。

さて、洗礼式が無事に済んだ後、呼ばれた七人の仲間一同が王様のお城へと帰りますと、そこには、妖女たちのために立派な御馳走の仕度ができていました。一人一人の食卓の上には、お皿や杯の食器が一揃い並べてあって、それは、大きな「金の箱」に入っている匙やナイフやフォークなどで、そのすべてがダイヤモンドやルビーなどを鏤めた純金製のものでした。――ところで、みんな並んで食卓についた時、ふと見ると、いつどこからやって来たか、大へん年を取った妖女が一人、のそのそと広間に入って来ました。けれども、この妖女は、この席に呼ばれてはいなかったのです。――というわけは、このおばあさんの妖女は、今から五十年も前、ある塔の中に籠ったきり姿を隠してしまって、もう今では死んでしまっているか、魔法にでもかけられて何か変わったものにされてしまったと思われていたからです。

王様はあわてて、この妖女の前にも一揃い食器を並べさせました。でも、それはもう大きな「金の箱」に入った純金製のものではありませんでした。なにしろお客は七人のはずでしたから、七人前の仕度しかできてはいなかったのです。するとおばあさんの妖女は、自分だけが軽蔑されたように思って、口の中で何かぶつぶつ口小言を言っていました。

その時、ほかの若い妖女の一人がそばに隣り合わせていて、おばあさんのくどくど言う言葉をそっと聞いていました。それで、このおばあさんが王女に何かよくない贈りものをしようと企んでいることが分かりましたから、食事が済んでみんなが食卓から立ち上がると、そのままその妖女は、帳（垂れぎぬ）の陰に隠れていました。それは、こうして隠れていて、そのおばあさんがたとえ何を企てようとも、自分がそのあとに出て、すぐその「呪いの言葉」をうち消すようなことを言って、それをお姫様への贈りものにしようと思ったからです。

二、妖女たちの贈りものの言葉

そうこうするうちに、いよいよ妖女たちは、それぞれお姫様に贈りものの言葉を述べることになりました。その中で、一番若い妖女は、お姫様が世界一美しい人になられますよ

うに、と言いました。その次の妖女は、天使のようなお心が授かりますように、と言いました。三番目の妖女は、王女の立ちい振る舞いのやさしく、しとやかにありますように、と言いました。また、四番目の妖女は、誰及ぶもののないダンスの上手になられますように、と言いました。そして、五番目の妖女は、小夜啼鳥のようなやさしい声でお歌いになりますように、と言いました。さらに、六番目の妖女は、どんな楽器にも名人の名をお取りになりますように、と言いました。そして、いよいよお終いに、おばあさんの妖女の番になりました。この妖女は、さも忌々しそうに首を振りながら、「……王女は、その手を糸車の紡錘に刺されて怪我をして死ぬだろうよ」と言いました。

この恐ろしい贈りものは、身震いの出るほどみんなをびっくりさせて、誰もお姫様のために泣かないものはありませんでした。その時です、若い妖女が帳（垂れぎぬ）の陰から出て来て、とても大きな声で次のような言葉を言いました。「……いいえ、王様、お妃様、だいじょうぶです、あなた方の大事なお姫様は、命をお亡くしになるようなことはありません。もっとも、わたくしにはこの年寄りのいったんかけた呪いを、残らず解きほごすまでの力はございません。お姫様は、なるほど手の平に紡錘をお突き立てになるでしょう。けれども、そのためにお亡くなりになるということはありません。ただ、ぐっすりと寝込んでしまいになって、それは百年の間、目をお覚ましになることがないでしょう。そして、ちょうど百年目に、ある国の王子様が来られて、お姫様の目をお覚まし申すことになるでしょう」と告げるのでした。

三、お姫様は、糸車の紡錘に触れて

王様は、妖女のおばあさんの預言した災難を、どうかして除けたいと思いました。そこで、その日さっそく、国じゅうにおふれを回して、誰でも糸車に紡錘を使うことはならぬ。家のうちに一本の紡錘をしまい置くことすらしてはならぬ。それに背いたものは死刑にすると、厳しくお言い渡しになりました。

さて、それから十五年は、無事に過ぎました。ある時、王様とお妃様がお揃いで離宮へ遊びにお出かけになりました。そのお留守中に、ある日、若い王女は、お城の中をあちこちとかけ歩いておりました。そのうち、下の部屋から上の部屋へと、かけ上がって行って、とうとう塔のてっぺんの小さな部屋に入りました。見ると、そこには、人のよさそうなおばあさんが一人ぽつんと据わっていて、紡錘で糸を紡いでいました。このおばあさんは、紡錘を使ってはならないという厳しい王様のおふれをつい聞かなかったものと見えます。「……おばあさん、そこで何をしているの」と、お姫様は尋ねました。すると、「……ああ、可愛いお嬢様、わたしゃ、糸を紡いでいるのだよ」と、おばあさんは言いました。

このおばあさんは、王女が誰だか少しも知らないようでした。「……まあ」と、王女は言い、「……何てきれいなんでしょう。それはどういうふうにやるものなの。あたしにかしてごらんなさいな。あたしにもできるかどうか、やってみたいから」と、お姫様は、こう言って、その紡錘を手に取りましたが、それは持ち方がいけなかったのか、大変あわてて不器用な持ち方をしたのか、それとも、あの悪い妖女の「呪いの言葉」が、いよいよそのしるしを顕す時になったのか、その紡錘に触れた途端、紡錘はいきなり王女の手に刺さって、王女はばったりとそこに倒れてしまいました。

人のいいおばあさんは、あわてて人を呼びました。みんなお城のそこからもここからも駆けつけて来ては、お姫様の顔に水を注ぎかけたり、紐を解いて着物をゆるめたり、また、手の平を叩いてみたり、あるいは、ハンガリア女王の水という薬で、こめかみを揉んだり、いろいろなことをしてみても、王女はどうしても息を吹き返しませんでした。

さて、王様は、この騒ぎを聞いて、さっそく駆けつけておいでになりました。そうして十五年昔の妖女の預言を思い出しながら、やはりこうなる運命だったことを悟って、お姫様を、そのままお城の中でも一番上等の部屋に連れて行かせ、金と銀の縫い取りをしたきれいな寝台の上に寝かしました。――その寝台の上に、すやすや眠っておいでになるお姫様の美しさと言ったらありませんでした。それは小さな天使だと言っても言いくらいでした。人心地がなくなっていても、生きている通りの顔色をしていて、頬は、石竹色（ピンク色）をしていましたし、唇は、珊瑚を並べたようでした。目こそつぶってはいますものの、微かに息をする音は聞こえます。それで王女が死んでいないということが分かったので、周りに付いている人たちは喜んでいました。王様は、そこでやがて人が来て目を覚まさせるまで、閑かに寝かして置くようにと、厳しくお言いつけになりました。

四、姫を救った妖女が再び現れる

さて、王女を百年の間眠らせることにして、やっと危うい命を取り留めた、あの心のよい妖女は、ちょうどこの騒ぎの起こった時には、一万二千里離れたマタカン国に行っていました。が、その使っている小人から、この「知らせ」をすぐに受け取りました。その小人は、『七里跳びの長靴』と言って、それは、一跨ぎに「七里ずつ」歩く長靴を履いて、急ぎ駆けつけて来たのです。それで、妖女は、さっそくそのマタカン国を出て、竜に引かせた火の車に乗ると、ちょうど一時間で王様のお城へと着きました。

王様は、お手ずから（自らの手で）妖女を馬車から助け下ろしました。妖女は、王様のなさったことをすべて「結構です」と言いました。でも、たいへん先のことまでよく見える妖女でしたから、百年の後に、お姫様がせっかく目を覚ましても、この古いお城の中にたった一人ぽつねんとしているのでは、どうしていいか分からなくて、さぞお困りになるだろうと思いました。――そこで、何をしたでしょうか。妖女は、魔法の杖を振るって、王様とお妃様を除いては、お城の中にあるものすべて残らず、それはお付の女教師から、女官から、お側付の女中から、宮内官、表役人、コック長、料理番から、炊事係、台所ボーイ、番兵、お雇いスイス兵、走り使いの小者まで残らず、杖でさわりました。それから、同じようにして、馬小屋で寝ている馬たちも、また、裏庭に遊んでいるむく犬（毛のふさふさした犬）たちも、さらに、お姫様の寝台の上で眠っているお手飼いの狆（小型犬）までも、みんな魔法の杖でさわりました。

魔法の杖でさわると、すぐに誰も彼も何もかもたわいもなく眠りこけてしまい、お姫様が目を覚ますまでは、決して目を覚ましませんし、お姫様に用事ができれば、いつでも目を覚まして、御用をつとめるはずでした。何もかも眠ってしまったと言って、それはかまどの前の焼き口までが、雉子や山鳥の肉を串に刺したままやはり眠ってしまいました。これだけのことがみんなほんの目ばたき一つする間に出来上がってしまいました。妖女というものは、まったく仕事の早いものですね。

さて、そこで王様とお妃様は、お姫様の額にそっとやさしく頬ずりして、お城から出て行きました。そうしておいて、誰もお城に近づくことはならないという厳しいおふれをまた国じゅうに廻しました。――でも、そのおふれは、わざわざ出すまでもありませんでした。なぜと言うに、十五分と経たないうちに、お城を取りまわしている園の中に、たくさんの高い木や低い木がこんもりと繁り出して、その間には、草やぶやいばら（棘のある草木）がびっしり鉄条網のように絡み付いてしまいましたから、人間も獣も、それをくぐって出入りすることは出来なかったからです。――そういうわけで、しばらくすると、外から見えるものは、お城の塔のてっぺんだけになりました。それもよほど遠くに離れてでなければ見えないのです。これも妖女の見事な離れ技だったことが分かりました。こうして、王女は眠っている間、誰一人おもしろ半分に覗きに来ることも出来ないようになったのでございます。

五、それから百年後、

さて、百年は夢のように過ぎました。その時分、その国を治めていた新しい王様の王子が、ある日、眠れる森の近くを通りかかりました。この王子は、眠っている王女の一族がとうに死に絶えて、そのあとに代って来た別の王家の王子で、その日はちょうど、その辺に狩りに出かけて来た帰り道なのです。それで、遠くからお城の塔を見つけると、あの森の中にある塔は何だと言って、おそばの者に聞きました。――みんなは、てんでんに自分の聞いている通りを答えました。中の一人は、あれは、幽霊が出るという評判の古い荒城だと言いました。すると、また一人が、あれはこの国の魔法使いや悪い巫女たちが夜会をする場所だと言いました。――その中で、割合、大勢の者の言うところでは、あれは昔から人喰い鬼の住んでいるお城で、小さな子供を捕まえては、みんなあそこへさらって行って、それで誰もあとからついて来られないように、あの通り、自分だけ通って行ける森をこしらえて、その中でゆっくり食べるのだということでした。

王子は、このうちのどれを信じていいか分からないので迷っていると、その時、一人、この土地に古くからいる年寄りのお百姓が、こう言いました。「……王子様、失礼ではございますが、わたくしが五十年も前、父から聞きました話では、――その父はまた、もとは、爺さんから聞いたのだと申しますが、――このお城の中には、それはそれは美しい王女のお姫様が住んでおりまして、もう百年の間、ずっと眠り続けた後、ちょうど百年目に、ある王様の王子が来て、目を覚まして下さるのを待っているのだと言うことでございます」と言うのでした。若い王子は、この話を聞くと、かっと熱い血が燃え上がるように思いました。ぜひともこの珍しい出来事のおさまりを、自分でつけてしまわなければと思い立ちました。美しいお姫様を授かる上に、誰も入れない魔法のお城を切り開く名誉が、自分のものになると思うと、もう後ろから体を強く押されるような気がして、さっそく、その仕事に取りかかろうと決心しました。

そこで、王子は、森に向かってずんずん進んで行きますと、大きな木も低い木も、草やぶやいばら（棘のある草木）なども、みんな道をよけて通しました。その広い道をどこまでも行きますと、やがて、その奥にあるお城に着きました。――ところで、少しびっくりしたことには、ふと振り返ってみると、家来は、一人もついて来る者がないのです。なぜ

と言うに、王子が入ると一緒に、すぐ森の口が閉まってしまったからです。けれども、王子は構わずに、ずんずん進んでいきました。若いやさしい、そして火のように熱い心を持った王子は、いつも勇気のあるものです。

六、王子がそこで見たものは

やがて、王子は、大きな広い庭に出ました。そこでまず見たものは、どんな恐いもの知らずでも、ぞっとして骨まで凍るようなものでした。何もかも気味の悪いほど、しいんと静まり返っていました。そこにもここにも目に見えるものは、人間や動物がみんな死んだもののように、ぐんにゃり手足を投げ出している姿でした。けれども、そこに立っている、お雇いスイス兵の鼻息は、ぷんとお酒の臭いがし、ぽおっと赤い頬をしているのを見ても、この連中は、みんな眠っているのだということがすぐ分かりました。しかも、その手に持った茶わんには、まだぶどう酒のしずくが残っているので、仲間とお酒盛りの最中、眠ってしまったのだということまで知れました。

王子は、それから大理石を敷きつめた大廊下を通って、階段の上まで行って、番兵のつめている部屋に入りますと、番兵らは鉄砲を肩に乗せて並んだまま、ありったけの高いびきをかいて寝ていました。それからまた進んで、幾つかの部屋を通って行きますと、どの部屋にも、紳士たちや貴婦人たちが立っているものも、腰をかけているものも、みんな、たわいなく眠りこけていました。とうとう、おしまいに入ったのは、残らずが金ずくめのきらきらしい部屋でした。そこに立派な寝台が据えてあって、四方の帳（垂れぎぬ）残らず上げた中に、それこそこの世に二つとない美しいものが現れました。たぶん十五、六くらいの年頃のお姫様が、神々しく光り輝く姿で眠っていたのです。あっと、驚きながら、王子は震える足を踏みしめ踏みしめ、その前にひざまつきました。

さあ、これで魔法の力もいよいよ尽きたのでしょう、王女は、ふと目を覚ましました。そして、何とも言えないやさしい目で、じいっと王子のほうをながめました。「……王子様、あなたでございましたの」と、お姫様はそう言って、にっこりしました。「……ずいぶん待っていただきましたのね」と言いました。

王子は、この言葉を聞くと、何と言って心の喜びを言い表していいか分かりませんでした。王子は、自分のことよりもどんなにか余計にお姫様のことを思っているか知れないと言いました。二人の話は、話すというよりも、泣いていると言ったほうがいいほど、ただもうしどろもどろなものでした。言葉は、淀みがちでしたが、やさしい心の泉は、かえって、勢いよく流れ出しました。それに、王子のほうは、きまりは悪いし、ただ驚いているばかりなのに、王女のほうは、なにしろ百年のあいだ、妖女がおもしろい夢を、それからそれと見通しに見せていてくれたのですから、いくら話しても話しても話のたねが尽きるということがないのです。ですから二人は、かれこれ四時間もぶっ通しに話し続けていて、そのくせ話したいことの半分も話しきらずにいました。

そうこうするうち、お姫様と一緒にお城のそこでもここでもみんなが目を覚ましました。誰も彼も自分自分の仕事を思い出しました。ところで、みんなは、さしあたり、ほかに苦労もくったくもありませんでしたから、真っ先にお腹が空いて、倒れそうに思いました。女官頭は、ほかの人たちと同じにひどくお腹が減って、我慢できないほどでしたから、

だしぬけに大きな声で、お姫様、お夕飯のお仕度ができましたと、申し挙げました。王子は、王女のお姫様を助けて立ち上がらせました。お姫様は、ずいぶん立派な風をしていましたが、なにしろそれは百年前に流行った、王子のひいおばあさんの着物と同じようだということを、さすがにお姫様に向かって言うことは遠慮していました。いくら流行遅れな風はしていても、それがために、王女の美しさにも、かわいらしさにも、いっこう変わりはなかったのですからね。

さて、二人は、鏡の間に出て行きました。そこで夕飯の食卓について、王女付きの女官たちがお給仕に立ちました。その間、バイオリンだの、木笛だのが、百年前の古い曲を奏ました。それは、百年前の古い曲に違いありませんでしたが、りっぱな音楽であることに変わりはありませんでした。――食事が済むと、時を移さず、大僧正は、二人をお城の礼拝堂へ案内して、ご婚礼を済ませました。女官頭は、二人のために帳（垂れぎぬ）を引きました。

七、結末は……

二人は、その晩、ほんの僅かしか眠りませんでした。王子は、あくる朝、王女と別れて町へと帰りました。お父さまの王様が待ちこがれておいでになるところへ帰って行ったのでございます。――王子は、狩りをしているうち、森の中で道に迷って、一軒の炭焼き小屋に泊まって、チーズや黒パンなどを食べさせてもらったことなどを話しました。お父さまの王様は、人のいい人でしたから、王子の言うことをほんとうになさいました。けれど、お母さまのお妃様は、もうさっそく、王子にはお嫁さんができていることをお悟りになりました。――それから二年経ちました。王女には二人も子供が生まれました。上の子は、女の子で、これは「朝」という名でした。下の子は、男の子で、これは「昼」という名でした。そのわけは、弟のほうが姉さんよりもずっと立派で美しかったからでございます。

それからまた二年経って、王様がお亡くなりになって、王子が新しい王様の位につくことになりました。そこで初めて、天下晴れて、王女と結婚の次第を国じゅうに知らせました。そうして立派な儀式を整えて、あらためて、眠れる森からお姫様をお迎えになりました。王女は二人の子供を両わきに乗せ、美しい行列の馬車を揃えて、王様のお城に乗り込みました。……

美しい立派ないい心を持った相手を待っているということは、難しいことです。でも、待つことによって、幸福は増しこそすれ、減るということはありません。（完）

＊　＊

長靴(ぐつ)をはいた猫(ねこ)

（ペロー童話集）

長靴をはいた猫

一、三人の息子への財産分け

昔、あるところに三人息子を持った「粉ひき男」がありました。もともと貧乏でしたから、死んだあとで子供たちに分けてやる財産と言ったら、粉ひき臼をまわす風車と驢馬とそれに猫一匹だけしかありませんでした。さて、いよいよ財産を分けることになりましたが、公証人や役場の書記を呼ぶではなし、しごく無造作に、一番上の息子が「風車」をもらい、二番目の息子が「驢馬」をもらい、そして、末の息子が「猫」をもらうことになりました。末の息子は、こんなつまらない財産を分けてもらったので、すっかりしょげ返ってしまい、「……兄さんたちは、めいめいにもらった財産をいっしょにして働けば、立派に暮らして行けるのに、ぼくだけはまあ、この猫を食べてしまって、それからその毛皮で手袋をこしらえると、あとにはもう何にも残りゃしない。お腹が減って死んでしまうだけだ」と、末の子は、不服そうにこう言いました。

二、猫がしゃべって言うには、

すると、そばでこれを聞いていた猫は、何を考えたのか、ひどくもったいぶったしかつめらしい様子をつくりながら、こんなことを言いました。「……旦那、そんなご心配はなさらなくてもようございますよ。その代わり、わたしにひとつ袋をこしらえてください。それから、ぬかるみの中でも、ばらやぶの中でも、駆け抜けられるように、長靴を一足こしらえてください。そうすれば、わたしがきっと旦那を幸せにして上げますよ。ねえ、そうなれば、旦那は、きっとわたしを遺産に分けてもらったのをお喜びなさるに違いありません」と言うのでした。――主人は、猫の言うことをそう大してあてにもしませんでしたが、ただ、この猫がいつも鼠を捕る時に、後ろ足で梁にぶらさがったり、小麦粉をかぶって、死んだふりをして見せたりして、なかなかずるい離れ技をするのを知っていましたから、何かがうまく行けば、さし当たりの難儀を救ってくれる工夫があるのかも知れないと思って、とにかく、猫の言うままに「袋と長靴」をこしらえてやりました。

三、猫は、兎捕りを始める

猫吉親方は、さっそく、その長靴を履いて、袋を首にかけました。そして、二足の後ろ足で立っては、なかなか気取った格好で、兎をたくさん放し飼いにしてあるところへ行きました。そこで、猫は、袋の中に「ふすまとちしゃ」（野菜）を入れて、遠くの方へ放り出しておきました。そこから、袋のひもを長くのばして、その端をつかんだまま自分はこちらに長と寝転んで、死んだ振りをしていました。こうして、まだ世の中の嘘を知らない若い兎たちが、何の気なしに袋の中のものを食べにもぐり込んで来るのを待っていました。案の上、もうさっそく、むこう見ずの若い兎たちの一ぴきが、その袋の中へ飛び込みました。猫吉親方は、ここぞと、すかさずひもを締めて、その兎を袋の中に閉じ込めてしまい、そうして、それをえいやっと担いでは、鼻高々と、王様の御殿へと出か

けて行って、お目通りをお願いするのでした。

四、王様と猫吉との会話

猫吉は、王様の御前へ出ると、うやうやしくお辞儀をして、「……王様、わたくしは、主人カラバ侯爵からの言い付けで、今日、狩場で取りました獲物の兎を一匹、王様へ献上に上がりました」と言うのでした。カラバ侯爵というのは、猫吉がいい加減に自分の主人に付けた名前ですが、王様はそんなことは御存知ないものですから、「……それはそれはありがとう。ご主人にどうぞよろしく御礼を言っておくれ」と、仰るのでした。一方、猫吉は、万事うまく行ったと、心の中ではそう思いながら、「……はいはい、かしこまりました」と、申し上げて、ぴょこぴょこ、お辞儀をして帰って来ました。

その後また、猫吉は、今度は、麦畠の中に隠れていて、例の袋を開けて待っていますと、山鳥が二羽かかりました。それを二羽ともそっくり捕まえて、兎と同じように王様の所へ持って行きました。――それから二月、三月の間というもの、始終カラバ侯爵のお使いだと名乗っては、いろいろと狩場の獲物を王様へ献上しました。そしてそのたんびに、猫吉はお金をいただいたり、お酒を飲まされたり、たっぷりお持てなしを受けるうちに、だんだん王様の御殿の様子が分かって来ました。

五、王様の馬車が川辺を通ると

ある日のこと、猫吉は、いつものように狩場の獲物を献上しに行きました。すると話のついでに、今日、王様が美しいお姫様を連れて、川へ遊びにお出かけになるということを聞き込みました。そこで、猫吉は、さっそく帰って来て、主人に話しました。「……もしもし、もし旦那がわたしの言う通り何でもなされば、あなたはじきに幸せになりますよ。それも大して難しいことではないんですよ。旦那はただ今日、川まで出かけて、わたしの教える通りの所へ行って水を浴びていればいいんです。そうすれば、あとは万事、わたしがいいようにしますからね」と、言うのでした。

カラバ侯爵は、そう聞いても、何が何だかちっとも訳が分かりませんでしたが、何でも彼でも、猫吉の言う通りにしました。さて、丁度、猫吉の主人、すなわちカラバ侯爵が水につかって体を洗っている時、そこへ王様の馬車が通りかかりました。すると、猫吉は急に、火のつくような金切り声を上げて叫び立てました。「……助けてください。助けてください。カラバ侯爵が溺れそうです」と。すると、王様は、この叫び声を聞くと、何事かと思って馬車の窓から首をお出しになりました、見ると、しきりに怒鳴っているのは、これまでにたびたび狩場からいろいろと結構な獲物を持って来てくれた猫なので、王様は、おそばの家来に、早く行って、カラバ侯爵をお助け申せと言い付けるのでした。

家来が、急いで川へ下りて行って、カラバ侯爵を引き上げている間に、猫吉は王様のところへ出かけて行きました。「……私どもの主人が、川につかって体を洗っておりますと、悪者がやって来たのでございます。主人はずいぶん大声で何度も、どろぼう、どろぼうと申しましたのですが、とうとう悪者は、着物を盗んで持って行ってしまいました。ですから、すぐに着る着物がございません」と、猫吉は、こう王様に訴えました。実は、

その着物は、大きな石の下に隠しておいたのです。けれと、猫の言うことがさも本当らしく聞こえるので、王様は、御殿の衣裳部屋の係に言い付けて、「……一番上等な着物を急いで持って来て、カラバ侯爵にお着せ申せ」と、仰るのでした。

六、王と一緒に旅する道々で……

王様は、侯爵を大へん丁寧にもてなして、ご自分の立派な着物を着せました。ところで、猫吉の主人は、生まれつき立派な様子の男でしたから、その着物を着ると、いかにも侯爵らしい上品な人柄になりました。それを見た王様のお姫様は、すっかり侯爵が好きになりました。そこで、王様は侯爵に勧めて馬車に乗せて、一緒に旅をすることにしました。――猫吉は、自分の計略が上手く当たったので大得意で、馬車よりも先へ歩いて行きました。少し行くと、牧場の草を刈っているお百姓たちに出合いました。すると猫吉は、「……もうじき王様が馬車に乗ってお通りになるが、その時、この牧場は誰のものだ、と言ってお尋ねになったら、これはカラバ侯爵のものだと、お答えしなければいけないぞ。もしそうしなかったら、それこそ植木鉢に生えた小さな草を引っこ抜くように、お前たちの首を引っこ抜いてしまうぞ」と言って、すっかりお百姓たちを脅し付けました。

王様が、やがてそこをお通りになりますと、なるほど猫吉の思った通り、この牧場は、誰の者だとお尋ねになりました。けれどお百姓たちは、すっかり猫吉に脅かされていましたから、「……私どものご主人、カラバ侯爵様のものでございます」と、みんな声を揃えて答えました。――王様は、まんまと騙されておしまいになりました。そして、侯爵に向かって真面目にお喜びを仰いました。「……どうも大した土地持ちでおいでだな」と。そこで、侯爵は、すかさず、その後について、「……ご覧の通り、この牧場からは、毎年、なかなかたくさんな取り入れがございますので」と申すのであった。

まずこういうやり方で、猫吉親方は、いつも馬車の先に立って歩いて行っては、麦刈り、草刈りをしている男とみると、同じようなことを言って脅しました。「……王様がお通りになったら、これはみんなカラバ侯爵の畠でございますと言うのだ。そう言わないと、お前たちみんな挽き肉にしてしまうぞ」と言うのでした。

そう言って歩いた後に、すぐ王様は通りかかって、麦畠も、牧場もみんなカラバ侯爵のものだと聞かされました。そのたんびに、王様は、カラバ侯爵が大変な広い領地を持っているのに、すっかりびっくりしておしまいになりました、そうしてそのたんびに侯爵に向かって、「……どうも大したご財産で」と言うのでした。

七、猫吉と人喰い鬼との対決

この間に、猫吉親方は、一人先にどんどん歩いて行って、とうとう人喰い鬼が住んでいる立派なお城へ来ました。この人喰い鬼は、世にも素晴らしい大金持で、王様がみちみち通っておいでになったカラバ侯爵のものだという広大な領地も、実はみんな人喰い鬼のものでした。猫吉は、この人喰い鬼のことをよく聞いて知っていましたから、その時、ずんずんお城の中へ入って行って、「……ご近所を通りかかりましたのに、あなた様の御機嫌も伺わずに黙って通る法はございませんので、お邪魔に上がりました」と、さも心

から敬っているように申しました。

それを聞いた人喰い鬼は、すっかり喜んで、人喰い鬼相応な礼儀で、猫吉をもてなしました。――さて、ゆっくり休ませてもらったところで、猫吉は、おそるおそる、「……あなた様は、ご自分でなろうと思えば、どんな獣の姿にもおなりになれるのだそうでございますが、それでは、獅子とか象とか言ったような、あんな大きな獣にもおなりになれるのでございますか」と尋ねました。すると、人喰い鬼は、早口に、「……なれなくってどうする。よしよし、嘘でない証拠に、一つ、獅子になって見せてやろう」と。

こう言って、いきなり獅子になってしまいました。猫はすぐ鼻の先に大きな獅子がふいに現れたので、あわてて長靴のまま、危ないも恐いもなく、軒の懸樋の上に駆け上がりました。しばらくたって人喰い鬼がやっと元通りの姿になったのを見すまして、猫吉はそろそろ懸樋から降りて来ました。「……どうも、実に驚きました。私は、今にも一掴みになさるかと思って、ぶるぶる震えていたのでございますよ。ところで、これも人から聞きました話で、あてにはなりませんが、あなたはまた、ずっと小さな獣、例えば、鼠なら、二十日鼠のような小鼠なんかにでも、なろうと思えばおなりになれるということですが、まさかねえ、こればかりはとても信じられませんが」と、こう言って、猫は、疑い深いような目をしました。「……なに、信じられん」と、人喰い鬼は怒って叫びました。「……よしよし、すぐ小鼠になって見せよう」と。――人喰い鬼は、言う間に、一匹の二十日鼠に変わってしまいました。そして、ちょろ、ちょろ、床の上をかけまわりました。猫吉はしめたと言うなり、すばやく小鼠に飛びかかるが早いか、頭からむしゃむしゃと食べてしまいました。

八、立派なお城の中へと王様を

その時、お城の外のつり橋を王様の馬車の渡って来る音が聞こえました。猫吉は、その音を聞きつけると、さっそく、お城の門のところへ出て行って、王様にこう申しました。「……さあ、どうぞ、王様には、カラバ侯爵のお城にお入りくださいまするよう」と。すると、王様は、さっきからこのお城に気がついていました。そして、誰のお城だか知らないが、中はさぞかし立派だろうから入って見たいものだとお思いになっていたところでした。ですから、猫吉がそういうのを聞くと、ますます驚いておしまいになりました。「……なに、これも侯爵のお城。いやどうもお庭と言い、建物と言い、こんな立派なお城は見たことがないわい。では、拝見しよう。どうぞ案内を頼みますぞ」と言うのでした。

王様が馬車から降りると、猫吉は、その後からついて行きました。カラバ侯爵はお姫様に手を貸して、そのあとに続きました。やがて大広間に入ると、お飾りしたテーブルの上に、立派な御馳走が並んでいました。実は、この御馳走は、今日、訪ねて来るはずの友だちのために、人喰い鬼が支度しておいたものでした。けれども猫吉は、それがわざわざ王様やお姫様のために用意させてあったもののように見せかけました。人喰い鬼の友だちも、王様がおいでと聞いて、遠慮して帰って行きました。

やがて、みんなはテーブルについて、御馳走を食べました。王様は、お姫様と同様、侯爵の立派な人柄にすっかり惚れ込んでおしまいになりました。その上、侯爵が大変お金持なのを知って、なおなお好もしく思いました。そこで、五、六杯、杯を上げてから、王

様は、「……どうでしょう、侯爵、おいやでなかったら、姫と結婚してくださいませんか。あなたは、私どもにとっては、申し分のない方です」と、言うのでした。

侯爵は、その時、うやうやしく敬礼したのち、王様の申し出された名誉を喜んでお受けすることにしました。そうしてその日、さっそくお姫様と結婚しました。しかも、猫吉は、大貴族に取り立てられたので、それからはもうやたらに鼠を取ったりしないで、気楽にその日その日を送りました、と、さ。

さて、これは、親譲りの財産にぬくぬく暖まっているよりも、若い者は、自分の智恵と腕とを元手に自分の人生を切り開くに勝るものはないということなのです。（完）

＊　＊

「参考文献」

※底本「赤ずきん」グリム兄弟・楠山正雄訳（「青空文庫」）
※底本「ジャックと豆の木」英国（イギリス）昔話・楠山正雄訳（「青空文庫」）
※底本「ヘンゼルとグレーテル」楠山正雄訳（「青空文庫」）
※底本「砂かぶり」（シンデレラ）大久保ゆう訳（「青空文庫」）
※底本「星の銀貨」グリム兄弟・楠山正雄訳（「青空文庫」）
※底本「蛙（かえる）の王様」グリム兄弟・楠山正雄訳（「青空文庫」）
※底本「いばら姫」グリム兄弟・楠山正雄訳（「青空文庫」）
※底本「ラプンツェル」グリム兄弟・金田鬼一訳（「岩波文庫」）
※底本「ルンペンシュティルツヒェン」楠山正雄訳（「青空文庫」）
※底本「白雪姫」グリム兄弟・菊池寛訳（「青空文庫」）
※底本「ブレーメンの町楽隊」グリム兄弟・楠山正雄訳（「青空文庫」）
※底本「灰だらけ姫」（サンドリヨン）楠山正雄訳（「青空文庫」）
※底本「眠れる森の美女」ペロー童話集、楠山正雄訳（「青空文庫」）
※底本「長靴（くつ）をはいた猫（ねこ）」ペロー童話集・楠山正雄訳（「青空文庫」）
※底本「グリム童話集一二」金田鬼一訳（「岩波文庫」）
※底本「ウェブのウィキペディアや童話アニメ、その他」を参照。